
荒んだ世の中での愉快的な学園生活 2nd

高速左フック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

荒んだ世の中での愉快的学園生活 2nd

【Nコード】

N5122L

【作者名】

高速左フック

【あらすじ】

世界に魔法が使えるようになってから、3000年たった世の中でのお話。

2ndと言っていますが、3rdですw

ここから読んでも馴染みやすいお話ですので、どうぞ読んでやってください。

第一話

『ターゲット、ただいま三名の護衛をつけて市内を散策中』

『散策、何の目的もないのか?』

『はい、すぐ後ろに尾けさせている。』

他の構成員が彼、漆黒の魔道士本人の口からはつきりと聞いたそのので、間違いないと思われます』

『ふむ...』

尾けられている...。

おそらく学園寮から出た時から尾行を始めているのだろう、という事は白鳳学園以外の部外者に尾けられたのだと勘が冴えた。

『ですが、よく飽きませんね』

『どういう事かな?』

『ほぼこの前と同じルートを通って、またラーメンとライスですよ...』

『最初、尾行をした時あれには私も驚いたよ、200円だからね』

『.....』

『すまない、でも気をつけてね…』

『どうしましたアルマ様？』

『どうやら、彼にも考えがあるらしい。そのまま尾行し続けてやるんじゃないか』

目が合った…。

これも勘というのだろうか、おそらく今、目が合ったこの人がそうなのだろう。

構わず精算して食後独特の深呼吸して、市内を散策を再開していると、ようやく二人で尾行をしているのだなと理解した。

そして、自分の周りには、いろんな意味を込めて合計五人…。

しかし、組織は違う。

「おい、靴紐がほどけているぞ？」

ある場所へ辿りついたので、ワザと自分の能力で靴紐を解いたのを指摘されたので、言われたとおり身を屈め、その拍子に置き手紙をする。

今、ここで組織の名前を挙げるなら、過去を振り返らないといけない。

今回ばかりは、それを何回も繰り返す事になるだろう。

では、事の発端を振り返ろう…。

……。

「ふう」

水面から地上へ、泳ぐという行為を終えたレフィーユは水着から晒された白い素肌としなやかな肢体で周囲を釘付けているとユカリがジューズを差し出してきた。

「お姉さま、お疲れ様です」

お姉さまと言われた同世代の女性のレフィーユは、髪をかき上げてそれを受け取り。

「お姉さま、次は…」

「すまないが、少し休ませてくれ」

と言って、ほぼ独占していたユカリの誘いを終わらせて、ジューズ片手にある人物を探す。

その人物、シュウジ・アラバは…。

「うへええ…」

海パン一丁、ジャグジーにて、だらしない声を上げてくつろいでいた。

一通り、泡のマッサージを受けたら、裏返し、また違う角度から

の刺激を受けているとやっぱりやってきた。

「せっかく、こういつところに来てたのもう少し別の楽しみ方をしてみたらどうだ？」

そっいいながら、隣に座り『ふう』とため息をつくと聞いてきた。

「しかし、珍しくお前がこういつところに来てきたな？」

彼女の『こういつところ』と言っようにここは『プール』ではない。

ここは自分達の市内に少し離れたところにある、浴に言う『高級ホテル』である。

自分はこの気持ちよさそうに湯船に浸かっている彼女の誘いでやってきたワケだが、少し特別なワケもある。

「ふん、アンタが珍しく姉さんの誘いでやってくるなんて、このイベントに何か悪いことの起こる前触れかしら？」

重要な催し物の際に護衛を承る、白薔薇学園の治安部、そして彼女の妹であるセルフィの水着姿を見ながら、背伸びをしながら間違いない『ここにあるのだな』と思った…。

「『漆黒の魔道士』がやってくるのかもな？」

「げっふん、げふん！！」

「き、汚いわね、でも、冗談抜きでよく来たわね。あんな事があ

ったのに？」

セルフィの言う『あんな事』とは、遡る事、数日前になる…。

第二話

「この前はごめん、オレも初めてでさ。

どうしていいのかわかんなくて…ごめん、理由になってないよな。」

もう何件目になるだろうか、彼は携帯の留守電にしきりに謝っていた。

その日は彼の両親が旅行に行く日であり、明日まで家では自分一人、彼は決心して、始めて出来た彼女を誘ったのだ。

だがさっきも言った様に、こういうのは『初めて』な彼は、半ば強引に事を進めたため、平手打ち一発、おかげで彼女を走り去らせてしまった。

謝まろうと何度携帯を掛けても、当然の事だろう。

…出てこない。

掛ける度、掛ける度、降り掛かるのは自分自身への後悔…。

『どうして、あんな事をしてしまったのだろうか？』

何度目か脳裏に焼きついた頃には、いつのまにか五日が過ぎていた。

そんなある日、彼の携帯に一通のメールが届いた。

今から、会える？

…彼は走った。

場所は、初めて出会った公園。

資産家の両親を持つという理由以外で、初めて自分が好きだと言った女性の下へ。

息が苦しい…。

元々運動は得意じゃない。

だけど、それ以上に彼女が愛しいから、好きだから、その感覚だけが彼を走り続けさせた。

倒れ込むように公園に辿りついた。

そこには、自分の好きな笑顔を浮かべた彼女がそこにいた。

走った後の肌寒さだろうか、夜風がとても冷たい事に気付くと彼女は口を開いた。

「私もね、嬉しかった。だけど緊張してて…。

あの時、とても怖かったんだ…。」

『ごめん』と軽く謝るが、その表情が自分の胸に突き刺さる。

悔しい…。

どうして、その緊張を理解してやらなかったのだろう。

「ごめん…」

これ以上何も言えない自分がとても無様だ。

彼女はただじっと見ていたので、逃げる様に顔を背けてしまっている、ゆっくり近付いて…。

とすん…。

彼女は彼の胸に頭を埋め、こっぴどい。

「身体、冷たいね。」

くすくすと笑っていたが、彼女方がとても冷たい。

一体、どれくらい待たせたのだろうか？

「今日ね、私の家も旅行に行つてて、誰もいないから…。

私の家で暖まって行ってよ。

そして私に、勇気の出し方を…教えてほしいな」

そう言つて、夜の公園で二人の男女は口付けを交わした。

。

「…ふむ、お前にこんな趣味があったとはな。

しかしどうしてこの手の資産家の男というのは、この手の女に引
つかるのだろうか。」

あからさまに玉の輿になるための計画ではないか？」

そこではレフィーユを隊長として女性で組織した。

…抜き打ち部屋チェックが行なわれており。

その同じ治安部で自分の名前を呼ぶ男は、最悪な事に、いや、彼
女達の目的なのだろう。

明らかに男女間で流されては気まずくなるROMを発見され、そ
の場得上映会が行われていた。

…一種の羞恥プレイである。

「大体こんな純情な女などいる訳がないだろう。

それを踏まえてお前はそれなりの家庭ではあるだろう？」

こんな事で欲情するのなら、お前はいつか騙されるぞ？」

レフィーユさん、彼を殺す気ですか？

この男に同情して開けられていたドアから、身を隠すように覗き
見ていると…。

「はあっ!!」

彼女の手には、自身で東方術で作られたサーベル、振り返り様にオーバースロー、そして、ドアを突き破り自分の顔をかする。

「お、お姉さま?」

心配するユカリをよそに、レフイーユはサーベルを抜き、廊下を右、左と見ると今度はサーベルを見ながら…。

「いや、気配がしたのでな…。少し見張りを数人つけよう」

そう言って、しばらくするとドアの辺りから見張りが二名現れたので、これ以上は無理だと偵察を打ち切ることにした。

「どうじゃった、アラバ?」

「連中…、マジですね」

イワトだけではない、このイワトの部屋には自分を含めて6人いる。

その5人が自分の『マジですね』言った事に落胆の色を隠せなかった。

「狙いはアレか?」

「おそろく…」

少し落ち着きそうと思った、しかし、落ち着く間もないらしい…。

コンコン…。

ノックが響いた。

それが、ここにいる誰しもが以心伝心する事となる…。

レフィーユさん（ヤツ）が来たと…。

イワトが慌てているので、代わりに自分が出ることによって周囲を頷かせてドアを開けた。

第三話

「はい？」

「おや、ここはイワトの部屋ではなかったのか、どうしてお前が対応に出てくるのだ？」

「私はただ、入り口の近くにいたため、イワトさんの代わりに出ただけですよ。レフィーユさんこそ、威圧感を遺憾なく噴射させて、何をしているのですか？」

「気のせいかな、男性のすすり泣く声や音が徐々に大きくなっているような気がするのですが？」

「ふっ、気のせいだろう、だが確かに今は何かを最中だ、ここを出ないでほしいモノだな」

「えっ、どうしてですか？」

「…どうしてもだ」

そう言って、自分の後方をみて人数を確認しながら。

バタンツッ!!

「ふっ…」

レフィーユに『見張りは置いておくからな』と言われもしたが、ここにいる六人全員、安堵の息を吐き出し、マサカズ・サイトは答

えた。

「なあ、ガトウ、やっぱりレフィーユさんの狙いはコレなんやるか…」

「…だろうな」

そう言っつて、ガトウ・レオナは隣に座るイワトと負けず劣らずの身体を捻り、先ほど言った『コレ』に視線を向ける。

すると双子のキリウとシリウがハモって答えた。

「『回覧板…』」

そして、イワトが六人目の自分に向け、こつ頼る。

「アラバ、どうにかならんのか？」

「無理ですね、ああなったレフィーユさんは誰にも止められませんよ」

そして、再度、ため息が充満したため、思わず全員が『回覧板』に目を向ける。

通称、男の回覧板…。

まあ、最初にあつたような本を集めたモノと、今はそう言っつておこつ。

だが、何故これを『回覧板』と呼ばれるようになった経緯を説明

しておこう。

男という生き物は、その手の本を買っつに至るまで、様々な抵抗があると思う。

だが、男は勇気を持ち、買っつに至る。

しかし、その勇気が時折、災いする。

女性が想定しているより、『過激な』内容の本だと知らずに手にしてしまうという事だ。

本来なら『捨ててしまえば話は済む』と思うだろう、しかし、情けない話だが捨てられない男が世の中には確実にいる。

しかも内容が『過激』だ。

家族、母親に見られたら…。

机の上にも置かず『頑張っつてね』と間違いなく肩を叩かれるだろう

そして、そんな危険なモノを捨てに行くのを誰かに見られでもすれは…

そこで数代前の先輩達はコレを作ったのだ…。

「確か、この回覧板つて、見られたら…自己責任ですよね？」

実際、その混沌カオス、いかなモノかと垣間見た事があるが、大した量になっつていっつとは思っつ。

その募りに募った『混沌』は、男子生徒全員、普段口にする事はない。

バレたら、自己責任なのだ。誰だって、不幸な学園生活は送りたくないだろう？

だが、この目の前に圧倒的な存在感は噂として息をしており、ユカリからレフィーユへ、そして彼女は単刀直入、自分に聞いてきた。

「なあ、アラバ、男の回覧板って知っているか？」

多分、自分はその時、うまく誤魔化したと思う。

だがしかし、周囲の男子生徒全員が確実に氷ついたので。

そして、彼女は理解したのだろうか。

この男は、嘘を着いていると…。

「しかし、今回ばかりアカンやろ、これを守るにしても、相手はあのレフィーユさんやん、素直に降伏した方がええって」

レフィーユ・アルマフィを敵に回す。

それがいかに困難な事か、六人全員、理解はしていたのだが…。

「そこの全員、動くな！！」

っ!?!?

この引くわけ行かない、戦いは…。

バケツが彼女の目の前にすべり降りてくる事で静かに始まったのであった。

第四話

「ちなみに『見つかったら、自己責任』と言った辺りから、もう移動を開始していました」

「アラバ、誰に解説しとるんじゃ？」

六人はイワトの部屋を窓から抜け出し、その部屋から見える白鳳学園、その屋上より引つ張り上げたワイヤーロープを縛り、揺れに反応したバケツが彼の部屋へと滑っていくのを見ていた。

「どうやらドア越しから聞き耳を立てていたレフィーユさんには、ワイヤレスの拡声器に毛布を被せて話していたのが、そこで話したように見えたようやな？」

「じゃが、アラバよ。『レフィーユさんを怒らせる』というには、まだ、少し無理があるんじゃないか？」

「まあ、無理でしょうね…。とっさとはいえ反応されているでしょう。」

今頃『ふっ』と言いながら、叩き切ったサーベルで、この会話の発信源である毛布を取っているトコロでしょうかね」

「スイッチ切れや、じゃが、それを知っててどうしてお前はこれをやろうと思ったんじゃない？」

「そこですよ、だからもう一回、コレを取り付けまして…。」

シヤアア…。

そんな音を立てて、もう一度、バケツは滑っていく、その光景を見て双子の片割れキリウは言った。

「解説付きでそんな事やったら、余計、無理だろ？」

「でしょうね、またサーベルで真っ二つでしょう…。」

「そこなんですよ…。」

何やら鈍い音がして、しばらくして部屋から何やら変化があったので、さすがに自分の部屋だからイワトが聞いてきた。

「おい、アラバ、ワシの部屋から白い煙が出てるが…？」

「ちよ、おま、何やった？」

「この日のためにチヨークを砕いて溜めておいたのですよ。いやあ、いつかこういう時がやって来るとは思っておりましたのでね。」

『存分』に使わせてもらいました。

今頃、調子にのって叩き斬った彼女は、顔を白くしているでしょうね
「うね」

さすがにおかしくなったので『一人で』笑っていると…。

「…メガホンがお前の笑顔のように変形して見えるが、私が真っ白になる事がそんなに面白いのか？」

硬直したのは自分だけではなかった…。

「まあ、確かに私はお前の言うとおり叩き切った、調子に乗っていたのかも知れない…」

古来より、争いと技術は比例関係にあると言われている。

「だがな、ここからお前の位置まで、バケツとは言え、怪我をするくらいの距離を滑ってワケだ…」

この拡声器だってそうだ。

犯人の攻撃や、刺激をしないようにとワイヤレスになり、この位置でも綺麗な音や声を伝えるようになった。

「するとそれを踏まえて私が避ければ、後ろの人間が怪我をする可能性が出来たな。

だから、私は斬り付けたというのは、間違いだとお前は言っのか？」

それは単純な作りであればあるほどに…。

つまり、これには余計な機能の付いていない拡声器である。

それはマイクから拡声器へ声を伝える事が出来るが、拡声器からマイクへは声が伝わらない道理がある…。

道理があるのだが…。

「レフィーユさんの声がマイクから出てるのですが、みんな『引いて』ますよ?」

「ふっ、争い事に威圧感が必要だろう?」

「まあいいだろう、お前がこういう態度に出るのなら着替えてくるまでの間、せいぜい…足掻いておくのだな?」

すると何故かマイクのスイッチが切れた事で、ここにいる六人は誰しもが事態の強大さを思い知っただろう。

「僕らは逃げ出した…」。

……。

「おい、アラバ、一旦、休憩を取りながら確認しよう。」

まず、最大の目標は銀行に駆け込み、銀行にコレを預ける事。

俺たちは今、まとまって逃げているが、今、その集団を抜け出して先頭を走っているのが…ああ…」

確認している最中のレオナだけではない、各自が耳にした通信機が鳴る。

「もしもし、俺やけど、みんなと離れて走って、銀行まで5ブロック先ってトコまで来たで?」

周囲は『おおっ』と、安堵した空気があったが一応『急いで』と

言つと、彼は明るく答えた。

「おい、アラバ、俺はお前より足早いんやで、そこじゃまだ車の音もしてへんのやろ、大丈夫やて」

「そうですね、それは甘いですよ。」

彼女は……」

悪寒が走つた……。

思わず周囲を見回し、おかしさに気付いた。

「車の音がしない。サイトさん、走ってください!!」

「はあ!?!」

サイトだけじゃない、だが一人だけ動揺している状態だったので、誰かしら何がどうなっているのか聞こうとした。

その時である。

ドゴッ……!!

イヤホンが何やら鈍い音を拾つた。

「……おい、サイト、何の音だ?」

レオナの問いかけに、いつもならサイトの明るい声が入って来るのだが、それが無かったので一番早く、異変に気付いた自分にレオ

ナが聞いてきた。

「おい、アラバ、何が起きた？」

「レフイーユさんです…」

「おい、それはないだろう？」

まだなんの冗談だと、みんなは思っていたのか笑顔があった。

「……」

しかし、笑えなかった自分がここにいたので…。

「本当か？」

「ホントです、おそらくですけど、この会話を今、聞いてますよ？」

「じゃが、車も使わんで…」

「隠密性を重視したのですよ」

「それでも、この学園で一番早いサイトに追いつくって、距離的に無理だよ？」

「彼女は、時と場合によっては、世界新で走る事が可能なのですよ。」

時と場合によって…。

この事が後に、いかに自分たちの戦いが無謀なのか思い知る事となるが…。

「とりあえず、周波数変えませんか？」

今はただ戦いは始まったばかりである。

第四話（後書き）

なんだ、この超人レフイーユ…

第五話

周波数を変えたと同じくらいだろうか、学園の方から車の音がした。

みんながわき道に入り、警戒しながら車を見る。

わき道で、しかも一方通行なので入ってこないとはいえ、緊急事態には曲がったりする。

緊張感を持って、誰もが『曲がるな』と思い、その思いが通じたのか…。

『白鳳学園 治安部車両』と書かれた車は直進していくので、ここにいる誰もが安堵した。

さすがの彼女もサイレンをあげるほどの騒ぎにしたくないらしい通り過ぎたのは少しだけだった。

ドアが開かれ、何名かがこっちに向かってきた。

「哨戒…、わき道も見逃すなって事が…」

彼女らしい指示にみんなが動揺する中、レオナは出来る限り冷静に言った。

「落ち着け、車がそこにあると言つ事は、この場所を離れればいいと言つ事だ」

そんな事で冷静になるのは難しいが、双子のシリウは答えた。

「これから別の銀行を目標すって事でいいの、アラバ？」

「そうなりますが…」

「どうした？」

「『目指す』というのではなく、目標さないとけない』でじようね。」

おそらく、レフイーユさんはサイトさんを倒した時点では、どこに行くのかわかってないと思います」

「どういう事？」

「『ただ逃げている』のだと思っていると言つ事です。」

ですが一人、何かしらしくじつた時点で…」

「あの人は、我らの狙いに気付くと言つことか？」

「そうですね。そうなれば銀行を重点的に警備をおく事になるでし
「じよ

「まるで、一巻の終わりじゃのう？」

「その通りだ、ゲンゾウ、ちっ、ここにも哨戒か…」

大きな通路からさらに細いわき道に入り、先頭にいたレオナの言は挟み撃ちとなっていることを示していた、そんな中。

「あつ、レオナ、後ろの哨戒が下がっていくよ？」

「そうか、なら、一旦戻ろう……」

あえてゆっくりと、見つからないように……。

逃亡者達は車の音を確認すると、ようやく安堵した。

「あつ!?!」

その時、キリウは何かを見つけて緊張をしたが、すぐに安心して言った。

「良かった、男だ」

事情を知らない人が聞けば何かしら誤解されそうな言い方だが、今はそんな事は誰も言ってもらえなかった。

何故ならキリウだけではない、いや、その時、みんなはこれだけ味方が増えると考え、キリウは引き入れようと男子生徒に話し掛けようと近寄った。

だが、この時、気付くべきだったのだろう。

彼女が哨戒を命じれば『すみずみまでやれ』と命令する事くらい。

安心しきった、この時のみんなは気付いてなかったが、キリウは

完全につり出され『餌』に触れてしまった。

「えっ？」

しっかりと捕まえられ、さっきの取調べ被害者である男子生徒は通信を入れた。

「みんな、捕まえたよ。このジングウジがさ…」

通信を入れた事により、この男は『あちら側』の人間だとわかったキリウは、必死に足掻いた。

「は、離せ！！」

「いいじゃん、死のう、このジングウジとさあ！！」

しかし、この男も一応、治安部の人間である。取り押さえ方を知っているのでビクともしなかった。

隠れていたイワトがたまらず助けようと身を乗り出したが、

「行くな、ゲンゾウ！！」

レオナが体格を生かし、必死に止めた。

「もう間に合わん、よく見ろ！！」

音だけだが、この音は先ほど聞いた車の音だった。

キリウは自分の西方術で雷を、この男の顔面に一撃、二撃、三撃

と放つが…。

「もう痛くないよ、お前達もさ、あれくらいの痛みを味わえ。楽になれるぞ?」

「だ、誰が!?!」

なおも電撃を流すが、設定以上の身体となったこの男には効かないらしい。

そして、ようやく事態が最悪な展開に向いてきたのが彼自身にもわかるのだらう…。

「キリウ…すまん…」

レオナはただ、そう言って、視線を送ったキリウに頷いた。

だが逃げようとした、その時だった。

「兄ちゃん!?!」

弟のシリウは、取り囲まれるであろう環境の中に飛び込んでいてしまった。

そして、レオナもこう言った。

「ちっ、どつやらここが勝負時の様だな…」

「レオナさん?」

「ここでちまちまと隠密行動をとるより、俺たちがここで時間を稼ぐ」

「レオナ、何を言っとんじゃ？」

返答の代わりに、彼の東方術、金棒を作り出して、何も言わず地面に『ゴン』と音を立てるので、冗談で言ったのではないと思った。

「イワトさん、行きましょう」

「そうだ、行け」

そして、レオナは大きく息を吸い込み、叫んだ。

「我らの勝利のために！！」

第六話

取り囲まれ始めた、双子に向かって走り込んだレオナは金棒を振り抜きながら叫んだ。

「踏ん張れえ!!」

キリウは言われた通りに踏ん張る。そして、そこに取り押さええていた男の腹部に金棒がめり込む。

「おわっ!!」

しかし、この男は金棒で殴られたのにも関わらず、軽い調子で呻くだけだった。

この男は目で追う事によって働く魔力『防御本能』で防がれ、効いてないのかと思うだろう。だが、ここからがレオナの東方術の付加能力である。

男の身体がまるで、金棒にしがみ付いたような形で浮き上がり、そのままレオナは振り抜いて跳ね除ける。

「大丈夫か？」

「レオナ、どうして？」

「ここで俺たちが時間を稼ぐ事になった」

そう言うと、先ほどの男も立ち上がった。

「たった三人で何が出来る？」

その男の言う事に答えるように『無駄な、抵抗はするな』と言いたいのか、その代わり白鳳学園の治安部の女性陣は、各々自分の東方術で武器を作るモノ、すぐに西方術を行使出来るように身構えていた。

「ごめん、オイラがしくじったせいで」

とうとう退路も塞がれ、事態是最悪の一途を辿るのでキリウはさすがに申し訳のない気分になっていたが、レオナは金棒を構えて答える。

「何、今となっては仕方ない事だろう、だが、どうせ捕まるんだ…」

レオナが身構える、その事がどれほど厄介な事なのか、この男も治安部の人間だという事が味方して、周囲は明らかに動揺する。

「派手にやるぞ!!」

レオナは咆哮を上げると、怯んだ女生徒が突っ込んできた。

だが、一向に応戦しようとししない…。

何故ならキリウの雷撃とシリウの西方術、『風』の壁が進路を塞いだから、そんな中でもう一度、金棒がうなりを上げる。

彼の金棒は振る力を当たった相手の体重を『差し引く』事にある。

例えば、レオナの作った、振る力、つまり、当たるまでの距離から計算される一撃が90キロだとすれば、この女性が40キロくらいだろうか、当たった彼女の体重を無い事にしていた。

事件では体重が100キロを超える巨漢を相手にしたことがあり、時折、持ち上げる事のない彼の付加能力ではあるが、今回は女性が中心である。

不利な体制での叩き伏せたりなど、距離のないが突く事を完成させていた。

「おら、どんどんいくぞ!？」

女性に暴行を加えるとは、なんてモラルの低いと思われるだろう、しかし、このレオナの付加能力、実際には戦闘において『怪我』をさせる事には、不向きなのだ。

「な、なんでオレだけ…」

付加能力を解いた一撃が、先ほどの男子生徒を腹部に命中してうずくまる、こつやつて金棒で叩いた方がダメージはあるが…。

『女性に優しいレオちゃん』

そう女生徒に茶化されているレオナの攻勢は続いていた。

だが…。

「残るは一人よ、みんな集中して!!」

15分を超える攻防の中、キリウとシリウが、ついに力尽きて取り押さえられていた。

レオナの最悪は続く…。

「なかなかやるではないか…」

サーベルを片手にあの麗人が澄ませた表情で帰ってきて、周囲を一瞥して聞いてみた。

「女性中心の治安部員が相手とはいえ、一人でここまで立ち回るとは、さすがあの男の周りには骨のあるヤツが集まってくれるものだ」

「往復4キロの道を走ってやってきて、汗一つも掻いてない貴女に言われても、嬉しくないね」

キリウとシリウは引っ立て上げられ、とつとつ彼らから二つの小包がレフィーユの前に運ばれてきた。

「ふっ」

不適な笑みを浮かべサーベルの先端で、上に放り投げ、一、二、三と小包が落ちるまで、サーベルが往復して、それはバラバラになる。

「いいのか?」

「サイトを捕まえた時に、同じような感じのカバンを見つけたのでな。」

おそらく、このようにお前を含め、あと3つ、その中にホンモノの『回覧板』が入っているのだろうか？

…いや正確には『あと2つ』だな」

「いや、わからんぜ、俺が『回覧板』を持っているのかも知れないぞ？」

そう言っつて、レオナは懐から少し厚めの封筒を取り出し、プラプラと振るとレフィーユは自信を持って答える。

「いや、それはニセモノ、お前は言っつてみれば、あの二人を助けるための罠だな」

「どうして、それがわかる？」

「それはお前があゝの二人を助けようとしたからだ。」

もし、あの二人うちのどちらかが『回覧板』を持っていたとすれば、お前達は全員で助けに行っただろう。

だが残念ながら、助けに行っつたのはレオナ、お前だけだ。

じゃあ、今度は私がお前に聞こつ、何故、回覧板を持っつて、ここにやっつて来たのだ？」

レオナは苦虫を噛み潰したような顔をしたが、レフィーユは何か

に気付いた。

「なるほど、だんだんわかって来たぞ…。」

『回覧板』が何であるか」

「ちい…！」

飛び掛り、金棒を振り下ろすが、レフィーユにひらりと避け確信を持って、レオナに言う。

「そして、どこに向かっているのかを…」

「ぬうおおおっ…！」

そのまま金棒の連続攻撃を繰り返すが、レフィーユは避けに徹する。

なぎ払い、袈裟切り、突きを避ける様は、まるで殺陣^{たて}を思わせるような動作に周囲は歓声すら漏れるくらいだった。

とうとうレオナは肩で息を切らせ、対照的にまだレフィーユは余裕である。

「ふっ、少なくとも消耗しきった。今のお前の攻撃は私に当たることは難しいだろうよ」

さあ、レオナ…。」

金棒に左手で掴むので、レオナは息を呑む。

「お前の付加能力は『振る事によって発揮する能力』だ。

すなわち、こうやって密着させてしまえば、振る動作を行なう事など出来ず。

お前の付加能力を生かす事は出来ない。その意味、いや、もうわかるな？」

これ以上、何も言わず振りかぶるのは、覚悟をさせる礼儀なのだろうか…。

多分、疲れきった身体には防御本能は作動しないだろう。

多分、自分はこの一撃で気絶するだろう。

だがレフィーユのみね打ちが迫ってくるというのに、レオナは冷静だった。

冷静に後を託していた。

あとは…任せた…。

そして彼の思考は、そこで途絶えた。

第七話

「まさか、こんな事になるとはのう」

「イワトさん、それは言わない約束ですよ」

「じゃが、アラバ、いくらレフィーユさんが目的地を知った可能性があるとは言っても…」

イワトは窓から景色を眺めていった。

「目の前に銀行があつたんじゃ、電車で移動する事はないじゃろう？」

「一応の用心ですよ。」

正直、悪く言つつもりはありませんが、イワトさん、足が遅いですからな。

それを預けようとして手続きをしている途中で、治安部がやって来たらアウトだったと思いますよ。

大切なのはイワトさんの持っているモノを銀行に預ける事にあるワケであつて、イワトさんは口座を開いてはいますが、物品を預ける『金庫』は持ってないでしょう？」

全員が魔法と言う、武器を手に出るこの時代、銀行は『金庫』という物品を預ける事が出来るようになっていた。

昔から、この『金庫』と呼ばれる銀行の機能はあつたらしく、その歴史は企業、団体、果てまではお金持ちが貴金属を預けるといいう手段ではあつたが、それが一般市民で適用されるようになった。

だが、この金庫という機能には、それを探る事は治安部は権限を持っていない。

警察にしても、よほどの事：死亡、殺人など、重大な犯行が行なわれない限り、探る事が出来ないのである。

そもそも、この計画はサイトのラジコン趣味が講じて、金庫を持つていた事で考え付いた計画でもあつたのだ。

だが想定以上のレフリーユの活躍で、自分たちは手続きというタイムラグを踏まえた上で銀行に向かわなければならなくなり。

イワトと二人になった、今となつては、隣町まで電車で移動しなければならぬ羽目になつていた。

しかし『ガタンガタン』と揺られながら、少しの休息を得られる事はかけがえの幸せを味わつてはいた。

「今なら、逃亡犯の気持ちかわかりそうな気がするわい」

「物騒な事を呟かないでくださいよ」

「じゃが、落ち着くわけないじゃろ。」

今、前に座っているおばちゃんだつて、スパイじゃないかと、なんか身体が緊張しとるんじゃないぞ？

のう、警戒の為に『斧』作つときたいのじゃが？」

「別件で補導されますよ？」

「がはは、じゃがこついう時というのは、落ち着かんからのう。

本気でそう考えていた方がよさそうじゃわい」

「だから、本気でやめてくださいよ？」

「…いや、ワシはここまでじゃ」

「イワトさん？」

「今、白薔薇の戦乙女ヴァルキリーの一人がこつちをずっと見とっての…。

今、ワシの周りが囲まれとるわ…。

どうやらあの人、仕業のようじゃの…。」

白薔薇の戦乙女ヴァルキリー…。

正式にはリスティア学園というが、白い学生服から『白薔薇』と呼ばれて、それを引き立てる紺色の制服を着た治安部精鋭部隊、ヴァルキリーの活躍で、白鳳学園より広い活動管轄区域を持つに至った。

その東方術で統一された戦闘能力は、良い体格をしたイワトが無抵抗のまま降伏がわりに両手を上げるほどであった。

そして、通信機越しにセルフィの声が聞こえた。

「大人しく、それを渡しなさい。」

あと…もしもし、聞こえるかしら？」

通信機からはっきりとセルフィの声が聞こえたので、一瞬戸惑いはしたが出ることにした。

「…はい、なんででしょう？」

「ふん、何をしでかした知らないけど、ああなった姉さん相手に抵抗は無駄な事くらい、知っているでしょう？」

「セルフィさん、まさか設定を超えるなんて思いもありませんでしたよ。」

妹の貴女でも何とか出来ませんか？」

「無理ね、まあ、アンタだって諦める気なんて毛頭ないと思うから、私は勝手に姉さんの言伝を言わせてもらおうよ」

「言伝？」

「ふん、最終警告よ。」

アンタの出方次第では、今回の件は見逃してやるそうよ？」

「それは、ありがたいですね。ロクな事、要求されないのでしょ

けどね?」

「どうかしら、まあ要求としては、

貴女の持っている『回覧板』見せてほしいそうよ?」

「それって、状況が変わらないじゃないですか?」

「ふん、違うわ。

『貴方個人が持っている回覧板』よ」

「セルフイさん、それは出来ませんね」

「あら、貴方が辱めを受けるだけで、周りに迷惑が掛からないのよ?」

「セルフイさん…」

「何よ?」

「今まで、どれくらいの方が犠牲になったかと思っただけですか?」

「死んでないわよ?」

「私の仲間内でも、自分の能力を発揮しないで死んだ者、そして、戦い抜いて死んだ人、今、貴方が殺したイワトさん。」

「そんな犠牲者達のおかげで私は今、立っているのですよ?」

「殺してないし…」

「ですが、その手の本は捨てたので、その交渉は飲めないのですよ」

「あら、男の人って、こういう本を捨てれないと聞くけど？」

「まあ、理由はあるのですがね」

「理由？」

その理由を言おうとした時、何故か息使いが増えたような気がしたので思わず黙ってしまった。

「どうしたのよ？」

「セルフィさん、貴女の周りに誰かいますか？」

「ヒオトさんと、ミュリさんがいるけど？」

「ああ、そうですね…」

「どうしたのよ、まさか二人に言えない理由とか？」

「まあ、そういうトコにしておいてください」

「ふん、大した理由なんでしょうね。」

まあいいわ、交渉決裂という事で姉さんに連絡しておくわよ」

そういって、通信は切れたのであった。

第八話

「姉さん、これでいいの？」

「ああ…、ふっ、セルフイ、不機嫌そうだな？」

「ふん、いくら姉さんでも前の学園の治安部を動かすのは横暴がすぎないかしら？」

「ふっ、随分とご立腹だな」

「ただが二人を捕まえるのに、私たちまで動かす必要なんてなかったんじゃないの？」

「『ただが』か、セルフイ、あの男に常識は通じないというのはお前自身が味わったと思うのだが？」

大体、今だってお前に連絡を入れなければ、危うく隣町に逃げられるトコロだったのだからな」

『ふん』と言ったまま、セルフイはイワトから取り上げた、バッグの中身を見た。

すると毛布に包まれた『はずれ』と書かれた張り紙と出てきたので、不機嫌そうに聞いた。

「で、私たちはこの町の銀行を警備しておけばいいの？」

「…いや、お前たちはそのままイワトを連れて帰って来てくれ」

「どうしてよ、あの人の狙いは銀行に向かう事なんだから、まだ、別の方法でこの町にやって来る可能性だってあるでしょう？」

「構わん、あの男だけは狙いは別だ。銀行に行く事ではない」

「姉さん、狙いがわかったの？」

「まあな、だからこそ、お前たちを使ったワケだが…」

少し間が開いたので、どうしたのかと思ひ聞こうとするその前に声がした。

「どうも、セルフイさん、ご苦労様です」

「貴方!？」

セルフイの驚くように、通信に出たのはアラバ本人だった。

今、彼はレフィーユにサーベルを突きつけられ、自分の部屋にて座らされていた。

「レフィーユさん、よくここにいますとわかりましたね？」

「ふっ、私とてお前が自分の部屋に戻っているとは思ってもみなかったさ。」

だが『回覧板が何か?』と言う事には気付いたのでな。

お前は、この学園のどこかにはいると思っていた」

白々しく、まるでどこぞかのドラマのワンシーンを思わせるそぶり、そんな中で自分は言うなれば犯人役のようにとぼけてみた。

「『何か』なんて、随分と大きいですね。

回覧板なんて、レフィーユさんの想像通りのモノですよ？」

「だからだ、アラバ…。

だから、お前達は、そこで矛盾を生んでいる」

「矛盾…ですか？」

「噂によるとその回覧板は、何代も続く如何わしい本やROMを保管している象形を指すそうだ。

だが、サイトはカバンだった。

キリウ、シリウの双子は、小包…。

レオナに至っては封筒だ。

おそらくイウトも何かの入れ物に入れて、逃げ回っていたそうだが…。

考えても見る、何代にも渡る大量の本やROMを運ぶに身は軽すぎやしないか？

だからレオナを捕まえたトコロで、セルフイに途中を任せて、あの場所に電話を入れてみる事にしたのさ」

「あるトコロ？」

「銀行だ。そこで私はこう聞いてみた。

そちらに白鳳学園の名義で何か預かっていないか？

…とな」

「それで何かわかりましたか？」

冷静に聞きながら、一生懸命に逃げる動作をとれるようにスキを伺うが、しかし、さすがレフィーユ・アルマフィという女である。

その心理を読み取ったかのように、サーベルを肩に当てて『座れ』と押し付けて言った。

「様々な白鳳学園という名義があったが『白鳳学園男子』という名義が一件、目立つようであったさ。

当然、私達、学園内の事とはいえ、治安部に金庫の中身を探る権利はない。

だが、しかし…確信に変わった事がある。

回覧板とは何か…という事だ。

回覧板とは、その金庫を開ける事が出来る権利、すなわち白鳳学

園男子という『団体』である証明書と、その暗証番号だ。

そして、お前のホントの狙いは、五人を圏にして、その回覧板を私達に気付かれずに隠す。

それがお前の本当の作戦だ」

思わず回覧板に目をやってしまうが、幸い彼女には気付かれはしなかった、しかし、ここにある事は間違いないことである。

おそらく、彼女はそれを見つけてしまうだろう。

そうなれば残る手段は一つである。

「レフイーユさん、私がそう言われてすんなりと渡すと思いますか？」

その一瞬の隙を見逃すまいと、神経を尖らせる。

しかし…。

「ああ、思っていないさ。

今だって、お前は隙を伺っている感じがするからな。だから、今回はお前の弱点を突かせてもらおう」

『入れ』と言うので、後ろを振り向こうとする。

そこには…。

「お前は人がいると、実力を出せない男だ」

レフィークの他にぞろぞろと治安部員が入ってきた。

そう、漆黒の魔道士である彼の事を知っているのは、レフィーク
だけなのだ。

第九話

漆黒の魔道士…。

それは武器を作り出す、東方術に対して、火、水、風、土といった『現象』を作り出す西方術にて、『闇』を生み出す者の呼び名である。

世界唯一、闇を構築する使い手にして、しかし、その実態は犯罪者と『世間では』認知されている。

様々な悪評を積み重ねてきた、そんな人物の部屋をただの学生と思い、自分の部屋を搜索される。

そんな奇妙な光景を目の当たりにしていたが、他にも気になる事があった。

「レフィーユさん、随分と嬉しそうじゃないですか？」

相変わらず、後ろに立ち座らされたままの体勢ではあるが妙に嬉しそうだったのがわかった。

「そんなに大の男の部屋を探索するのが面白いですか？」

「ふっ、お前は特別さ。何しろお前には『昔から』煮え湯を飲まされていただからな。それに何しろ、お前の鼻をようやく明かせたのだ。

嬉しくないわけがないだろう？」

まるで勝利を確信したように勝ち誇るが、実際その通りだった。

そう、漆黒の魔道士である事は、この学園ではレフイーユしか知らない秘密。

それは自分が『闇』を使わない事だけで隠せる問題ではない。自分の元々ある身体能力を使わない事で成り立つのだ。

つまり彼女以外、他の生徒が見ている前では、自分はまったくの無力なのだ。

「ふっ、相変わらず、不便な男だな」

なおも時と場合によるレフイーユの反則設定が猛威を振るう中。

「レフイーユさん、それらしき箱を見つけました」

ととと見つかってしまい、絶体絶命の時、彼は祈った。

作者よ、どうして私にあのような反則設定はないのでしょうか？

「そうか、良くやった」

作者は、わかっていたはずです…。

「ダイヤル式か」

いつかあの反則設定が私の身に降り掛かる事くらい。

「番号を吐かせますか？」

ほら、おかげで私は数年間築き続けた男の回覧板の暗黒せきにんを背負わなければならぬといけません。

「いや、この程度なら……」

どうか、私の事を哀れに思うなら……。

「切り裂ける……！」

私に力を……！！

時。
回覧板の入った小箱の重量を測るように、彼女は軽く放り投げた

「……」

「ん、なんだ？」

「ま……」

「ふっ、待つわけないだろう？」

なおも彼は……。

「魔道……い……」

意味不明な呟きに怪訝しようになるが揺ぎ無い勝算の中、構わず

自分の目線まで小箱を放り投げた。

はじめの敗因といえた。

敗因とは、彼からサーベルを離れた事が、それとも自分が何も出
来ないとタカをくくった彼女の慢心にか、彼の心が今の心境を捉え
ていた。

味わうがいい、自由の暴君よ…。

そして、彼の初めてとなる、時と場合による反則設定に心から声
が出た。

「魔道士キック!!」

攻撃しないという前提により、安心しきった油断か漆黒の魔道士
という前提のとび蹴りは、男子生徒がふざけてやるようなスピード
のないとび蹴りではなく。

「うおっ!!」

本当に人をけり倒す事の出来までに至る洗練されたスピードのあ
る強襲に、レフィーユは体を捻って避けるしかなかった。しかし、
身体と一緒に行動できないモノがあった。

「しまった!!」

両者が視線が一瞬交差して目が合う、宙に浮いたままの回覧板を
レフィーユは取られると思ったのだらうか、自分の捻った身体でも
っとも近い左手を伸ばすと触れた途端、重みが増した。

考える事は同じだった、両者の右手と左手が回覧板を中心に右手と左手が合わさるような体勢で硬直していた。

「ふっ、無駄な抵抗だと…言ったはずだ」

その時、更なる敗因が…。

「コイツを取り押さえろ」

彼女を襲った。

「なっ!？」

見るとレフィーユの指先がゆっくりと持ち上がっていた。

「レフィーユさん知ってますか、人間、バスケットボールは片手で掴む事が出来ても、握る事は出来ないらしいですよ？」

つまり、貴女がこうやって握るといふ行為から、掴むという一つ前の行為に戻す事が私は出来るという事を貴女は知っているでしょう?」

闇が彼女の手の平を押して生じた勝機を文字通り『むしり取り』全貌に群がる治安部、しかし、今日の彼は一味違っていた。

「待ちなさい」

「魔道士キック」

「逃がさん」

まるで新たな技に酔いしれるように…。

「魔道士キック」

それしかないのを露呈させるかのように…。

「魔道士キック」

「えっ、どうして魔道士なの？」

「…キック」

治安部、数名を蹴散らし、着地と同時に玄関から逃げ去った。

「追いましょっ」

そう言って周囲は士気が上がる中、レフィーユは冷静に言った。

「いや、もういい…」

「レフィーユさん？」

「もう検討は付いている、ここからは私一人で行かせてもらおう。

お前達は、他の連中の手伝いをしておいてくれ」

第十話

「なるほど勢い良く部屋から飛び出るところを見せて、自分の部屋のドアを『能力』で開き難くすれば、お前がまさか同じ作戦を取るとは、誰も思わないのだろうか。」

「見てみる、何の警戒もなく、みんな出て行くぞ？」

寮の四階にて、彼は学園外に逃げると見せかけて、ここに残ると同じ方法をとっていた。

仕方のない事だろう、学園を出るとしてもまず外を警備に回っている治安部に見つかる可能性があるのだ。

それがセルフィ^{ヴァルキリー}達にでも見つかりでもしたらそれこそ『終わり』だった。

となると学園内、いや、この場合、近くであればあるほど見つかり難くなるという犯罪心理を付いたレフィーユを評価するべきなのだろうが、そして、まだ見逃す気などない意思表示をしているのかサーベルが握られられたままだった。

「感謝はしてほしいものだ。『あの魔道士キックって、何ですか？』誰かさんが後処理もせずに逃げたのだからな」

『言い訳するのに大変だった』と、腰に手を当ててため息をつくのを見ていると少し気になる事があった。

「レフイーユさん一人…ですか、随分と迂闊ですね？」

「ふっ、追い詰めた事には変わりないのだ、どうとでもいえ、お前の方こそ、勝負を捨ててないには見えないが？」

「ふっ、わかりますか？」

「私の真似をするな。しかし、迂闊というのは、お前の目論見と
いうのに面白みを感じていたのでは」

「面白み？」

「お前の次の狙いは『捕まる事』だろう。

捕まって、私、いや、他の治安部に、その小箱の中身を見せる事
だ…」

レフイーユは、窓のブラインドを指で少し開けて外を眺めて、解
説を始めた。

当然、その隙に逃げようかと思っただが…。

読まれているのか、視線が完全に自分全体を捉えていた。

「まず、回覧板をこの階のどこかに隠し、そのまま自分は逃亡図
り。頃合いを見計らって治安部に捕まる。

そして、隠したとは知らずにその小箱を切り裂くなりして開いた
小箱を見せて…。

『回覧板なんかあるものか』と惚ける事が目的だ」

「その展開は、少し無理があるのでは？」

「当然だ、無理がある。」

しかし、先のセリフを少し変えて話せばもっと説得力が沸くだろう。

『私はそれを開けるための番号を知らない、これは渡されたただ』とな…。

当然、その後、お前の部屋も調べるようになるだろう。だが、見つかるわけもない、この寮の四階にある、男の部屋のどこかに隠したとなれば…。

そして、この騒ぎの後なのだ、口座番号が何なのか、そこにいた男子生徒なら気付くだろう…。

これは回覧板だと…」

「さつきから仮説ばかりですね？」

「だが、間違っではないだろうか？」

「まあ、大体、あってますが…」

ちなみにレフィューが思ったより早くやって来たので、まだ、小箱の中には『回覧板』が入っていたので、一瞬口籠もったが誤魔化すように、気になる事を聞いた。

「でしたら、ここで確実性を求める貴女が、どうして一人でやってきたのですかね。」

「ここでこそ大勢で取り囲めば、私は何の抵抗も出来ないのですよ。」

すると髪をかき揚げ、笑みを浮かべていた。

「ふっ、抵抗してほしいのさ。」

「はい?。」

「いや、お前と一度、勝負を試してみたくな。この学園にやって来たのはいいが、こういう機会には一度も恵まれてなかったらどう?。」

「ここで一度、私と戦ってほしくてな。」

「そこでお前が私を倒したら、もうこの件から手を引いてやるつもりがないか。」

「ただし、私がお前を倒したら…わかるな?。」

「随分と酔狂ですね?。」

「誰かの悪い病気が移ったのだろうかよ。」

「つい笑いそうになったが、手の裏を見せるとレフイーユは緊張した。」

パチンッ

指で音を鳴らす何気ない始まり動作に、彼女は身構えるがそれより先に目が眩んだ。

次の瞬間、視界が真っ暗になる。

彼女の周囲のブラインドが闇によって、開かれ、さらに閉じられていた。

人間の目の習性を利用して、光を浴びた内に身を屈め、闇に焦点を狭まった内に懐に飛び込む。

「くっ」

拳をサーベルの柄で受け止め、切り返すが腕で受け止めて、その手を一回転させて『掌底』を放つその姿は闇の法衣を纏った、あの魔道士。

彼女相手に手加減したら、こっちが負ける。

そんな心境で放つ『掌底』が、当たろうとした時、彼女の『姿』が歪んだ。

「ふっ」

彼女の東方術、付加能力『残像』^{ミラー}で完全に振り切った自分を斬り付けに…。

「あの…、みね打ちでお願いしますよ?」

「駄目か？」

「駄目に決まってるじゃないですか…」

何故か舌打ちをしたのが気になったが、これで『死んだり』でもしたらシャレにもならない。

その攻撃を辛うじて避けた際、ブラインドに指が引っかかって出来た隙間から、レオナ達の姿が見えた。

第十一話

「どうやら、ゲンゾウも捕まったそうだぞ?」

レオナは寮を見上げながら、そんな事を言うとシリウが、知らなかったのか驚いたように。

「えっ、どこで?」

「隣町だそうだ、そこであの人の妹さんに捕まったらしい」

「と、隣町、そこまでやるアラバもすごいけど、それを迎え撃てるあの人もさすがやな。」

それで残りはそのアラバやけど、今、どこよ?」

「もう見つかりましたわよ」

すると、会話を遮るようにゆかりが高笑いをしながら答えた。

「今、お姉さま自らが追いかけているから、捕まるのも時間の問題ですわ」

「追っかけている?」

見つかったのは、何となくわかるが、どうしてお前達は付いていかなかったんだ?」

「そこが貴方達とお姉さまの違いですわ。」

きつとあの方自身で決着をつけたい事もあるのよ……」

「ユカリ、うっとりしている最中悪いが。じゃあ、今、二人はどこにいる？」

「そ、それはわかりません、ですけど貴方達が知ってるのでは？」

「だから、連れてきたというワケか、となるとゲンゾウもこっちに来て来るな。」

「だが悪いが、俺たちがそんな事を知ってると思うか？」

すると寮の四階のブラインドが少し開き、一瞬、当の本人達が見えたのだが。

「もう、だったら、どこに行ったのかわからないじゃない!？」

それはユカリの憤慨に遮られ、4人も抵抗はしないとはいえ、警戒の為に周囲を治安部に囲まれていた。

そんな中で、キリウが四人に聞こえるトーンで話した。

「ところでサイト、そういえば気になったんだけどさ。」

みんなで回覧板を入れる袋とか用意してた時にさ、アラバのだけあの小箱が用意されてたけどなんだったの？」

するとサイトの代わりにレオナが答えた。

「ああ、あれかあれには少しばかり細工がしてあってな」

「細工？」

「簡単な発火装置でな。もしも、レフィーユさんが着破した時に、その細工をだな……」

「すんまへんな、アラバはん……」

『パチッ』とスイッチを押すので、さらに疑問に思っ
て聞いてきた。

「なんだよ、そのスイッチ？」

「簡単な発火装置だ、一分後にあの箱が燃え上がる」

「燃えるって、アラバはその事を知ってるの？」

「当然知らない」

「だったら、どうして!？」

「仕方ないだろう、あの人に追っかけられて逃げ切れると思うか？」

普段の彼を知らないだろう、今、四階にて学園内で一番強いとされるレフィーユ・アルマフィと互角に渡り合える事すらも……。

「だからって、このままでは口座番号も……」

「大丈夫だ」

「このままでは新しく作らなければ、男子生徒の風紀も…」

「大丈夫だ」

「何故？」

「口座番号は覚えてる」

普段、男とはこういう時に凄い記憶力を発揮するのである。

そして…。

「だったら仕方ないね」

納得する人間がここにも四人。

「もう、俺たちに出来る事は、怪我をしない事を祈るだけだ」

「校歌斉唱」

東に見ゆる

未来のために、学まなぶは絆あひだ

励あきらみいれよ、この学園

ああ、我らの

白ほつ学園

いきなり、校歌を歌いだす四人はあからさまに気味の悪いので、ユカリが何なのか聞こうとした。

その時、二人も背中を向けていた。

まるで決着の付いた二人のように…。

独特の緊迫…。

そんな中で彼は物の見事に…。

『爆発』した…。

四階が爆破され、後からやって来た事情を知らないイワトではあったが、叫んだ。

「アラバー!!!」

第十二話

「敵だ、みんな敵だ…」

「アンタに一つだけ言っておくわ、友達を選ぶという人の付き合い方くらい覚えておきなさい」

「ごもつともな意見に言い返す事も出来ずにいるのをみて、レフィーユは言う。」

「まさか自爆するとは思わなかったが、お前にとっては『怪我』がなくてよかったじゃないか」

一見、気遣いのように聞こえるだろう。

実際、怪我がなかったのは闇で作られた法衣のおかげなのだ、これは皮肉なのだ。

「そうね、あの規模の爆発で怪我がなかったのは、運がよかったわよ。」

姉さんだつて、あの後、後始末として、あの五人には、窓ガラスの処理やらさせてたけど、貴方はイワトの部屋を掃除するだけなんですのだから、感謝しなさい」

何も知らないセルフイ様は、そんな事を言つて、湯船から身を乗り出し窓を眺めていた。

「まあ、あんな目にあつたとしても、アンタもさすがに今回の事

には興味があるのかしら？」

セルフィの視線の先は、このホテルより、離れたところ、おそらく海岸線に横付けされた空母という名前のタンカーだろう。

「あんな旧世代の兵器なんか持ち出して、何をしようつてのは大
体想像付くけど、あからさまにやってくれるのは勘弁願いたいわね」

「そうですね…」

ちなみに自分の視線の先は、セルフィの身を乗り出した際に強調
した。姉より大きい胸であったのだが…。

「あいたっ！！」

隣で座っていたレフィーユが自分の腿をつねりながら答えた。

「何だつて『七色同盟』が、今回『この日』をわざわざ選び、大
事な発表をするそうだぞ？」

「廃核記念日ですか…」。

『全人類が魔法という武器を手にする事が出来た、今現在で、核
兵器、核燃料を守り切れる保証などない』

2000年くらい前、そう訴えた七人の活躍によって、世界各国
が全ての核燃料、核兵器の放棄を決めた日でしたね。

その後、大規模なエネルギー問題が騒がれもしましたが、この訴
えは大きな効果を生み出しましたね。

治安が低くなり続けていた性でしょうか、核弾頭だけではなく、全武装兵器の排除も決定したので。こつも言われてますね。

戦争の無くなった日…。『廃戦記念日』と。

そして、その七人の事を、トレードマークにしていた各々のスカーフから『七色同盟』と…どうしました、二人とも？

「姉さん、この人、ホントに何も企んでないわよね？」

「そうだな、多分、何にも企んではないと思いたいが…、アラバ、大丈夫か？」

「失礼ですね。興味のある事くらい、調べても構わないじゃないでしょうか？」

何かおかしな事を言ったのであろうか、ますます、警戒しだしたので少し不機嫌だった。

「ふん、まあいいわ、どうせ私達も現場警戒に出るから、変な事をしようとしたら、ヒオトさん^{ヴァルキリー}辺りなら事故に見せかけられるから、気をつけなさい」

何をどう事故に見せかけられるのかわかりたくはなかったが、この施設から出て、服を着替えて合流を果たした時、セルフィは珍しく姉にも注意を促した。

「まあ、今回は姉さんも気をつけてね」

「ふっ、言われるまでも無い」

「何かあるのですか？」

「お前には関係がないと言いたいが、まあ、その同盟とやらに関わりがある事さ。」

詳しくは調べているのなら、その記念日が決められた背景くらい調べているのだろうか？」

「確か、その訴えを起した数カ月後くらいに、核ミサイルが本当に核爆発を起こしたという事ですか？」

「そうだ…、そしてその後、その国フォルグナート公国は『ワールドゼロ』と通称名でも呼ばれるようになるが、後でわかった事だが、その核兵器が配備されていたミサイル施設に、視察のための七人がいた」

「…いやな話ですが、魔法を有したテロで軍事設備を乗っ取られるという事を、そして、核弾頭が奪われる可能性も、尊い犠牲で立証されたのでしょうかね」

「犠牲ではないっ！！」

その時大きな声が響き渡ったので、その音源らしい人物を見た。

「確かにキミの言うとおり尊い。しかし、彼らの心は私の中で生きていくっ！！」

まるで演説をするような大声だったので、少しうっとおしくなり

そうだったが、この人物が誰かとレフィーユに耳打ちをしようとした。

だが、するまでもなかった。

「私は『トラン・オズワルド』その七人の中の子孫であり、そして、我が妻、レフィーユ・アルマフィを迎えに来た者である」

「つ、妻あ!？」

第十三話

「オズワルド、親同士が決めた婚約を何を勘違いしている？」

「はは、何を言うか事実じゃないか、こういうのは大々的に公表してもいいだろう？」

あつという間に周囲がマスコミの光に取り囲まれあつという間に、その二人を取り囲んだので、円の外側から眺めていると、マスコミが調子に乗って事実の確認をしようとして、レフィーユの怒涛の言い返しの餌食となっていた。

だが、ここでわかった事があるので、セルフイに耳打ちをした。

「あれが貴女の言っていた。『気をつけて』という意味ですか、それでいまいち状況が掴みきれていないのですが、オズワルドって？」

「あの人はトラン・オズワルド、アルマフィ家と並ぶ良家の人間、そして、御曹司ってところね」

「婚約したと聞きましたが？」

「あら、やっぱりアンタもそこが気になるの？」

まあ、姉さんの知らないところで親同士が勝手に決めた事よ」

「怒らなかつたのですか？」

「あれを見ればわかるでしょう？」

でも嫌なもので、婚約を断りきれない家柄の理由ってのがあって『名義だけでも』って、うやむやにされたのよ」

マスコミを論破するレフイーユを見るが、さらにオズワルドは黒い布のようなモノを出した。

「これを見るがいい」

『おおっ』とマスコミは驚き、シャッターのフラッシュがオズワルドに集中する。

「ふん、出たわね、ああ、これだからお金持ちは嫌いなものよ…」

「良家のお嬢様が何を言ってるのですかって、黒い布、スカーフ…」

もしかして、あれは七色の？」

「そうよ、七色同盟の一人だから断れないのよ」

「それだけではない!!」

あの人ごみの中、この会話を聞いていたのだろっかもう聞きなれたオズワルドの声が響いた。

「明日、ここで私が、その廃戦記念日の演説をするのには、皆様にもう一つ発覚した事実を公表したいから。」

いや…」

オズワルドはゆっくりとこっちにやってきて聞いた。

「君は、七色同盟の事に関してどこまで存知かな？」

「それは…まあ明日の記念日の発端となった。七人の事ですが？」

「その七人、中心人物が誰だかわかるかな？」

「いえ、その…」

自分が黙り込んだように、周囲は静かになるのは誰も知らない事だからだろう。

「いや、すまない、悪い質問をしたね。」

確かに、これには『リーダーを作ればその家系の子孫が可哀想』などと言った。

保護説が有効な説だとされていたのだが…これを見てほしい」

「この写真ですか、これは随分と古い金庫のようですね…？」

「その通りだ…！」

至近距離でお叫びになるので、のけ反りながらも答えた。

「『日記帳』でも入っているのですか？」

「おおお、その通りだ、よく言ってくれた!！」

そして、今度はマスコミが一齐にカメラのフラッシュを焚くので、さすがにうっとおしくなりそうだったので、半ば叫びながら。

「そ、それで、その日記帳に書かれていたのですか、リーダーの名前が!？」

「いや、今回運び出す際にわかった事なのだが、この金庫の底を拡大した写真なのだ、これが何だかわかるかね？」

「『黒が我らの思いと共にあった事を忘れてはならない』そう彫られてますね？」

「その通りだ。底に刻まれていたから、今までわからなかったが、これが指し示す事はこういう事だ。」

黒、すなわちこの黒いスカーフを持った、オズワルド家が七色同盟の中心人物であるという一点の事実だ」

歓声と共によほど、重大なニュースだったのだろう。

「もしもし、本部ですか、大ニュースです…」

今から、緊急特番を組むような勢いで騒がしくなったので、写真を眺めているとレフィーユが聞いてきた。

「だが、そう早合点してはならないだろう。その刻まれた文字をちゃんと鑑定したのか？」

「何をいうのかと思えば、この切り口には2000年前の埃が検出されたのだ。」

これが刻まれたのは2000年前、すなわち七色同盟の誰かがオズワルド家がリーダーであると示したかった証拠だ。

どうだ、レフィーユ、これで結婚するのを阻む理由はないだろうか？

「随分と一方的なプロポーズじゃないか、だが、一つだけ気がかりな事がある。」

アラバ、どうして金庫を見たときに『日記帳』というキーワードが出てきた？」

『アラバ』という名前にマスコミの数名には聞き覚えがあるのだろうか思い出すように歓声を上げた。

「アラバ…、そうか君がああ、のシュウジ・アラバか…」

そんな中で、今まで温厚な態度だったオズワルドの視線が急に味わった事のある感覚に陥った。

その感覚の名前を人は、敵意という…。

第十四話

「ふつ、無視してしまえばよかったものを…」

『キミにレフイーユを守る力があるのか疑問だがね』

あの後、オズワルドがこんな事を言ってきた。

確かに彼女の言うとおりにしなければいいのだろうが、ただあの瞬間、オズワルドがどういう人間なのかわかった。

典型的なお金持ちというのは、どうも自分の神経というの逆撫でたがるらしい。

「聞くところによるとキミは西方術者と聞く、さぞ東方術者である彼女が先頭に立って維持している日常をのうのと過ごしているのだろうな」

こんな感じで、だから一応言い返す。

「確かに私は人を守るといふのには不向きな人間です。ですが私は、情報収集など別の分野で役に立ちたいとこれでも日々努力はしているのですよ?」

「戦えないから…だから、別の分野で役に立ちたいか?」

これだから西方術者というのは嫌いなんだ。結局、現場で行動しているのは東方術者じゃないか?」

このオズワルドという男は、さらにイースタン・ブリンシプル東方術至上主義者だったらしく、マスコミの中にも西方術者がいるのか、周囲が静かになりだしたので咎めるように。

「それは言いすぎ…っ!？」

マスコミに見えないように腹を殴られ、顔が歪んだ。

「おや、調子が悪いのかね？」

そう笑いながら握手を求めてきたので、さすが先制攻撃を食らったせいだろうか…。

「…ふむ、しかし闇を使わずして、あの男を膝まづいた『あれ』はどうやったのだ？」

「関節を極めただけですよ…。」

「関節…手首を極めただけで、ああも人間が膝まづくのか？」

「ええ、数千年前の合気道という体術らしいのですが、結構、面白いですよ」

「ほう、アイキ…ドウ、素晴らしいな。映像でしか見た事がなかったが、お前の言う通りなら、力のない人間でも犯人を捕まえる事が出来るというか、今度訓練にでも取り入れてみるか？」

「あの時は、握手をするという体制だけでしたから、簡単に技を掛けることが出来ただけです。タイミングも重視するところもありますので、あまり信用しない方がいいでしょう。」

それより、あの子の後始末、ありがとうございました」

「ふっ、礼にはおよばん」

そうして腹部を診るといふ名目で、高級ホテルにある簡易的な治療室にて、しばらく談笑しているとノックがした。

「はい？」

「ええと、大丈夫でしたか…？」

入ってきたのは、少し線の細く気の弱そうな男だった。するとレフィーユは珍しく、自分からこう言った。

「ああ、紹介しよう。彼はエドワード・F・ボルテだ」

「気軽にエドワードと呼んでください」

そう言って、握手を求めてきたので応じていると、先ほどのような事をすると思ったのだろうか、彼女は笑いながら付け足した。

「彼も七色同盟の一人だ」

「そうなんですか？」

「はい、でもスカーフを巻いてないとわかりませんよね。」

ですがオズワルドが腹部に一撃を加えたのが見えたので、一言お詫びをと思いきや…すいません、ホントは本人にやらせるべ

きなのでしょうか…」

「いえ、気にしないでください。ところで他にも七色同盟の方がいるのですか？」

「はい、緑が私で、青のアイーシャ、オレンジ色のチェンバレン、そして、藍色のシャンテさんですね」

「凄いですね、五人もこの街にいらっしやるとは、今回の記念日の祭典にしては随分と大がかりじゃないですか？」

「そうですね、先ほどの公表もありますが、今回は、日記帳の朗読が行われるらしいです」

「なんだと!？」

知らなかったのか先にレフィーユが驚いたように、その日記は確かに重要な意味を持っていた。

誰が書いたのかわからない、だが、しかし、同盟の七人がこう言って、その時いた、屋敷の執事の前で金庫に預けたモノとされていた。

『この日記は、今から私が金庫にしまうが、私のモノではない。

だが、この七人の内の誰かが書いた日記だ。

これには真実が書かれている。

だが、お前たちに私たちの正しさを判断するのは難しいだろう。

判断するのは、何世紀先の私たちの子孫に任せる。

そのために、この日記は誰にも読まれてはならない。

軽率に読もうとする事を禁ずる』

そう言われて、今に至るまで、読まれなかった日記帳であった。

「お土産屋さんでよく見かけののですが、ホントにあったのです
ね」

「ああ、だから、日記帳の事を知っていたのか…」

「だから今日は、このホテルは日記帳もあるので厳重警戒態勢な
んですよ」

「へえ、日記帳が…」

思わず目が細くなるが、エドワードは気づかず時計を見た。

「あっ、もうこんな時間だ」

「もう帰るのですか？」

「はい、家内を待たせるとするさいから」

「えっ、結婚してるのですか!？」

自分と同一年に見えたので、少し驚いたがレフィーユは知っている

たらしく。

「ふっ、結婚に年など関係ないだろう？」

すると送るつもりで、彼女も席を立ち、二人は出て行った。

そして自分は腹部の事も大したダメージでもないの、さっさと立ち上がり電気を消して、ある場所に向かう。

そこには二名のヘルメットを被った警備員が厳重に守りを固めていたので、間違いはないだろうと思った。

制服のまま、じっと眺める。

おそらく監視カメラもこの階を中心に動いているのだろう。

「すっ…」

大きく息を吸い込んで、経験上、そのカメラが異常に気付いてから、他の警備員が駆けつけてくるまでの時間を計算する。

「はあ…」

どちらにしても、わかる事は時間がないという事だけ、その深呼吸はため息なのかわからなかったが、いずれにせよ『しなければ』ならなかった。

法衣を纏った男が、もう一度、監視カメラ動きに合わせて警備員を確認して走り出す。

「お、おい!？」

自分に近い警備員が後ろを向いていたのは運が良かった。

おかげで先に気付いた、警備員のヘルメット目掛けて闇の腕を伸ばし、そこから闇を注入して窒息させる出来たからだ。

もう一人も、驚いて後ろを振り向いたヘルメットに手を当てて隙間から、もう一度、闇の進入を開始する。

監視カメラも気付いただろうか、そんな事も気になったが…。

「動くな」

見慣れたサーベルを突きつけられた。

「ふっ、随分と強引な手ではないか？」

本来ならお前にも理由があるのだからから見逃してやっていたが、今回は国宝だ。

お前は自分がやろうとしている事が、わかってやっているのか？」

「やはり怪しんでいましたか？」

ただ今回はゆっくりとドアに背中を当て、ため息をついた事で抵抗しないのが何か理由があるのがわかったのか、ただ彼女は言った。

「だが残念だったな、この警備員を倒したところで、あの部屋には気圧が一定に保たれてあって、お前が侵入した途端、それこそ警

報が鳴って、脱出が困難に鳴るぞ?」

「やはりそうでしたか…?」

自分とて、その可能性はあると考えていた。

そして彼女の言うとおり。

「お前にしては随分と軽率じゃないか、どうやって日記を手に入れるつもりだった?」

「そうですね、まあ、その気圧の警報装置のほかに色々問題はあるのですが、私は一つ、問題を解決をしましてね…」

「ほう、それは何だ?」

さすがに興味があったのか聞く態度を見せていたレフィーユであったのだが…。

「どうした?」

対照的に自分は困惑していたので、少し言葉を出すのに手間取る。

そう…。

『しなければ』ならない理由があったのだ。

「…レフィーユさん、コレ、なんだかわかります?」

「随分古びた日記帳だな?」

「…ええ、日記帳です」

「日記帳か…」

「…はい」

「お前は、ふざけてるのか？」

「やっぱり、そう思いますか…」

どうして、こんな事態になったのか再度、遡らなければならない
だろう。

第十五話

それはあの回覧板騒ぎのあった後日。

イワトと自分は、あの騒ぎの罰の一環として、公園の清掃をレフイーユに命じられていた。

「ほら、あんた達、早く来なさい」

「セルフイさん、最近よくこちらにやって来ますが、そんなに暇なんですか？」

「うるさいわね。私だつて『また』何かを仕出かすかわからない
アンタの監視なんかしたくないわよ」

「随分と酷い言い様ですね」

「ふん、そんな事、この前の騒ぎを見て言いいなさいよ。」

姉さんは粉まみれになるわ、街中で乱闘騒ぎは起こるわ、拳句の果てには爆発まで起きてるじゃない。粉まみれはとにかく、あとの二つは立派な事件よ」

あと一つ加えれば殺人未遂も起きていると、爆破された男は口に出したかったが、色々と追求をされそう黙っていると。

「まあいいわ、姉さんはちょっと手続きと話し合いがあるからって、それで私がやって来たってわけよ」

「話し合い…そう言えば、そろそろ記念日が近いからだから忙しいと言っていましたね」

「あら知っているなら話が早いわ。」

当然、報告はするから、姉さんがいないからって手を抜かないように、それとさっきアンタが記念日が近いって言ったように『それが原因で治安部の清掃が行き届いてないというのはよくない』と姉さんも言ってるので、それを踏まえて頼むわよ」

「へい」

半ばハモリながら、掃除を始める事になったのだが…。

「ほら、これも拾うのよ」

この一言ではわからないだろうが、セルフイ、これをその数分間で何回言っただろう。中々の命令ぶりだった。

「やっぱり姉妹ですね、このまま公園全部を掃除するつもりですか？」

この監視から逃れるために、イワトと逆回転に掃除をするつもりだった。

しかし、さっきからずっとセルフイはついて来ているからうんざりしていた。

「うるさいわよ、姉さんが言うには注意力を鍛える一環として、公園で清掃をする事が適してるらしいわよ。」

「アンタも姉さんを見習って頑張りなさい」

「確かに捜査に関しての大事な感覚を鍛えるには最適だとは思いますが、私は治安部じゃないのですよ？」

「あら、アンタの情報収集能力は、大したモノだと思うわよ？」

この前の連続監禁事件、私も含めてみんなが犯人像を絞り込んでいるのに一生懸命だったというのに、姉さんが犯人を見つけ解決した事件があつたでしょう。

みんなは姉さんを褒め称えていたけど、私はあの時、アンタが何回かどこかに行った数分間で何かしたと思ってるのだけど？」

『じい』と見つめられたのでワザと茂みに入り、返答の代わりに背負ったカゴに空き缶を放り込む。するとセルフイは続けた。

「ふん、アンタが協力すれば、あの魔道士だつてなんとか出来ると思つただけど、まあいいわ、ちょっとイワトさんの方をみて来るから、ちゃんと掃除をしてなさいよ」

そう言われ『よつこらせ』とカゴを担ぎなおし空き缶を拾っていると、姉と弟なのか、その二人がこつちを見ていた。

「なんででしょうか？」

「あの、お兄ちゃん、これも」

小さな子供が手渡してきたのはただの空き缶だったので、最初は

『そう言う事か』と理解をして、『ああ、ありがとね』とカゴの中に放り込むが、しかし、その弟らしきは、自分が姉だと思った人物を通り過ぎて行った。

だが、その女性も空き缶を持っていたので話し掛けた。

「あつ、それもですか？」

そして、女性も話し掛ける。

「噂とは別人だね、随分と優しいな。魔道士くん……」

…ボイスチェンジャーを使ったその声に、身の毛がよだった、その次の瞬間、空き缶を『ぽん』とこちらへ投げる。

思わず目で追ってしまい、更に緊張して彼女を見直すと彼女は腕を交差しながら組みかかってきた。

武器を持っていると首筋にピタリと金属独特の冷たさを感じた時にわかる、そして、彼女は微笑んだ。

「勝負あつたね……」

しかし、何か起きたのを感じた子供がこっちを振り向こうとした時、彼女は離れて距離をとった。

「すまない、手荒なマネをした」

そう言って、東方術で作ったのだろうか両手に握られたかぎ爪のようなショートソード『カタール』を消すので敵意はないのがわか

った。

だが彼女とは何の面識も無いので警戒する。念のために自分の影に『闇』を潜ませているのが解ったのかボイスチェンジャーを外しながら言った。

「もうボクは戦う気はないよ。さっきは、キミを試させてもらっただけ、敵意はないよ…と言っても、信用出来ないようだね?」

「すみませんね、私はそういうのを信じられない性格なのでね」

「ふむ、なるほどその用心深さは良い事だと思うよ。でもキミはレフリーユに協力しているじゃないか?」

「私が『魔法使い』だと言うことを知っているという事は『色々』と調べたのでは?」

「ふふ、そうだね。でも僕はここで言うつもりはないよ。だから、いい加減警戒を解いてほしいね。」

ここで暴れたら、キミの方が不利だろう?

ここは昼下がりの公園だ。人が多いだろう。

今度は…ああ、すまない、命のやりとりをしに来たワケじゃない。キミに良い物をあげようと思ってね。

…そつちに投げるよ?」

すると何かを取り出し自分に見せて、もう一度、自分の方に投げ

たので受け取りその人を半ば睨み付けたが、それがよほど可笑しかったのか『くすくす』と笑っていたので、少し不機嫌になったがそれを見た。

「随分と古い手帳ですね、鍵まで掛かってる」

「日記帳だよ。ボクはこれを友好の証として、キミに託しておこうと思ったのさ」

「…託す、託すと言う事は、大事なモノという事ですが、どうして私に？」

「おや、勝負に勝ったのはボクだよ」

厄介なモノを託したのではないのかと思った、しかし、その時『気に入らないのなら、別に返してもらっても構わない』と言うので、その鍵を『闇』を使って開けようとした。

「ちよつと待った、開けるということは『受け取った』と捉えていいのかな？」

「別に危ないものではないのでしょうか？」

「そうだね、受け取るのなら、それを開けていいよ。でも、ボクがないところでやってくれないかな？」

「何か爆発するとかないでしょうね？」

「そんな書物が爆発すると思う？」

「わかりませんよ、この前ちょっと爆破されましたからね」

「ふふ、ハードな日常だね。でも、もしそうになったら『カリフ』を代表するボクが責任を取らせてもらおうよ」

「カリフ…それが貴女の組織名ですか？」

「そうだよ、ボクはその代表者ってところ、どう、組織の名前まで言ったのだから、信用してくれた？」

「…冥土の土産という言葉を知ってますか？」

「ホント、用心深いね。キミは…でもね」

少し大きく深呼吸しながら、自分の目を見ながら真剣に言った。

「ボクは、それをキミに見てほしいと思ったんだよ。」

感想なんか言わなくてもいいから、ただ、それを見た後、どうするかはキミが決めてほしいんだ」

論理的ではないが、多分、その瞬間^{とき}、自分は彼女を信用できると思った。

「ああ、そうだ、貴女の名前を聞いてませんでしたね」

「アルマ…」。

カリフの首領、アルマだよ。よろしく、シュウジ・アラバくん…」

ちょうどカギを開けた瞬間に、そこまで調べていたのかと驚いたが、彼女は、もういなかった。

どこに行ったのだろうか、目で追うが見えたのはイワトとセルフィが、何も知らずにこっちにやって来る様子だった。

第十六話

「なるほど要するに、お前は罰としてやっていた掃除の最中にカリフと名乗る組織の首領、アルマという女に出会った。その際に日記帳を手に入れたというワケか？」

「まあ、そうなりますね」

「……」

「どうしました、レフィーユさん」

「いや、長々と説明してくれてありがたいが、それを信じる方が難しいと思わないか？」

「やっぱり思っていましたか…、確かに『あつ、この人信じてないな』というのが『すまない、手荒なマネをした』の辺りで感じましたよ」

「アラバ、笑い事ではないだろう？」

そう彼女が自分の名前を口に出すので、少し戸惑いを見せたが『大丈夫だ』と、ここに仕掛けられている監視カメラが音声を拾うタイプではないと彼女は言っているのだろうと理解したが、レフィーユは少し睨みつけて言った。

「まったく少しは私の身にもなってほしいモノだな。私は今回お前が来るから、今日の日のために水着まで買い揃えていたのだぞ？」

お前の考え、いや、企みを知らずに自分だけ意気揚々と恥ずかしいじゃないか？」

「すいませんね、これには少し考えがあつたから言えなくて…」

「考えだと、女の柔肌を見る以上に、それはさぞ上等な考えなのだろうな？」

「それは、目のやり場に困りましたけど…」

素直に感じた事を言うと何故か照れていたので、彼女に自分の考えを打ち明けることにした。

「まあ、もし『私』が、のこのこと日記帳を返しに来たら、監視カメラの映像を見ている人はどう思うのかと、私なりに考えてみたのですよ」

「なるほど、確かにこの部屋は気圧が一定に保たれているという事は、誰も入っていないという事になる。」

そこで漆黒の魔道士であるお前がやって来て、日記帳を返しに来るといふ事は、何もお前は悪者ではない事を示すいい機会だと、そうお前は考えたのだな？」

頷いてレフィューは手を差し出す。それは当然。

「どうした返しに来たのだろう？」

しかし、押し黙る自分がここにいた。

「…すみません」

そう謝ったと同時にくだらるか警報が鳴った。

「アラバ!？」

思わず彼女は自分の名前を叫んで静止しようとするが、構わず非常口に向かって走る。その寸前で現れたのはオズワルドだった。

「き、貴様あ!！」

さすがに緊急事態だからか、すでにオズワルドは自分の東方術を駆使して大きな剣を手に行っていた。

その『ブロードソード』で自分を突こうと身構える。しかし、それが仇になる。大きな武器であればあるほど一つの行動を取るのに時間が掛かるのだ。

当然、『身構える』という一動作にも…。

「ぶっ!？」

身構え終えた時、その目標が見せた見事なとび蹴りに周囲は怯んだのか、見送るように非常口のドアを開けて、夜独特の風を感じたので少し安心した。

だがその時、横から気配に魔道士の首が曲がった。

何が起きているのかわからず、外から突き出た『日本刀』にもう一度、周囲は驚く中、オズワルドが歓声をあげる。

「おお、シャンテ、よく間に合ってくれた、さあリッドムーン家の華麗なるその剣撃、見せてやるのだ!!!」

よく歓喜に沸けるとオズワルドを純粹に睨んだ。正直、七色同盟の人間は貴族やお金持ちを想像していた。

しかし、そのシャンテという彼女、自分がよく相手にしている『犯罪者』、いやそんな甘い表現ではなく、殺人鬼、それよりもっと先にある『何か』だった。

「…死ね」

『ゾッ』とした。

彼女との攻防はさっきの一度だけ、だが、一度で『殺される』と思った。

『横』に斬りつけようとしてきたので、それを何とかギリギリで反応するが、彼女の付加能力に困惑した時には胸部を『縦』に斬り付けられていた。

「覚悟お!!!」

斬りつけられた事でほつれた法衣を確認すると殺される予感が実感へ代わる、そんな中で『彼女』の邪魔をするようにオズワルドが自分に突きかかった。

二人の間に入るようにオズワルドは邪魔をしたのは、運がよかった。

ここで逃げれば、誤解されるだろう。

でも逃げるしかなかった。

もう一度、非常口に入り、自分はそのまま階段を使わず飛び降りた。

「なんとこの事だ…。追え、逃がすな!!!」

しかし木々の上に着地してその近くにあつたマンホールで地下に逃げたので、魔道士を追う事は出来なかつたのだが。

次の日…。

「どういう事が、説明してもらおうか?」

レフィーユからは逃げられなかつたのは言うまでもなかつた。

第十七話

レフィーユは何も言わず、食堂内のテレビを視線を送ると、そこにはオズワールドが数個のマイクに向かって演説のように答えていた。

「噂にも聞いていたが、あの魔道士はとんでもない事をしてくれた」

まだ周囲は暗い、昨日の内に撮ったのだろうか、マスコミが質問する。当然、自分が悪役として前提の質問にオズワールド意気込んで答えた。

「確かにこの金庫を見れば、漆黒の魔道士がどれほどの相手なのかがわかる。

どうやって盗み出したのかすら、こちらが聞きたい。これで今まで彼女が手こづるのも頷ける。

だが、ここで私たちが引くわけにはいかん。

我らの『警備隊』と彼女の連携を持って、日記帳の奪取に専念したい」

「…敵が増えた」

「ふっ、眉間がよりすぎて、水量を表す単位になってるぞ?」

『新技か?』と茶化していたが、レフィーユも不機嫌なのが見て取れた。

「…どうして、渡さなかった？」

あの時、私に渡しておけば事は終わっただろう？」

やはりそこが気になりもしたのだろう。確かのリフィーユの言つとおりであるのだが自分なりに理由があった。

だが、それを言う訳にも行かないので黙っているとリフィーユは気づいたのだろう。

「返すつもりも理由を言うつもりもないと？」

それにも黙るとため息をついたまま答えた。

「まあいい、私とて、気になる事があるのでな。それはお前に預けておいた方が良さそうだ。

ちゃんと保管を頼むぞ？」

やけにあっさりと引き下がったので、今度はこっちが理由を聞くとする、玄関の方が何やら騒がしくなった。

「こ、困りますっ！！」

こんなユカリの大声も聞こえてきたので何だろうとリフィーユが先に見に行ったのだが、彼女の顔が不快感に代わる。

「おお、我が婚約者よ」

後にやってきた、自分が目にしたのは先ほどテレビに映っていたオズワルドだった。

「テレビを見てくれたようなら、話は早い、一緒にがんばろうではないか!？」

「ふっ、どうりでどのチャンネルをつけても、同じ内容の番組しかやってない訳か、国宝が盗まれたから仕方がないとはいえ。」

オズワルド、貴様は少し勘違いしているぞ?」

「おお、勘違い?」

確かに漆黒の魔道士は、そんなにたやすい相手ではないという聞
くが」

彼女の肩に手を掛けて、気持ちの悪く言った。

「安心したまえ、我が精鋭たる警備員、そして、七色同盟の力が
合わされば、何も恐れるものはない」

「『断る』と言っただら?」

「何を言っかと思えば、今回はキミの追っ『漆黒の魔道士』に関
する事件でもあるではないか?」

「ここで私とキミが彼を捕らえられれば、結婚のいい宣伝にもなる、
治安維持にも発展するのだぞ?」

「その魔道士に一撃も加えられず、ただ逃した貴様にそれが出来

ればな」

何も言い返すことも出来ないオズワルドの手を軽々と振りほどき、彼女は言い返す。

「治安維持と宣伝活動を一所くたにするトコロをみると、よほど腕に自信がないと見える。」

だが今回、私はアイツの味方をするつもりはないが、気になるところが山ほどあるのでな。お前達に協力するつもりはないと言いたいのだ」

「気になる点、お姉さま、何が気になっていらっしやるの？」

ユカリが聞いてきたの拍子を見計らって自分を見たレフィーユは言った。

「どうやって気圧が一定に保たれた部屋に入らずに魔道士は、日記帳を手に入れることが出来た？」

「それは『闇』の使い手だからだ、きつと『闇』を使って日記帳を奪ったのだ」

「ふつ、私が受け持った事件では、そんな状況下でヤツが動けた記録などないぞ。」

それに、それではどうしても日記帳を手にするためにドアを開けなければならぬじゃないか？

さらに監視カメラの放つ熱や、その動きでさえ、気圧に変動が掛

かるからという理由で、カメラも取り外され、部屋の構造すらもわからなかったのだぞ？」

「だから、漆黒の魔道士という由縁なのだろう。部屋全体を覆いつくして、金庫も開けたのだ」

「どうしてキミは協力出来ないというのだ？」

「カリフ…、アイツはそう名乗る組織、ボスから日記帳をもらったそうだが？」

するとオズワルドは笑い出した。

「何がおかしい？」

「すまない、キミが私の国のそんなおとぎ話を信じると思わなかったからさ。」

「じゃあ、何だ、その魔道士は、カリフにこの日記帳を手渡され、このこと返しに来たと言うのか？」

『そうだ』と頷いたのは彼女だけではなかった。

「じゃあ、『カリフ』という組織の意味を言っておかんな」

そう言っただけで自分が耳にしたのは、カリフとは『墓荒らし』という意味だった事に顔をしかめた。

第十八話

「墓荒らし…」

思わず組織の名前の意味を吟味している中、オズワルドはこの学園に來た意味を言う。

それは当然、日記帳を取り返すためにやって來たわけではあるのだが、エドワード、アイーシャは未だ未成年、自分達と同じ年らしく一時的に転校する手続きにやって來たと言うのだ。

エドワードって、確か家内いたような気が…。

ついそこにいないエドワードを探していると、シャンテと視線が合う。ついお辞儀をするがシャンテはあの時の様な目をしてはいないが眼光は鋭かった。

幸い自分が魔道士だと気づいてないようで目を瞑り、静かにオズワルドの隣にいた男に耳打ちをしていた。

すると自分に視線を送り、先ほどのお辞儀を返してくれた。

おそらく残りのチェンバレンという男なのだろうか、中年というより若く、この三人を順位で示すなら、一番の年上がこの男、そしてオズワルド、シャンテと言ったところか、その二人に比べればそれは気さくそうな男だと思った時に、シャンテはレフイーユに言った。

「…つまり、貴女はその気になることが解明しない限り協力しな

い…と？」

「そうだ」

「…例え、それが国際問題…とでも？」

「そうだ」

そうして、そんな事もあった後、学生である自分達にとっては休み明けだった。

学業という仕事があるので、学園への道をレフイーユと歩き校舎に入る。すると下駄箱にて、別の学園の制服の生徒と出会った。

「姉さん『おはよう』」

目線が怖い、何故かセルフィは苛立っていた。自然と姉がらみだなと直感できるのは、もう自分の中で仕様になっていたのだが、何となくセルフィがここにいたので、何をやったのかわかっていた。

この姉が知ってるのか知らないのか聞いてきた。

「随分と不機嫌だな、セルフィ？」

「姉さん、私にも都合というのがあるのよ。手続きを省いて、その日の内に呼び寄せないでよ」

治安部は重大な事件や災害が起こった場合、支援要請で出来るようになっており、長期間の滞在も許されていた。

しかし、それには『手続き』というのが必要なのだが…。

「事件の起きた処理に深夜までかかって、くたくたに帰ってきて後の姉から連絡があって用意しろと呼び出された妹の気持ちかわかる？」

「も、もしかして徹夜ですか？」

「ふん、今日休めると思ったのに、今なら姉さんに勝てる気がするわよ」

『ギロリ』と睨みつけられたセルフィの目をよく見るとクマが来ていた。

「だがセルフィ、そんなことを言うのは、お前だけじゃないのか？」

『ほら、見てみる』とセルフィと一緒に制服を着た精鋭部隊『戦乙女』^{ルキリー}に所属するヒオトがに元気よくレフィーユに挨拶してきた。

「隊長、おはようございます。」

御用の際には、いつでも出動できますのでよろしくお願いします」

それを皮切りに残りの8名が挨拶にやって来て、一通り挨拶を終えたところでレフィーユは言う。

「ほら見る、みんな、お前くらい『クマ』が出来ていたではないか？」

…それは貴女のFC会員ですからね。

セルフイと思考が通じ合ったのは気のせいだろうか？

「とにかく姉妹だからって、毎度毎度、呼び寄せられたら身が持たないと言いたいだよ。

手続きくらいちゃんと通してほしいわ」

「ああ、わかった今度からはそうしよう」

軽く流すので、またのだろうとセルフイにとっていつもの事なだろう。

「はあ、もういいわ、じゃあ、いつもの部屋を使わせてもらおう…
あら？」

先にセルフイが自分の後ろの何かに気づいたので、何だろうと振り向こうとすると声がした。

「その下郎、お退きなさい」

人生で初めて『下郎』と言われたような気がした。

第十九話

振り向くとそこには見るからに高そうな服装と装飾で着飾った女性立っていた。知り合いなのだろうかと思いいレフィーユを見るとその通りだったようだ。

「アイーシャ、結婚したのだから、おしとやかにしたらどうだ？」

「貴女こそ、あんな事があつた後に、よく落ち着いていられますわね」

すると後からエドワードが追っかけるようにやって来た。

「ま、まあまあ、アイーシャ、考えだつてあるのだから、そんなに苛立たないで」

「エド、何を悠長な事を言ってますの？」

日記帳、ワールドゼロの国宝が盗まれたのですわよ。貴方も私の夫、いえ、七色同盟の一人ならそれくらいの実感くらい持つてほしいですわ」

「こういう場合、いつもなら自分はここでこの場を下がる。だが、ある一言に驚いたのでレフィーユに思わず聞いていた。

「レフィーユさん、もしかして、あの人がエドワードさんの？」

「そこ、言っておきますけど、私は認めてませんわ。」

どうしてこんな冴えない男と結婚しなければならないのよ」「

本人の前でそんな事を言うので、気遣うようにエドワードを見るが、よほど言われ続けているのか反論もせず笑顔のままだった。

そこでようやくアイーシャは自分に気づいた。

「貴方、だれ？」

こちらとしては正しくは逃げ遅れたのだが、何も知らないエドワードは紹介を始めた。

「彼が、シユウジ・アラバさんだよ」

「貴方が……」

『じっ』と観察して、彼女は言う。

「で、いくらほしいのかしら？」

とても失礼な事を。

「初対面に随分と失礼な事を言いますね？」

「お黙りなさい、この下郎。」

貴方が彼女とお近づきになれたのは、きっと何か脅迫しているからに違いありませんわ」

「そ、そんなの誤解ですよ!？」

思いもよらない指摘にレフィーユに助けを求めるように顔をむける。しかし、レフィーユ、いや、アルマフィ姉妹は笑っていた。

しかし、それを何と誤解したのだろうか。

「ほら、ごらんなさい。七色同盟の一人である私が指摘してくれたから嬉しくて震えているわ」

だが、この誤解は意外とあっさりと終わる事となる。

「レフィーユ、礼には及びませんわ、私たちは七色同盟と言う固い絆で結ばれているのですから」

「えっ」

「ぶてぶてしく、同盟の威光に触れようなんて、所詮下郎…」

「ちょっと待ってくださいよ」

「なに？」

「レフィーユさんが、七色同盟の一人なのですか？」

「何、当然の事を聞いていますのよ、知らないとは言わせませんわよ？」

アイーシャも最初は疑いの目で見ていたのだろう、しかし、さすがに黙ってレフィーユを見る様で空気を察したのか、彼女もレフィーユを見た。

「おや、知らなかったのか？」

『調べなかったのか？』と惚けるように言うが、あの時は日記帳の事で頭が一杯だったので、その理由を言わずに首を振る。

「ふっ、すまない、隠すつもりはなかったのだが、アルマフィ家も『赤』のスカーフを持つ、その同盟の一人なのさ」

「まあ、これも家が婚約を断りきれない理由なのよね。それでエドワードさんと結婚を機会に一緒に『結婚』をしようじゃないかって話よ」

「セルフィ…」

「ふん、どうせバレるのだから、言っておいた方がいいわよ」

バツの悪そうにレフィーユはこちらを見たが、ここでさらに気づいた。

オズワルドにしても、このアイーシャを見ればわかるのだが、傲慢する気配がこの姉妹には、全くと言っていいほど感じないのだ。

お二人とも有名だから気には掛けてないのだろうかと思いましたが、さらにもう一つ気になるところがある。

「お二人の結婚を期につて、随分と強引すぎませんか？」

するとここにいた5人が一斉に静かになった。

「何にもご存知でいらっしやらないのでございますね…」

しかし、アイーシャはそれだけ言って黙り込んだ。

「…もしかして、聞いたらずい事聞きました？」

「ふっ、勘がいいな。これもいずれおおやけになるだろうが、そこは…」

「自分で調べてくれ…という事ですか？」

第二十話

赤、緑、青、黒、オレンジ、藍色…。

私は自分の頭の中を整理するように、もう一度、今度は名前を当てはめる。

赤はアルマファイ家。

緑、青はエドワード、アイーシャ夫妻。

オレンジは、パタヤ・チェンバレン。

青に少し黒の混ざったような青の藍色、シャンテ・リッドムーン。

黒は、トラン・オズワルド。

そして、残りは紫色

名前は、ミン・チョンワという男である。

「うーん…」

さすがに休憩代わりに、思い浮かべていただけあって、背伸びをしてPCの画面に目を戻した途端、吟味する事はなかった。

クリックして、私は一昨日の内に頼んでおいた映像を再生する。

しかも三倍速で、それでいて何か気になるところがあれば、普通

の速度で再生し直し、細かい事も見逃さないように細心の注意を払っていたところでドアの方でノックがした。

「どうした？」

返事をして、誰が入って来るのだろうかと思おうとしたが、少し不快感を覚えた。

「オズワルド、何の用だ？」

「冷たいな、がんばっている花嫁にコーヒーくらい持ってきてもいいでわないか？」

見るとコーヒーの入ったカップを差し出して来た。しかもブラックのまままで。

「すまない、コーヒーは気に召さなかったかな？」

そういう意味ではない、この男の高そうなコーヒーセット一式を見れば解ることだが、砂糖もシロップも用意されてないのだ。

もし、私がブラックが嫌いだったらどうするのだろうかと思いましたが…。

「すまない、これは私が片付けられないな」

そう言って、苦そうにそのコーヒー飲んでいた。

「それで三日が経ったワケだが、何か進展はあったのかオズワルド」

あくまで映像に注意を払っていた、私の横のオズワルドは頭を掻いた。何も無いというのは聞いていた、そして町の住人にも迷惑かけていると言うことも…。

そんなこともあれば警備員と治安部は当然、不仲になり情報交換もまともに来れない状態になっていたのは目に余る状況となっていたが。

気が付くとオズワルドは私の肩に手を回して来たのを払いのけて答えた。

「私は今、見ての通り仕事中的なのだが、オズワルドお前は動かないでいいのか？」

「上に立つ人間が働いてどうするとかね、キミも見たところ三日もここに籠りっぱなしでサボってるに見えるが…何を見てるのかな？」

そう言って、オズワルドは自分が目にしたの映像に呆れていた。

「まったくあの男も、キミの下らんことを。我々に落ち度はないと、何度、言えばわかる？」

「ふっ、こちらとしてはどうやって日記帳が盗まれたのかも解らないのだぞ？」

ホテル内の金庫前の監視カメラの内容も見させてもらったが、一切、あの魔道士が映ってなかった。

という事は、日記帳が盗まれたのはその前、お前達がここに来る前に犯行が行なわれていたという事だろう？」

「驚いたな、今日のうちにここまで調べていたとは、だが、こんな地味な作業は、キミの部下に任せればいいモノを」

「あいにく私は、自分の目で納得できなければ動けない性分だな。だが、まさかあいつの監視もしていたとはな」

「随分と人聞きの悪い事をいうものだな警護だよ。ああいう男でも一応、キミの学友なのだからと言いたいところだが、シャントに聞くところによると同じところをずっと徘徊しているそうぞぞ？」

「どうして警護なのに、そんな報告が入るのだろうかと目を細めてしまったが、オズワルドにとってあの男が何者なのかを知らないという良い判断材料になった。」

「ようやく半年分の映像を見終わったので、立ち上がって携帯で残りがまだ届いてないので連絡を入れる。」

「ああ、私だ、頼んでおいた残りは……」

「相手側は驚いていたが、その驚きは半年分を見終えたからではなかった。」

「どうした、何も全部を揃える必要はないだろう、手間が掛かるかも知れないが、断片的に送ってくれても構わないと言ったはずだが？」

どうやら、半年分のデータを三日で見終えるなど思ってなかったらしく、暇つぶしで頼んだモノだとあそこでふんぞり返っている男と一緒に思われたようだ。

さらにここで、この男、いや『組織』と言っておこう、その落ち度がわかる。

「ああ、わかった、すまないな……」

携帯を切りオズワルドを睨む。

「どうして半年しか、監視カメラのデータがないのだ？」

オズワルドにしても私がここまで調べると思ってなかったらしく黙り込んだトコロに、今度はオズワルドの携帯が鳴った。

「あ、ああ、連絡だ。少し失礼するよ」

いい逃げ方をしてくれると思ったが、それは違った。

「ふう、そうか……」

やけに安心した声で、笑顔だった。

どうして笑顔だったのか……。

アラバが捕まったからだったというのには、そんなに時間が掛からなかった。

第二十一話

「やあ、始めましてレフィーユ…」

自分の携帯から、逆探知し難い通信機器に切り替わり、目の前にいるアルマは彼女にそんな挨拶をしたが。

「……」

「切り替えに応じてくれて感謝するよ」

「……」

「あれ、どうしたのかな？」

「いや、それは学園の生徒を守るためにやったのだが、すまん、そんな声で『始めまして』と言われてもな」

「ああ、ごめん…、あの魔法使いはこんな声だったね。」

でも、それでも私が話してるとわかる？」

「いや、構わん、アイツの本当の声を昔、聞いたことがある」

「そういえば、昔の『魔法使い』はあんなマスクをつけてなかったね」

アルマは手錠を掛けた自分に目をやるとボイスチェンジャーを外して改めて挨拶をした。

レフィーユのいる場所が息を呑むような反応をする、それについて笑いながら『変わるかい?』と言うと『頼む』という声が聞こえたので、アルマはにこやかにマイクを近づけてくれた。

「…どうも、レフィーユさん」

「ふっ、元気そうじゃないか、さすがに三日間も捕まる気で同じ場所を徘徊しただけの事はあったな?」

「おかげで、これで『カリフ』の存在が浮き上がりましたよ」

ワザとらしく、アルマは言う。

「キミはそれが目的だったのか、どおりであんな安いラーメンを食べ続けてるなと思ったよ。」

見事にワナに掛かってしまったようだ

「ほう、ラーメン?」

「一杯、200円のラーメンでね、あれで元値が取り返せるのか疑問に思うくらいおいしかったよ。連れて行ってもらった事ないのかい?」

「なるほど今度連れて行ってもらおう。」

それでアラバ、様子はどうだ?」

すると突然、男の声が入ってきた。

「聞こえるか、アラバ君、オズワルドだ。きっと助けに行くから冷静に状況を伝えるんだ」

ため息を付いたのはレフィーユだけではない。アルマが代わりに答えた。

「何度、言わせればわかる。キミに興味はない。レフィーユを出したまま、キミはしゃべるな」

「さつきは人質がいるから、貴様の要求を飲まざるおえなかったんだ。」

覚悟しろ、墓荒らしども……」

「おや、テレビに出ていたキミを見る限り、信じてないように見えただけど？」

「ぐっ!?!」

「代われ、キミの相手をすると言が拗れる」

そう言つと、しびしび代わっているのか時間が掛かっていた。

「ええと、話を戻しますね。まあ、こうやって捕まったワケですが、人質としては高待遇な対応でしょうね」

「高待遇?」

「目隠しもされてませんし、何しろ手錠が前に回されていますから

ね

「おや、アラバ君、それはどういう事かな？」

「人質に手錠をかけるというのは、普通、逃げにくいように手を後ろに回して掛けるものだからですよ。」

それに目隠しもされてませんし、その事から、すぐに帰らせてくれると言ったのは信用してもいいでしょう。」

ちなみに、残念ながら外の景色は見えませんがね」

「…やるようだね？」

「ふっ、なかなか賢い男だな。」

人質になった際も、近くにいた子供に危害を加える可能性があったと報告を聞いている」

「なるほどキミが彼を特別視するのは、『いろいろ』とあるようだね？」

「お前とて、この男だけを狙ったのは『いろいろ』と理由があるのだから？」

すると二人はどちらともなく『ふっ、ふっ、ふっ』と笑い出したので、誘拐された身である自分は身震いしていた。

「じゃあ、とりあえず今はドライブを楽しませてもらうよ。」

彼はちゃんと無傷で返すから安心してね」

『ばいばい』と気軽に、見えるはずもないレフイエーユに手を振り
そんな態度で通信を切ると、車も止まった。

第二十二話

アルマとのドライブが終わる頃には、夜になっていた。

アルマの乗っていた車を見送り、しばらく歩くと見慣れた白鳳学園の正門。

もう門限も過ぎ、その正門前には警備のために治安部が二名立っていた。

このまま目の前に現れようかと思ったりもしたのだが、少し頭の整理をしておきたかったので、遠回りをする事を選んだ。

裏門に向かうワケではない。

ただ警備もなく、別の入り口から入ろうとそこに立ち、身を屈める。

「よいしょっと」

古来より学園といった建物というのは、特に生徒というのは潜入できる場所というのを知っているモノである。

それは学園側とて、狙って作ったワケではないだろう。

だが立地条件により大きくなってしまった構造、特にこんな雨水を逃がすための『溝』は、別に汚れてもなく、自分が身を屈めて潜入するには適していた。

しかし、学園側とてコレを黙っているワケではないというのも頭に入れておくのも大事である。

今いる状態が夜だとはいえ、目の前は真っ暗、それは大きな鉄板でその溝を塞いでいるのがいい証拠だ。

別に驚くわけではない、いつもの事だ。確か四隅にボルトで締めてあったのも覚えていた。

何故なら、時折、そのボルトを外して学園内に外にと、これは秘密の脱出経路でもあるのだから…。

おい、じゃあ、お前はいつも学園を抜け出す時に、ドライバーを持っていくのかって？

ドライバーなど使わない。ドライバー代わりなら手を合わせるだけで出来る。

そのまま手を上にある鉄板を持ち上げるような体勢で掴み『闇』を扱いボルトの解除に向かわせようとしたのだが…違和感に気づいた。

ボルトを外そうとする前に鉄板が持ち上がったのである。

前に潜入した時は、一人だったので、このボルトの締め忘れをしたのだろうか、ほふく前進で学園内に潜入しながら。

ふと、物事には完璧を求める事は出来ないものだと思った。

例えば、レフィーユ・アルマフィという女である。

綺麗に整った顔に何頭身かと思われるスタイル、家柄だけではなく成績も優秀で、この学園の治安部のリーダーである彼女にも欠点はある。

それは料理である。

彼女は料理が出来ないのは、有名ではあったのだが、あそこまで出来ないとは思ってもよらなかった。

料理くらい教えてあげなよ？

自分は確かに料理は出来る、彼女も教えた通り、食材を切れる。

だが教えた通り煮込んだところで、思わず言ってしまう。

「どうして、こうなるのですか？」

一体、彼女の手から何が生み出されるのであろうか、出来上がったのは『宇宙怪獣』だったりするのである。

始めに味見して痙攣して以来、二度と食べる気が起きず。

「正直言つて、初等部にいた頃は家庭科の授業は受けたことがなくてな」

レフイーユも理由にならない言い訳をするのだが、反論として彼女には出来る料理があるという。

それはサンドイッチである。

だが、みなさん、考えてほしい。

サンドイッチ、料理といえますか？

あははっ、それはねえ？

-グサツ!!

「ぎゃあああー!!」

背中 of 激痛が彼女のサーベルだと知らせた。

「ふっ、すまん。何かお前が失礼な事を考えてそうだったので、ついやってしまった」

「レフィーユさん、東方術で人を遊び半分で刺したりしたらいけないって、初等部で習いませんでしたか？」

そう言いながら、身体を起こして溝から出ると辺りを見回していたのでレフィーユが微笑んで言う。

「安心しろ、私一人だ。」

というより、オズワルドの警備員は定時で帰っていったよ、まるでOLの様にな。

まあそんなアイツは、チエンバレンがお前の事で誤ってきた際に助からない事を望んで聞こえない程度に言っていたぞ？

『良くやった』とな。

そんなオズワルドがお前の姿を見たら、どう思うか楽しみだ」

「随分、物騒な話ですね。こっちは『研修』した帰りなんですよ」

「研修、ドライブではなかったのか？」

「まあ、七色同盟、今回の事件にしても、こちらは結局、何も知りませんから、いろいろとアルマさんが教えてくれました」

「随分と軽率だな、その話が『カリフ』の作り話だと言う可能性もあるだろう？」

「その可能性は否定できませんがね、でも一つだけ間違いじゃないのだろうなと思える事があったのでね…」

おそらく彼女にしては予感があったのだろうか『なるほど』と一つ頷き、少し困った様子を見せて聞いてきた。

「という事は当然…聞いてきたのか？」

「まあ、今回の婚約話の大体は…」

しばらく経って、ようやく今回の発端を口にした。

「七色同盟の最後の一人、ミン・チョンワさんでしたが、殺されたらしいですね？」

「ああ、この記念日が近いというのもあって、まだ公にはなっ

いないが、今回の婚約話はそれが大元だ。

あんな事態を防ぐために、エドワードのように結婚をして、まとめて警備を強化した方がいいとオズワルドはお考えのようだが、こちらとしては簡便願いたいものだがな。

それでカリフは他にも何か言っただけでなかったか？」

「いえ、特に、何かあったら携帯で連絡してくるそうですよ」

「ふつ、普通にそういう組織と連絡が取れると言っつのは、いろいろ問題があると思わないか？」

だが、一応、おまえの意見を聞いておきたい…今回、どう見ているのだ？」

それには回答に困った。

『貴女が、いや、貴女の組織がそのミン・チョンワという人を殺したのではないのか？』

アルマとの会話の中で、いづれ、この問いに辿り着くのは、時間の問題だったがアルマはこれだけを返してきた。

『それはキミが決める事だ』

まるで日記帳を手渡した時と同じような事を言ってきたので、反論しようとしたのだが。

『キミは日記帳を受け取ったのだろうか？』

それは「どう」いう事でもある『

そういって、アルマはこれ以上答える気はなかったので、しばらく黙るしかなかったのだ。

「どうなると…」。

「信用は仕切れないとしか、言いようがないですね。

せいぜい、利用されてます」

「ふむ、妥当だな」

彼女もそう頷く中、最後の問いを思い出した。

「はかも 墓守り…」

「どうした？」

「いや、最後にアルマさんから、教えてもらったのですがね。

『カリフ』って『墓守り』という意味らしいですよ?。」

「オズワルドは『墓荒らし』と称したが。その『カリフ』の首領であるアルマは『墓守り』か…」

「レフィーユさんは七色同盟の一人なのに知らなかったのですか?。」

「様々な事を教え込まれたのはたしかだが、それは知らなかった」

「ですがオズワルドさんは知っていました」

「だがそれは明らかに矛盾しているな。」

「一体、どういう事だ…?」

おそらくカリフの頭領であるアルマは、自分の組織のことなのだから嘘は言っていないだろう。

しかし自分が『信用は仕切れない』と言ったためか、二人とも、これ以上、何も言えなかった。

第二十三話

「その核爆発により『フォルグナルト公国』は、国土の三分の一を失う被害を負う事となった。

そうしてその核テロリズムにより、翌年、ようやく国々は戦争の放棄、核弾頭の廃棄を決意。国々は軍事費の何割かをフォルグナルト公国に寄付したのである。

『世界が始めて手を取り合った日』とも称され、そして、その様々な協力によって経済が均衡を取り戻した時に『廃戦記念日』を制定したその日にフォルグナルト公国は名前を変えた。

それが『ワールドゼロ』である…」

国とは戦争、経済破綻で崩壊して、その名前は、土地、その時にあつた思想によって、様々に名付けられる。

その法則は、魔法の使える世の中になっても変わらないのだろう。

そう考えていると、教科書の朗読が終わった。

何の珍しいものではない、学生身分でよくある風景。

俗に言う『本読み』である。

あんな事件があつた後で、そこを偶然に授業でやっているというのは、話が出来すぎているのではないのかと思われるが、別におかしい話ではない。

『歴史の教科書』と言うのは、大まかな歴史を抜粋しているのは従来の教科書と代わりはなく。

しかし、データや映像が残った時代から3000年たったというのは、あまりにも膨大すぎて、教科書に書ききれないという問題が生じていた。

それを補うためには、どうすればいいかという問題に直面したとき、これは幸いなのだろうか、世の中の物騒なトコロに目を着けた。

事件が起きた際に、今までの授業進行を一旦止めて、そこで起きた土地、その歴史背景を教えるようにしたのだ。

ましてや今回は国際問題に発展しかねない、というのを捉えてもらうと今の状況はおかしくないのだが…。

「すみません、もう少しこっちに本をよせてもらえますか？」

自分はこっちの方が出来すぎではないのかと思う。臨時転校してきたエドワードに教科書を見せているのだから。

『ふっ』と一番前にいるはずの誰かの笑みが聞こえたような気がしたが、一番後ろにいる自分はノートを取るの、教科書を寄せるが、エドワードは教科書は見ているものの、ノートを一向に取るうとしなかった。

そんな様子の自分が見ている事に気付いたのか、エドワードはノートの一枚を取って、何やら書いてこちらに見せた。

「一応、この辺は七色同盟の一人なので、嫌というほど学ばせてまして、他の学園の授業とはいえ失礼ですが、あまり変わりありませんね」

『なるほど』と頷く中、この文面のさらに下にはこう書かれていた。

「聞きたい事があるのでしたら、どうぞ遠慮なくここに書いてください」

少し目を細めてしまったのは遠慮していると思われてしまったが、こっちは理由があった。

「前にシャンテさんとチェンバレンさんは自分の行動を随時、オズワルドさんに報告してましたからね。」

おかげでみんな少し自分の事を心配してくれたのかなと思っていたら、『同じ場所をうろろするから、捕まったんだ』なんて言われたのですよ？

「すいません、でも、私にも何か出来ないと思ひまして協力させてくれませんか？」

正直言つて、こう書き示されてはいたが、未だ警戒していたので軽く聞いてみた。

「ミン・チョンワさんの事、残念でしたね？」

「どんな人だったのですか？」

エドワードは驚いた様子で自分を見たが、返信をよこした。

「レフイーユさんから聞いたのですか？」

「あんな事があつた以上、無関係と言うワケにはいきませんので、聞かせてもらいました。」

「どんな人だつたのですか？」

「ミンさんは、一度お会いした程度ですが、それは厳格で正義感の強い人でご職業は警察だと聞いた程度です」

『一度しかあつた事がない』というのは、それだけ治安が悪いからだろう。それだけ治安の悪さが警察というのは休みがないのだと思っているとふと疑問に思った。

「警察という事は、戦闘訓練を受けている人という事ですよね？」

「そんな人を殺すなんて難しくないですか？」

「すいません、そこはよく知らされてなくて話でしか伝わってません、自宅で殺害されたいらしいのですが、凄い惨状だったそうですから。」

一応、警察が確認の為に親族には顔を見せたいらしいですが、私たちに本人確認の写真を見せるのを控えた程といえわかりますか？」

どうしてレフイーユが『カリフ』の存在を、信じて指摘したのか
ようやく理解わかったところで一つ聞いてみた。

「エドワードさんはオズワルドさんが言っていた『魔道士の仕業』と、レフイーユさんの言った『カリフの仕業』、どっちを信じているのですか？」

「現実にいる世界唯一の西方術『闇』の使い手、もう片方はおとぎ話に出てくる組織ですからね。」

それは現実にいる方を信じたいと言いたいけどオズワルドの言う事には、少し無理があると私も思いますから。

どちらとは言えないと言っておきます」

「カリフはおとぎ話に出てくると言いましたが、どんなお話なんですか？」

「詳しくは七色同盟を元にしたおとぎ話や小説に良く出てくる組織なんです。」

諸説様々ですが、協力してくれる組織、悪い組織と言う感じで大まかに分けて二通りの扱い方をされてる組織ですから、よくわかりません」

のらりくらりと避けているのか、それともホントに言っているのかと、また壁にぶつかったなと思ったその時、チャイムがなった。

次の時間は体育だった。

第二十四話

だが、エドワードはこの体育の授業でみなに関心を集めることになる。

「エドワード、無理せんで歩いてもええんやで？」

先に1000Mを走り終えたサイトが言うように、エドワードはあまり走ることがなかったのだろうか、息が絶えていた。

「いえ…ご心配…なく…」

その返答が、もう何度目になったのだろうか、元々、後方の集団を走っていたエドワードはとうとう一人になるが、歩く事はなかった。

そうして完走した最後尾でゴールしたその姿は、オズワルドの印象やら、少し離れたトコロでやっている女子の体育の授業をサボっているアイーシャとは別の印象を与えた。

「ワシはイワトちゅうモンじゃが、お前、根性あるのう？」

「すみません…授業の…進行を…遅らせて…」

自分だけではなく、サイトやイワト、ここにいる男子生徒は見直す事となり、次第にその一生懸命さが、周りの生徒に好印象を与えていたのだ。

それに引き換え…。

といった光景が、この休憩時間にあった。

少し離れたトコロでオズワルドの後ろ姿が見えたので、気配を殺して尾行をすると人気のない校舎裏についた。

その待ち合わせの相手は、シャンテ。

彼女は笑顔で出迎え、談笑をし始めていた。

会話はよく聞き取れない、これ以上、近づくとシャンテが気付くだろうと、そんな予感するので、会話がよく聞き取れなかったが…。

自分が見ている場所は、別の異変を見つけた。自分と同じ距離感でその二人を見ている人物がいたのだ。

それは幸い自分に気付いていないが、そんな中、二人はキスをする。

その姿を見ていたチェンバレンは下を向く。

一体どういう事なのだろうかと、あの後、別の場所で白々しくチェンバレンに聞こうとするが…。

「いやー、悪いけどなー」。

お前は拉致されたんだから、気をつけたほうがいいだろー。一般人が首突っ込まねー方がいい」

このチェンバレンは愛想は良いのだが挨拶も程ほどに、のらりく

らりとかわされていた。

そうして、アルマとはあれ以来、連絡ゼロ、おかげで自分の頭はこんがらがるばかりで、深夜のトレーニンブルームにて、大きく深呼吸をする。

すると月影に照らされた自分の影が伸びて一定の距離、一定の間で分離して、球体を作る。

軽く身構えて、右手で闇の球体を回して、そのまま投げるように押すと、まるで球は紐でつながれたように慣性的な動きをみせ、天井に付いた途端に『ぼとり』と落ちる。

だが回転が掛かっている、その球体はそのまま数名のバレリーナになっていた。

ラインダンスのように、足を揃えて踊り、華麗に舞わせていると。

「毎度毎度、見て、気になるのだが、これはお前の趣味か？」

別の闇の中から、レフِيُّユが現れた。

「細部コントロールの一環ですよ。これでもちゃんとしたトレーニンブルームなんですよ？」

ちなみに曲目は『くるみ割り人形』である。

「そんな事は聞いてない、まったくどこで振り付けを覚えてくるのだ？」

そう呆れていたのだが、チェンバレンの事を聞く良い機会だったので、機材に腰を下ろして聞いてみた。

「パタヤ・チェンバレン…か。」

七色同盟の中の末裔であり、スカーフの色はオレンジというのはアルマから聞かされているのか？」

「はい、後は西方術の『風』の使い手であり、それを聞いた体術の使い手だと聞かされている程度ですが、正直、そこまでしかなかったのになったのですよ。」

するとレフィーユは『ふむ』と考え込み、唐突に聞いてきた。

「じゃあ、あの男も『婚約者がいた』というのを知っているか？」

「…婚約者ですか？」

おそらく今までの流れだと、相手はレフィーユと同じように七色同盟の一人なのだろう。

しかし、今回はあんな出来事があったせいも、名前が出た。

「もしかして、相手はシャンテさん？」

「まあ、流れとしてはそうだ。」

シャンテ側が婚約話を用いたのだが…。

「この婚約話は少し違う方向に向かってな」

「違う…、そういえば、さっき『婚約者がいた』と言いましたね。」

もしかして、貴女のように『家が勝手に決めた事だ』と言って、シヤンテさん本人が断ったのですか？」

「いや、チエンバレンの方が断ったのさ。」

『繋がりがあるとはいえ、当主が一つにまとまったら駄目だ。』

もっと枝分かれする選択をするべきだ』と自分が一人息子である事と、テッドムーン家の血族のない事を指摘して断ったのさ。

まあ、両家としても『七色同盟の一人』という、大きな名誉を捨てれるわけもなく。結局、現当主同士の統合話はなくなったのさ。

私もその意見に賛同したのだが…オズワールドが色々としつこくてな。

『私が当主を降りれば、セルフィが当主というワケか、だったらセルフィを娶ろう』などというのだから、正直、あの見境なしには腹が立っているの…だが…」

その時、トレーニングルームに携帯が鳴り響いた。

誰だろうかと思ったのだが、レフィーユは液晶を見て怪訝そうな顔ながら出た。

「もしもし…?」

「どう聞いてきた後『ちっ』と舌打ちして、携帯を切った。」

「どうしたのですか？」

「…無言電話だ。」

さっきからしつこくてな」

「着信拒否すればいいじゃないですか？」

「いや、してるのだがな。」

相手は番号を変えて、やって来てしつこくてな」

「ああ、そういえば」

普段ならいたずら電話の相手などわかるわけがないが、思い当たる節が『自分』にあった。

「今度、私が出てもいいですか？」

「どうした？」

「それアルマさんだと思ひまして」

「ちょっと待て、どうしてアイツが私の携帯番号を知っている？」

「いや、それは私が教えましたから…ね。」

…睨まないでくださいよ。

確かに携帯の番号を教える際、私の携帯の番号を教えようと思ったのですが…」

そう言いながら、ポケットから携帯をレフューユに見せると凝視した。

「凄いな…私より多いぞ?」

「いや、私もね。」

『組織』の名前で、携帯に登録するのが悪いのですが、今じやあ、友達より『組織』の名前が多いのですよ。

あの時、ぎっしりと登録されているのを見て『へこみ』ましてね。

さすがにデータを自分で管理できる時代を恨みましたよ」

「だからって、私の携帯の番号を教えるのはどうかと思っぞ?」

また彼女の携帯がなって、それを自分に手渡すので出てみた。

「もしもし…」

すると自分の憶測どおりだった。

「キミの携帯電話は、彼女に管理されているのかな?」

第二十五話

「確かに携帯で連絡すると言ったけど、アラバ君、キミの携帯の番号を教えるのが礼儀と言うモノじゃないのかな？」

「別に構わないでしょう。」

どうせ、こうなる事になると思いましたからね。それとも何か不味かったですか？」

こちらとしては完全に信用しているわけでもないのですが、勘ぐるように意地悪く、そして白々しくもそう聞くとアルマは呆れているのか頷きながら平然と答えた。

「まあ、信用できないのならそれでいいよ。こっちとしても彼女の番号を聞く手間が省けたからな」

「と、いいいますと？」

「彼女に代わってくれないか？」

どうやら、自分の態度はそれで構わないらしい、ポリュームを最大にした携帯は彼女に聞こえたのだろう。

そのまま代わり『私だ』と彼女は出た。

「やあ、レフィーユ。調査は進んでいるかい？」

「どういう意味だ？」

「このままの意味さ、今日、電話しようと思ったのは、僕の方から情報を提供してあげようと思ってね」

暗がりのトレーニングルームで音量を最大にした携帯がそんな会話をつむぎ出す中、彼女も不快感を味わっているのだろうか、顔をしかめていた。

「何を考えている？」

自分もあの時、拉致された際にその台詞を言った事がある。

しかも、何度も、だからアルマの次の指示が予想できた。

「レフイーユ、それはキミが決める事だよ」

投げっぱなしで、他人に判断をあおるのだ。

普通だったら『教えたのだから、私のために何かしろ』と言った感じで見返りを求める。しかし、このアルマはまるで見返りを求めず『協力してあげよう』と言うのだ。

今までが異常だったのか、それともこのアルマが異常なのか…。

様々な取引を見た、自分にとってはとても不快感の残る印象だった。

「ふっ、だがこの男から聞いたが、お前がミンを知っているという事は、事件を知っているという事だ。」

お前達が殺したのかも知れないというのに、信用できると思うか？」

「ごもつともな指摘、しかし、レフィーユの言った事は自分も口にした事だ。」

アルマにとってそれがとても可笑しかったのか笑いながら答えた。

「でも、残念ながらキミは今回ばかり、調査は全然進んでない。理由はわかるだろう？」

「だから、利用されるといふのか？」

「いや、利用してほしいだけさ、そこから後の調査はキミに任せろ。」

「悪い取引じゃないと思うけど？」

「断るだろう…。」

「そう思ったのだが、どうやら彼女にも考えがあるらしい。」

「いいだろう、今からか？」

「外野が言うのも何だけど、出来れば早めの方がいいと思うな。」

「その代わり一人でやって来ることが条件だよ？」

「ふっ、一人か？」

「そう一人だよ」

すると二人して笑うが…。

「あ、あの二人ともどうしてにこやか何ですか？」

この奇妙な光景に一人自分が蚊帳の外だった。

「別に僕はただ、彼女に協力をしようとしただけだよ。

何かおかしい事があるかい？

それにキミは僕に携帯の番号を覚えてくれなかったじゃないか、
いいペナルティだよ」

「ふふ、そうだな、じゃあ待ち合わせはどこにする？」

にこやかだが『くくく』と笑いあう二人にこれ以上追求をするつもりはなかったのだが、レフィーユはアルマの指定した場所に向かう事にした。

その場所は自分が始めて、アルマと出会った公園であった。

第二十六話

アルマと携帯のやりとりがあつて、その公園に車でやってくるのに、そんなに時間が掛からなかった。

『すこし時間が掛かった』が、感覚的には『今から行く』というのには間に合っているだろう。

『緊急出勤中』というプラカードを車内でミラーに掛けて、車を降りると辺りを見回す。

もう深夜が近いためか、ほぼ人通りが無い事に自然と緊張をする
が公園に入るとアルマの姿が見えなかった。

仕方ないので要所に点々と伸びている灯りをしばらく歩くと、やはりといえば良いだろうか心配がした。

それを拍子に自分が注意深くなったせいか、自分の周りを数名の
心配が取り囲んだので、彼女ではないというのは容易にわかった。

「ふう」

ため息を一つして手袋を握りなおし、自分の東方術でサーベルを
作り出す。

その時、ようやく声がした。

「随分と物騒な人だね。まあ、別に構わないけど」

「ふっ、それで何の用だ。」

私をここまで来させたのは、ワケがあるのだろうか？」

そう言うが尚も、アルマは笑っては言った。

しかし、ゆっくりとカタールを両手に構えたので聞いてみた。

「どっいっつもりだ？」

「色々と話したい事があるけど、キミの腕前を見せてもらおうかと思ってるね？」

「どつやら」別に構わない』と言ったのにはこういう意図があったらしい。

ゆっくりと身構えると、アルマもそれに続いて構える。

その姿を見ると緊張した。

『多分、私より強い』

そんな直感がしたからだ。

アルマは笑いながら『歩き』で距離を縮めるが、その動作は『身構えて距離を詰める』と聞いていいだろう。

打ち込んで受け止められるのが目に見えていた。

「さすが、そこら辺の人とは違う。経験、鍛錬、技能どれも噂に

違わず。ホンモノだ」

そう言いながら、アルマはカタールを振り下ろす。

「はあっ！！」

それを切り払い、反撃するがカタールで軽々と受け止められ、更に数回の剣撃の火花を散らす。

ほんの数回、しかしそれがアルマがどれほどの腕前なのかが理解できた。

「ふっ、どうやら、貴様はどこぞかの金持ちとは違うようだ」

平然としたアルマと視線が交差する。

「お褒めに預かり光荣だよ。

だけど腕前を見ているんだ。そろそろ本気を出さないと失礼だと思わない？」

「ふっ」

髪をかき上げ、大きく深呼吸をして答える。

「では、いくぞ…？」

大きく振り抜き、その顔にアルマはカタールを振ろうとするが…途中で止めた。

「中々、鋭いな」

いち早く私の付加能力である『残像』だと気付いたアルマは、その残像から突き破った切り払いを仰け反って避けた。

そのまま左手でアルマのサマーソルトを受け流して、今度は身を屈めた姿勢のアルマの距離を縮める。

体勢を崩したアルマの付加能力の警戒はあった。

しかし…。

「ボクの負けだよ」

「どういっつもりだ？」

喉元にサーベルを突きつけられ、降伏の代わりなのかカタールを消しながら言った。

「言っただろう、腕前を見せてもらおうとね。」

しかし、有名になれば、その能力を研究されるというのに、まったく対応が出来なかったよ。

ホント、大したモノだね」

「ふっ、お褒めに預かり光栄だ」

「ふふふ」

アルマが笑い出し、つられて笑うと外部にあった『気配』が一斉に立ち上がる。

「ここまでだ!」

大口径のライトに照らされて、少し目が眩んだが、声からしてオズワルドだろう。

「カリフの首領、アルマ。今度は我が婚約者を狙うとは卑怯すぎるのにも程があるぞ。」

抵抗しようなどと考えない事だ。お前は我ら警備員に囲まれている」

自信満々に言ったオズワルドを尻目にアルマは聞いてきた。

「隠れておいて、それはどうかと思うのは私だけかな?」

「ふっ、どう捉われようと仕方が無いな」

そう聞こえる範囲でアルマに聞いた。

「どうやら、治安部の人間もいるようで、人が多そうだが…」

ここからが、アルマとの作戦だった。

「『出来る』か?」

「こつという場合、人質をとったもの勝ちだよ」

手を上げて、もう一度、カタールを作り、周囲を警戒させているとアルマはライトに向けてカタールを投げた。

『ボンッ』

暗くなったのが合図だとわかった。

「ぐわっ!?!?」

数名があっという間に、アルマの部下に取り押さえられる。

オズワルドも例外ではなく、取り押さえられるのを見て、アルマはにこやかに少しワザとらしく言った。

「これで形勢逆転。どうする？」

抵抗するなら、わかるよね?」

第二十七話

アルマの鬪いは罔。

今のレフィーユの周りはオズワルドによって買収されていたらしい。

『彼女の動きは逐一連絡しろ』

…そんな感じだろうか、オズワルドの指示のおかげでレフィーユは捜査をする事が困難になっていたらしい。

アルマはどこでそんな事を知ったのだろうか、先ほどの連絡はその買収された治安部員の解放とオズワルド配下の警備員を一掃するのが目的だったらしいのだが…。

アルマのそんな提案を持ちかけられた時、彼女と二人で思った事。

それは気味が悪い…

という一言に尽きなかった。

「どうして、後を尾いて来たのだ!？」

「あはは、良い気味だね。

無能な警備員に買われた治安部、それらを捕らえられて身動きが取れないかい？」

「ちい
」

そんな自分はそんな三文芝居を少し離れた場所で、警戒のために闇で作られた法衣を身にまとったまま見守っていた。

あまりにも軽率すぎるアルマの行動を、公園を一望できる建物より上から見下した後、周囲を警戒するがアルマの狙いが何なのか理解出来ないのは、最大の『不利』には変わらない。

まだ茶番は続いている。

レフイーユも話しながらでもあるが周囲を警戒しているのが、ここからでも違和感が感じ取れる。

それだけあまりにもアルマの描いた台本通りに進みすぎるのだ。

治安部の一人が何とか反撃の糸口を掴もうとアルマに迫る。

しかし、これも台本だ。

アルマの攻撃をくらい。その場で彼女に半ば羽交い絞めに取り押さえられる。

その拍子にアルマは夜だと言うのに自分のいる場所を見たような気がしたので慌てて身を屈めて、様子を見るが、どうやら気のせいだったらしく。

アルマは次の展開に身体を動かす。

当然、自分は見逃さないと先ほど捕らえた治安部員を背後から傷

を負わせるという話だ。

「背後からなら、防御本能は作用しないからね。

不意のタイミングで人質を傷つける事など、普通の人でも簡単だ
ってキミは知ってるよね？」

そういうアルマの一言に、レフィーユは舌打ちをして、頷きざる
終えない状況の作り、オズワールドを睨みつけ、後の展開を優位に展
開させる。

まだアルマの台本の展開どおりに進む、レフィーユもまだ冷静だ。

おそらくレフィーユの携帯番号を教えてもらおうとした、そのや
りとりでアルマは自分の存在がどこかにいると考えられていると思
っていいだろう。

さつきからアルマもキョロキョロ動いていたのが見て取れたから
だ。

気味の悪い茶番が続く中、月明かりが自分を照らされ影がゆっく
り伸びる。

そしてここにはもう一つの影があった。

その影は自分を見ていたのが解ったので、ゆっくりと身体を起こ
した。

「やはりいましたか……」

自分より頭上を見上げると、虚空を浮いていた人物が飛び降りながらハルバートを振り下ろす。

「私の方こそ、やっぱりいたわね……」

後ろに飛びのきながら見ると、その人物はくるくるとハルバートを身構えた、そこに立っているのはレフィーユの妹、セルフィッシュ・アルマフィだった。

「いい勘をしていらっしやると言いたいのですが、私に構うほどの貴女は暇があるのですか？」

眼下では茶番、目線には純粹に立ち向かおうとする戦乙女ヴァルキリーは同じように眼下に広がる景色を眺めた。

「尾行して手柄を横取りなんてしようとするから、ああなるのよ。いい気味じゃないの」

「随分とオズワールドさんの事をお嫌いになっっていますね？」

「はつきり言って嫌いね。世間じゃ、トラン家の御曹司だけど、実質、ワールド・ゼロの七色同盟の記念館の館長、その警備部隊の部隊長」

「立派な肩書きじゃないですか？」

「ふん、アンタね。」

私は見たから言わせてもらうけど、あんなのただ命令しているだけの人よ。

現場も知りもしないで、部下の日報も見ないで判断する。

あんなの部隊長じゃなくて、愚隊長よ。

それでいて、七色同盟の肩書きであぐら掻いて税金やらで収入を得られるのだから。

そのお金で『幹部会』なんて宴会を開いているのだから、姉さんと感じた印象は一緒よ」

「いい税金泥棒ですね」

「言い訳はしないわ。」

でも、この町に来て思ったけど、私にとって貴方はもっと嫌いな人物よ」

セルフイはハルバートを構え、空を見上げながら言った。

「静かな夜よね？」

そう言われたからだろうか夜なので視界が悪いためか、景色を見回す。

「初めてよ、夜に鳴く虫をここまで聞き入るなんて」

『りんりん』と普段聞いている名前のわからない虫が、それが何かに食わないのかわからないうちにセルフイが言う。

「初めてよ、ここまで寝入れるなんて…」

「それが何か？」

「静か過ぎるのよ…」

そういえば、レフィーユに聞いた事があった。

この町の夜はとても静からしい。

さすがに事件が起きれば騒がしい時もある。

しかし、彼女のいた町、いや、今の世の中の『町』と呼べるものは、とても騒がしい。それこそ目を瞑れば、サイレンの音がするくらい。

人間には環境適応能力ある。

それは人間が日中、サイレンが鳴る日常を睡眠をとらせるほど。

だが、レフィーユの言う異常は妹のセルフイも感じたのか…。

「レフィーユさんの活躍のおかげではないのですか？」

そんな返答にも軽々と答えた。

「違う、アンタの存在のせいよ」

「どづいづい事でしょうか？」

「ふん、考えれば簡単よ。」

所詮、治安部には学業をおろそかにしないように活動時間の限界があるように、正義には限界があるからよ。

そんな中であなたは『無差別』だわ。

正義に加担すると思えば、こんな感じで悪にも加担する…」

セルフイはアルマに指を差したまま、そして、昔、レフイーユと出会った時の答えを言った。

「その証拠に姉さんは、私のいる町でこんな夜を作り出せてない。

…私は認めない、貴方の存在のせいで良きも静まるもおろか、悪しきも黙る、この町を…！」

だから、貴方を認めるワケにはいかないわ」

『私は私のやり方で正してみせるわ』

そして、彼女のそんな一言にやはり姉妹だなど思ってしまうセルフイを見ると、知る由もない彼女は身構えていた。

こうなると言うしかないだろう。

「『この前は、油断をしただから負けた』とは言わせませんよ？」

「ふん、アンタだけには絶対、油断はしたくないわね」

そんなセルフィの一言は、逃げられない事を感じ取らせていた。

第二十八話

彼女は微笑みながらハルバートをぐるぐると頭上でまわす。

「いきなりですか…」

つい呟いてしまうように、その動作が彼女の付加能力を生かす動作、それが彼女の能力の『足場』を作る事だと言う事は経験していたので、半ば呆れる自分を尻目にセルフイは身構えなおす。

「ふん、アンタに油断できるワケないじゃない。私から見ればアンタの方が余裕はあると思うわよ？」

「それは貴女のお仲間がないからでしょうね。」

その能力は攻撃を遮る手段として、さらに攻撃の手段とするのが、貴女の戦い方ではありますが、貴女の能力は人、すなわち仲間がいると更に厄介ですからね。

一度聞いてみたかったのですが、どうやったら、こんな目に見えない足場を人に正確に伝える事が出来るのですか？」

遠まわしに『貴女にはこの足場が見えているのか？』と聞いたのだが…。

「別に見えても見えなくても、位置を教える事くらいは簡単ですよっ？」

と、さらりと凄い事を簡単だと言っただけだ。

「人間は見えないものを伝えるのに、どれくらいの苦勞をしないと思っているのですか？」

「ふん、うるさいわね、でもアンタ。さっき私が負けたって言ったけど、その後に私、リベンジしたわよね？」

「三対一で、そんな事言われましてもねっ!？」

「仮にも女相手に随分と、女々しいじゃない!？」

「武器を持った女性三人を相手するのに、何が女々しいのです、かつ!？」

そんな渾身の攻防のさなか、女々しいと言ったセルフイが自分の手刀を斧槍で捌き、自分の胸を目掛けて突きを放つが、それを身体を捻って避ける。

おかげで闇で作られた法衣が解れをみせるが、一つ撫でると元通りになる。

その動作に舌打ちをしながら、飛び込もうとしたセルフイに向かって闇を乱舞させた。

動作任せに、そして、続けざまにそんな事をするので、セルフイは余裕を持って避ける、そんな闇の塊は『足場』に当たって四散するのを見てセルフイは言った。

「そろそろ、引導を渡して上げるわ」

「じゃあ、貴女相手にふざけるのは、さすがにキツイようですから、そろそろ真面目に戦いましょうか」

闇で出来た法衣の裾が変に延びたが、セルフィは今まで本気じゃない事に苛立つように一気に距離を詰める。

「そんな戯言が、一番気に入らないのよ!!」

挑発に乗ったとわかっていたのだろうか、避けた体勢に入った魔道士に先読みをかけて、ハルバートを振るう。

「…えっ!?!」

その時セルフィの思考は『真上に飛んだ』と思ったのだろう。

目が追うように、飛んだと思われたその先にはその魔道士はいない。

しかし、次の瞬間、セルフィの後ろに何かが体当たりした。

- 自分は今、漆黒の魔道士という人物と戦っている。

その感覚がこれが彼の攻撃だと理解させて、転がりながらも距離をとろうと、『足場』に着地してさらに逃げるように跳躍を見せる。

「甘いですね」

耳元でそんな事を言うので、驚いたセルフィはその足場から落ちる。

しかし、慌ててはいたがハルバートを振るい、足場を作り先ほど落ちた場所を見直すが、さらにセルフイは驚いた。

その魔道士は空を飛んでいたのである。

自分が静止画像のように空に留まるのではない、自分より走るのではなく、慣性が働くように、遠心的に距離を詰め、自分の近くを遊泳して蹴り込む。

全体重が乗った重い攻撃で受け止めたハルバートを落としそうになるが、もう一回転するようにその魔道士はこっちに向かってきた。

何も考えず、さらにハルバートを振るい、上に続く足場をハルバートで描く、ふくらはぎの辺りが何かが掠ったような気がしたのが、彼の攻撃だとわかりきっていたので。

振り向かず、さらに高い場所に移動して、居た場所をようやく振り向くが、それを見た時、彼はバク宙でこっちに向かってきて、自分の描いた足場に着地して両手を広げて言った。

「何を驚いているのですか？」

「どうして『見えない』はずの、それに乗ってるのよ。」

『見えない』何て、闇が使える貴方には見えていて騙したのね？」

「騙してなんかいませんよ」

「なら、どうして貴方が足場に乘っているのよ」

「私は闇を撒き散らせていたでしょう？」

それで空中にある作られた足場を大体、確認したのですよ」

ようやく、合点が言ったのかセルフィは言った。

「じゃあ、言わせてもらっわ、ホント、甘いわね!!」

今、二人の立っている足場を消し、セルフィは自分側にしかない足場に着地する。

魔道士は虚空に解けていき、彼女の耳元で囁く。

「ホント、甘いですよね…」

まるでバンジージャンプをするように背後に回り、彼女に再度、体当たりをする。

自分の記憶の限りでは、今、彼女の落ちようとしている場所には足場はない。幸い低い高さで、地面に落ちたので防御本能は聞いたのだろう。

『痛み』でうめいた彼女にこう言った。

「勝負ありですね…」

しかし、セルフィは目を細めて、何をしようとしていたのだろうか…。

その動作は『危ない』と言おうとしたのだろうか。

その『戸惑い』のおかげで、自分の防御本能を背後で押し付けられた『何か』に使う事が出来た。

「うわっ!!」

背中を切りつけられた痛みで思わず、苦しみその目標によつやく目を向けたとき、セルフィは言った。

「誰、貴方!？」

そこにはまるで、テレビの見た事のある戦隊物を彷彿とさせるような仮面をつけた奇妙な男が立っていた。

アルマでもない、その異様な姿はおそらくカリフではないだろう、その人物はこう言った。

「漆黒の魔道士、大人しく日記帳を渡せ、そうすれば命だけは助けてやる」

第二十九話

そして、突然来た来訪者が襲撃したのが合図だったのか、大きな音と閃光で共にレフィーユのいる公園が歓声上がる。

「残念だったな、これでカリフ共々、そしてお前も終わりだ」

一方的に話続けるその戦隊風の覆面男に、セルフィは自分の置かれている状況を考えていながらも聞いた。

「貴方は味方なの？」

「味方だ、だからセルフィ様は下がってください」

確かに『味方』だと言った、しかし、明らかな『異常さ』に信じられるわけも無く、さらに聞いた。

「だったら、覆面を取れとは言わないけど、所属を言いなさい」

「何を知りたいのか知らないが、この男は日記帳を持っている。その方が重要じゃないのか？」

そして『下がれ』と言われるが、セルフィはハルバートを身構えたままだった。

「どうした、私達はキミ達、名誉ある『七色同盟』の味方なんだからぞ！？」

「ふん、七色同盟の味方ね……」

そう呟いて、セルフイは自分を通り過ぎ、そのまま覆面男の後ろを歩き去った。

そのおかげで…。

「あくまで狙いは私だと言う事ですか…」

「当然だ、お前は小悪党といっても盗んではいけない物を盗んだ。

感謝するんだな、日記帳を返せば生かしてやる」

「すみませんね、今は持ってないのですよ」

「だったら、どこにある？」

一旦、レフイーユ達のいるであろう騒がしい公園を眺めて、覆面の男に聞いてみた。

「見たところ、アルマさん達を狙っているようですが、じゃあ、教えたらアルマさん達を助けてくれますか？」

「それは上が決める事だ」

『それはない』という意味を示しながら、彼は剣を構えながらい
う。

「さあ、どこにある!？」

「じゃあ、最後の質問です。貴方は何者ですか？」

『上が決める』と言いましたから、貴方がボスではないでしょうが、組織名くらい名乗ったらどうですか？」

「貴様、おかれている状況がわかってるのか!？」

「まあ、少々気になる点がありますが、アルマさんにしたらこの状況が最大の狙いだった…と思いますよ?」

「言いがかりを、どういう事だ!？」

「大体、気になりませんか。」

彼女はカリフ、その組織の頭領が相手は、わざわざ實力を見にやって来たというのはおかしいのでしょうか?」

「何をワケの解らない事を…、相手はあの七色同盟の一人、レフイーユ・アルマファイだ。」

だから、本人自らが腕前を見にやって来たのだ」

「それじゃあ、合点がいきません。」

ですが特別に『あなた』に教えてあげますけど、多分ですが、この状況、アルマさんは見越していたと思いますよ?」

「何をおかしい事を、じゃあ、わざわざワナに掛かりに行ったというのか?」

「確かに自分でも適当な事を言っていると思いますよ。」

だが、アルマさんはいつも私にこういいますよ。

『自分の目で判断してほしい』とね…。

協力を求めもせず、一体、彼女は何を判断してほしいのでしょうか？」

そう言いながら、再度、公園を見てしまう。当然アルマは、ここまででは予想してないと思う。

だが、自分携帯から、彼女の携帯の番号を教えてほしいと言って来たのは、とても気味の悪さを感じる大きな点だった。

これはアラバとして、チェンバレンとシャンテの二人の監視が付いたなどから言える事だが。

レフィーユと接触したいのなら、自分のように街中で出会った方が容易く、そんな自分を三度も尾行を繰り返すのだ、それほどの組織が目の前にたっているのなら…。

誘拐される前に、襲撃されていてもおかしくないのだ。

この事を踏まえると、アルマは成り行きまでは予想はしてなかっただろう、この事態は予想していたという事になるので、聞いてみた。

「どう思いますか…セルフィさん？」

驚いた覆面男は自分の身長より上からやって来る斧槍を辛うじて

転がって避けた。

「わからないわね…と言いたいけど、逃がしちゃったじゃない？」

「な、何をする!？」

「決まってるでしょう、私もわかりませんから、ねえ、セルフイさん？」

「そうね、捕まて何か吐かせてみようって、思ったのよ」

「言っただろう、私は味方だ!!」

驚いたまま、覆面男はそんな事を言うが一向に身構えるのを解かないセルフイを見て悟ったのだろう。

「妹とはいえ、キミは歴史ある七色同盟の一人だ。その名誉を汚すというのか？」

「黙りなさい!!」

いらいらとしているを吹き飛ばすようにハルバートの柄を地面に叩きつけた。

「ふん、確かに伝統や名誉にプライドを持つ事は大切よ。それを何？」

「名誉、名誉、名誉、アンタね、そこでプライドを高くすることは一番許されない事だっってわかって、言ってるの？」

私はそういうのが一番嫌いなよ!！」

苛立つようのを落ち着かせるように、自分にこう言い放つ。

「ふん、アンタが何者なのか一番手っ取りはやいと思ったから、
その魔法使いは協力しなさい」

思わず、ため息が出そうになったが…。

「返事は!？」

「あつ、はいっつ」

ちなみにこのセルフイッシュ、自分より年下である。

そんな彼女は、覆面男に飛び込んで行くのであった。

第三十話

セルフィの攻撃を慌てながら覆面男は転がりながら避けると、セルフィは言う。

「放ちなさい!!」

そう言われたからか、それとも始めからそのつもりだったのだろうか、覆面男の見た光景は魔道士が闇を放った後だった。

間髪入れず、自分を捕らえに放たれたアナコンダは、大きく頭上へ弧を描くので余裕で逃げられると覆面男は思っただろう。

…しかし、そのアナコンダは三叉トリに八叉オロチに、セルフィによって作られた足場に当たるたびに蛇は神話へ進化する。

覆面男が刀剣でその蛇に対抗する時には、無数メテューサを相手をしていたのかのように足が石になったのかと思われたくらい、空中で何かに躓いた。

「や、やめるんだ、お前は七色同盟である名誉を汚すつもりか!」
「?」

何とかこらえきり、覆面男はセルフィをもう一度、説得しようとするがセルフィは冷徹に攻撃をしながら答える。

「うる、さいわねっ!?!」

思い切りフルスイングして、受け止めた男を吹き飛ばしながら自

分の作った足場に飛び乗り、逃げた方向に再度飛び掛る。

逃げた男は地をはって自分を捕縛しにかかる『闇』に対応を追われている間に、セルフィの攻撃も相手をしなければならぬのでさらに不利は続く。

「まさか、操られているのか？」

セルフィは攻撃を加えるなか、ハルバートを構えなおしながら答える。

「ふん、私は自分が納得出来る行動がしたいだけよ!!」

その様は、まさに自分で行動しているという、いい証拠だった。

「せいっ!!」

そんな最中にそんな歓声が聞こえて、セルフィの横を、闇がまた地を這う。

「それにそんな人が、覆面をとれず…」

それを追っかけるように、ハルバートも襲う。

「素性も明かせず…」

逃げた方向にさらに闇が、地を這う。

「それで人を見下すなんて!!」

ハルバートの一撃の後にさらに闇が…地を這う。

「アンタ何様よー!!」

さらに攻撃、その後に闇が地を這う。

「……」

セルフィは怪訝そうな顔をしながら、ためしに攻撃をする。

空振った…、そんな自分の足元を、いや、その横を『シャー』と滑走していくので、覆面男も怪訝そうにあっさり避ける。

「こゃー」

「待ちなさい」

もう一回、横を通ろうとした闇をまるで、サッカーボールをトラップするように踏みつけてこつちを向いた。

「何でしょうか、セルフィさん？」

「まじめにやりなさい」

「やる気出したいのですがね……」

「…どうしたのよ？」

そついいながら、セルフィは自分の視線の先を追ったその先は公園だったが、先ほどより静かになっていた。

自然とアルマとその仲間達は逃げたのだろうか、それとも捕まったのだろうかとも思いもしたが、聞きなれた声が状況を報せた。

「さて追うな、今は安全の確保が先決だ。」

みんな無事か!？」

「どうやら、終わったようです。セルフィさん…」

「何よ?」

「これ以上、手間を取ったら騒ぎを聞きつけてこっちに来て来かねませんから、代わってもらえますか?」

「何、言ってるのよ。」

それを私がやってるのでしょ?」

「まあまあ、そう言わずに、私なら10秒も掛からず、行動不能にできますよ」

「ふん、面白いわね…。」

じゃあ、いいわよやってらんない」

「いやにあっさり引き下がりますね?」

「ふん、何事も効率が良いに越した事はないでしょ?」

納得しながらセルフイと入れ替わり『どうも』と軽く頭を下げたのが気に食わないのか、覆面男が答えた。

「笑わせてくれるな、これでもこの組織でナンバー2と呼ばれた私を10秒で捕らえるだと？」

刀剣を握り締めて、膝が曲がる。飛び掛ってくると同時に答えた。

「やってみるがいい!？」

一撃を法衣で包まれた腕で払い、更に立て続けに放たれた連撃を腕や身体を捻り避ける。

「やるな、だがまだっ!!」

一旦、距離が離れた、しかし、覆面男はそれを読んでいたのだろう。いち早く距離を詰めよう身を屈めた。

その時だった…。

「はい」

何かが放り投げられたので、物質的なモノだったので覆面男は反射的にそれを受けると驚いた。

「こ、これは…」

驚きながら、魔道士の方を見るが、その魔道士は背中を向いていた。

「につぎゆー!!」

何を言おうとしたのだろうか、途中で覆面男の腹部に後ろ回し蹴りが見事に決まる。

魔力による防御本能も効かない、完璧な一撃にお腹を押さえ悶絶する中、魔道士は言った。

「セルフイさん、『確保』お願いします」

「ふん、14秒掛かってるじゃない？」

「ホントに計ってたのですか？」

そう言いながらセルフイはハルバートで器用に覆面男を組み伏せ手錠を男の後ろで掛けると、自分が拾ったモノが見えたのだろう。

「信じられない、アンタ。『日記帳はここにはない』って、言うてたじゃない？」

「一応、こういうのは油断させる手口としては最適ですからね」

「アンタね、言うておくけどそれ国宝なのよ？」

手を広げてこう言った。

「それを返さない」

「それは出来ませんね」

『ずぶずぶ』と音を立てながら日記帳を懐にいれながら身構える。
しかし…。

「あつ、そう、ならいいわ。大切に持っておく事ね」

普段なら、突っかかってくるセルフイは引き下がった。

「貴女もですか…」

「何よ?」

「今回の事に関してですよ。レフィーユさんにしても、貴女にしても今回の騒動には少し無頓着なのでは?」

「どういう意味よ?」

「あの金庫の前で、レフィーユさんも貴女のように『よこせ』と言いましたよ。

ですが、貴女の様にあっさり引き下がったので、とても気持ち悪いじゃないですか」

「ふん、あの沈黙ってそういう意味があったのね」

ホントはそういう意味ではないが、今回、レフィーユ、いやこの姉妹は『七色同盟』の言葉が出ると嫌そうな態度をとるので少し、遠まわしに聞いてみた。

しかし、遠まわしすぎたのか、それともバレバレだったのだろうか

か。

「まあ、気にしすぎじゃないの？」

うまくはぐらかされたのを呆れていると、覆面男が目を覚ました。

「どこまでか……」

「動かないで、もう一度言っわ。」

所属と……」

「私は捕らわれただけで、我々は決して口を割らん……」

セルフィの言葉を遮り、覆面男はまるで口をかみ締めるように思い切り首を曲げる。

「な、何？」

何か『不味い』と思った。

慌てて、セルフィ駆け寄り、覆面男から引き離れた。

ドンッ……！

その時、覆面男の身体が大きく痙攣した。

自分にしても爆発して自爆をすと思ったので、衝撃の備えていたが、そんな鈍い音しかなかったので、セルフィをかばったまま後ろを振り返る。

「ぐ、あつ！！」

覆面をしているからわからないが、おそらく血を吐いたと思った。

何故なら、男の胸の辺りが大きく穴が開いていたのだから…。

ドン！！

「るつろつろつろつ！！！」

そんなうめきをあげ、肩がまるで抉られたように爆発したのでセルファイもたじろいだ。

その様を見て思わず、自分の後ろに引き下げたのは幸이었다。

ドンドンッ！！

顔より上、その頭部が抉れたのだから。鈍い爆発の中、男の痙攣がおさまる。

「な、何なの？」

「秘密維持のための…自爆…でしょうか…」

男の着ていた装備や覆面にもそういう機能がついていたのだろうが、あまりにも趣味が悪かったので、少し困惑していた。

「いつまでこうしてるのよっ？」

そう言われてようやく、セルフィを抱いていた体勢であったが状況が状況なので、セルフィは何も言わなかった。

「何だ、今の音は？」

「あつちから、聞こえたぞ？」

外部にも爆発音が聞こえたのか、男のいた場所を視線を戻すと、ここで数分前まで戦闘があったのが不思議なくらいが何もなかった。

「ありがとう、一応、礼は言っておくわ、特別に見逃してあげるから、もう帰りなさい」

そう言ってセルフィも現状は理解しようとしているのだろうか、腕組みをして考え込んでいた横を通り過ぎた。

第三十一話

そうして、次の日…。

「オズワルド、今朝方でさっそくで悪いのだが、なんだアレは？」
明らかに機嫌の悪いレフィーユに、周囲が凍りついていた。

「キミもしつこい、私はキミを守ろうとしたのだよ。婚約者を守ろうとして何が悪い？」

「そうではない！！」

『バンツ』と治安部室内に設けられた、会議室にいたオズワルドの机を思い切り叩いてレフィーユは言った。

「あのカリフに襲い掛かった組織の事を聞いているのだ！！」

「何を今さら…過ぎた事だろう？」

「私は昨日、聞こうとした。」

だが、お前は『疲れたから、明日にしてくれ』と言った。だから、今朝方まで休ませてやった。

オズワルド、あれはお前が私に提供した情報にはなかったぞ？

納得の出来る説明をしてもらおうか！？」

「キミこそ納得出来る説明をしてもらいたいものだ。どうして一人で捜査をしようと外出したんだ？」

「それが私のやり方だからだ」

「それこそ自覚が足りないというのではないかね。」

キミはレフィーユ・アルマフィであるように、七色同盟の一人でもあるのだ。

下のものを使うという事をしたらどうだ？

高貴なモノに使われる事は平民にとって光栄な事だと言っのを知らないのかな？」

立ち上がりレフィーユに肩を回そうとするが、彼女はそれを手で弾いて少し切れ目気味の目でオズワルドを睨みつける。

「私はお前のように、部下の目から物事を判断したくないだけだ。」

その証拠に今、お前は『カリフを襲った、あの集団が何者か？』という質問に答えられないのではないのか？」

視線でたじろいだのか、それとも彼女の質問に答えられないのか、しばらく黙ったオズワルドは思いついて言う。

「あ、あれはきつと漆黒の魔道士を快く思わない組織の仕業だ。」

いや、違うな、あれは我ら七色同盟に協力しようとした自警団が何かだ。

頼もしいじゃないか、よし、その人らを発見したら警備員に加えようではないか」

「いい加減にしろっ!!」

さらなる怒声で、部室が凍りつく、そのおかげで立ち聞きする周囲が覗き見に発展していた。

「レフィーユ、外の間人が見ているぞ、落ち着きたまえ、キミは漆黒の魔道士が盗んだ『日記帳』を取り返せばいいじゃないか？」

レフィーユは舌打ちをして、冷静になった。

そして…。

「…オズワルド、よく聞け。今回の事件は『盗難』ではなく『殺人』なんだぞ？」

「レフィーユ、落ち着けと言ってるんだ」

「七色同盟のミン・チョンワは、殺害されているのだぞ？」

「外部に漏らすなと言っている」

「だが、いずれわかる事だ!!」

『殺人』という言葉に、何より驚いたのは治安部員というまでもない。

オズワルドは、静かに見つめて答えた。

「…キミは事の重大さをわかっているのか？」

「ふつ、その人物を殺害した組織相手に『盗難事件』で対応する危うさくらいはな。

怪我、拉致、今までだってそうだ。

下手をすれば死ぬ可能性だってあるのだぞ、そんな不足の事態を想定した指示を出していたのがわからないのか？

それは確かに私が一人で行動していた理由には物足りないだろう。

だが、一方的に情報を制限された状態では捜査は困難、いや無理だ。

これ以上、治安部を危険な目にあわせるワケにはいかん」

そう言って、一人部室を出て行った。

そんな事をイワト経由ではあるが聞いたが、その事がきっかけで治安部と警備員の中が悪くなったというのは言うまでも無く。

オズワルドも警備員の増員を決定した。

「ふつ…」

避難施設の役割をすることもある学園寮の一室を警備員が宿泊施設に使うと言う事で、一応、一室を掃除し終えると、レフィークが

2つ離れた部屋の前に立っていた。

腕組みをしたままだ『じっ』と下を見ていたので、何をしているのだろうと思ひ近寄るとレフィーユは聞いてきた。

「何か忘れ物でもしたのですか？」

そう聞いたのには、今この部屋に、バルカン害虫駆除剤が巻いている最中だったからなのだが。

「いや、そういうワケではないのだがな」

なおも扉の隙間から煙は出ている。しかし、煙くも匂いもない。そんな中を構わず、レフィーユはドアの下の辺りを見るので、気になって仕方がない。

「新手のトレーニングですか？」

「一度、どうやったらそう見えるのか教えてほしいな。まあいい、私が気になっているのは、この煙だ」

「バルカンですか？」

「そうだ、全部を否定するワケではないが、私はそもそもバルカンというのが嫌いだな」

「もしかして、ゴキブリ嫌いなんですか？」

「ふっ、私を誰だと思っている。ゴキブリなど驚くワケがないだろう。」

私が言いたいのは、この駆除剤の効能が気に食わんだ」

「効能？」

「そうだ、例えば私の部屋は清潔を保っている。

しかし、あのゴキブリと言うのは、不潔なのはとにかく、建物の築年月によっても、どこからともなくやって来る。

そして、中には隠れて居座るヤツもいるだろう？

それを踏まえれば、それが私の目にも届かない場所で、隠れて生き続けるというのもあり得ない話ではない。

ここで問題になって来るのは、このバルカンだ」

「それはおかしい話ですね、隠れたゴキブリを駆除するための煙なワケですから、問題になるのはおかしいのでは？」

「問題ではなく、活躍の間違いじゃないのでしょうか？」

「いや、そこが問題なんだ。

いいか、『目の届かない場所に隠れたゴキブリを駆除する』ワケだろう。死骸はどうなる？」

「…その場や、ある程度逃げた場所に転がってるといふ事になりますね」

「そうだ、さらにここが問題なんだ。CMでやっていたのだがやつらは仲間の死骸すら食べるらしい。」

という事は『自分の目の届かないゴキブリの隠れえる場所』に『餌がおいた』という事にならないか？」

「ああ、なるほど、それでレフィーユさんは、逃げてくるゴキブリを自慢のサーベルで…」

「やめてほしいな。それはお前が西方術者だから言えるジョークだ。」

セルフイも含めて、おそらく私の知っている女子の中で、東方術を要して、ゴキブリを駆除した事はないと思うぞ？」

「そうなんですか？」

そういえば、自分も知っている東方術者でもそんな事に斧やら剣を使っているトコロは見た事はなかった。

イワトにしても、ゴキブリを雑誌やスリッパで叩くくらいなので、普段はそんな事に魔力を使うほどじゃないのだろうと思っていた事もあり、とても気になったので聞くとレフィーユは答えた。

「どうも自分が汚れてしまうような気がしてな。どうしても出来ないんだ」

「そ、そんなに顔を曇らせないてくださいよ」

「ふっ、だがな。私からしてみれば、西方術者の方がこういった

ゴキブリ退治に適していると思うぞ？」

「レフィーユさん、一応、西方術者だから言っておきますけど、炎なんか出して駆除すると火災警報がなるのですよ？」

「だいたい、校則の寮内の項目で確か『寮の個室は自分のものではない、西方術者のみなさんは大切に扱え』って感じの校則があるの覚えてます？」

「ああ、妙に西方術者の行動を制限するような事が事細かに書かれていたな」

「建物を破壊に適しているのは西方術者ですからね、こつこつ意味を踏まえて言っているのですよ」

「なるほど、あれは、そういう意味だったのか、道理で前のリスティアの時も事細かに書かれているなと思ったモノだ」

そう微笑みながら、ゆつくりとレフィーユは改めて聞いて来た。

「何か状況はつかめたか？」

第三十二話

そうして、レフィーユにセルフイと共闘で、その謎の覆面男を撃退した事、自爆した事を話すと、レフィーユは言った。

「なるほど、確かにあの夜の内に、私も立ち会った上で現場検証はしたのだが。」

セルフイが言った場所に地面にこげたような跡が確認された、だが、綺麗になくなっていたと考えれば納得がいくな」

「レフィーユさんの方にやって来た人たちも覆面つけてました？」

そう言って、誰も見ていないのを確認して、闇で、あの時に見た覆面を再現して、握りつぶすとレフィーユは頷いた。

「ああ、そんな感じのを着けていたな。おそらく同一の装備、同じ自爆装置がついていると思っただろう。」

そして私の方にはボスらしいのも後方にいた」

「どうでした？」

「残念ながら、何が起こるか警戒していて動けない私をずっと目を離す事無く監視していたから遠目でしかわからなかったが、間違いないだろう」

「それでアルマさんは？」

「そのまま逃げた…と言いたいが、かなりの大勢が彼女を追って行ったからな。」

「だがお前の方にナンバー2が向かったため、他は雑魚で大丈夫だと思いたいがわからないな。あれから連絡もない」

「アルマさん達は、あの組織の存在を見せたかったですかね？」

「だが、あそこまで大掛かりにやるのは疑問が残る。」

「確かにカリフという存在が、あの組織を知っていたなら、何故『見せる』必要がある？」

「あのオズワルドと拘束しようとした動きは、秘密の組織として、表なり影なりで動けると考えたぞ？」

「何かの陽動ですかね、エドワードさんは大丈夫だったのですか？」

「夫妻とも無事だ、カリフが陽動を要して危害を加えるという線はないのかもしれないな」

「そうですか…、ミン・チョンワ殺害の無実を自分達に証明させたかった」

「なら、どうして日記帳をお前に手渡した？」

『持っているなら返せ』とレフィーユは手のひらを見せたが『駄目です』とすぐさま言っつ。

すると『まあいい』と妹と同様にやけにあっさり引き下がるので
気になりもしたが…。

「さすがに無理がありますか」

口の堅い彼女を突き崩すのは目に見えていた。

わからない事だらけだった。

カリフ、日記帳、どうやって盗んだのか、七色同盟、謎の集団、
全ての状況、全ての情報はオズワルドの指示でほとんど制限されて
いた。

「八方ふさがり…か…」

「どうしましょうか？」

「ふっ、私に聞くな」

だが、微笑みながら言った。

「まあ、状況は変わらんだろう。」

今はようやく治安部がオズワルドの傘下から逃れた事を、アルマ
に感謝しておくさ」

「随分と前向きですね？」

「昔、言っていただろう。まずは第一歩だ」

「あれ、そんな事、言いましたっけ？」

「ふっ、確かに言ったぞ。私がお前の言う事を忘れれると思うか？」

「忘れましたね」

「なら、私の格言にさせてもらおう。ところで、イワトがお前の事を探していたぞ？」

「あれ、そうなんですか？」

「どうもエドワードの事では話があるそうなんだが…。

言っておくが一応『特別な』客人なんだからな、変な事はするな

よっ。」

「まあ、気をつけます」

そう言って、少し離れてイワトの携帯に連絡をいれた。

「もしもし、イワトさん、携帯があるのですから、そっちを使っ
てくださいよ？」

「はは、すまんのだ。ワシは会うほうが良いと思ったんじゃ。

それで放課後、エドワードはワシが連れてくればいいんじゃない？」

「はい、それじゃあ、よろしく願います」

第三十三話

そうして、そんな携帯でのやりとりがあった、放課後の事である。

「アラバ、エドワードを連れてきたぞ」

「あ、あのアラバさん、これは？」

エドワードが見回すと自分を他に、サイトにレオナ、キリウ、シリウがいたので答えようとした自分の代わりにサイトが答えた。

「いやな、歓迎会を開こうと思ってな。アラバはん、準備はどうや？」

「あとは材料切るだけです」

「じゃ、はよしてや」

「手伝ってくださいよ」

「え〜」

「料亭の跡取りがこんな事を嫌がらない」

だが、元々手伝う気だったのかサイトは元々集まっていたテーブルより少し離れ、材料を切っていた自分のテーブルの方に向かって行ったので、未だに立っていたエドワードに着席するようにレオナが促した。

「何かゴタゴタしてて、すまん、もう少し待っててくれ」

そういうレオナ達のテーブルも筆記用具、教科書、ノートが広がっていたのがバツが悪かったのか、それを各自で片付けていると、ようやく準備が整ったのか食材がテーブルに運ばれてきた。

「レオナ、もう火を付けていいんじゃないの？」

「そうだな、後は音頭をとれば丁度いいぐらいに煮えてるだろうな」

そんな中、自分も一通りの作業が終わり席に付くと、レオナは咳払いをした。

「では、これより『白鳳学園、鍋の会』、特別集会を開く、今日はエドワードという仲間に出会えた事を感謝して、乾杯！！」

『乾杯』と一斉に、声上がるなか、未だにエドワードは戸惑っていた。

「あ、あの大丈夫なんですか？」

「ええのええの、構わへんよ。どうせ賞味期限すれの学園の非常食が材料だから、実質タダや、気にせんでええで」

「わ、私の言いたい事は、そういう事でなくて……」

聞こえなかったのか、サイトは鍋の蓋をかけると程よく、煮立った鍋におたまを突っ込んでいた。

「ワシらは、こつういふ会合を開いては親睦を深める集団じゃからのう。まあ、気にするなや」

「実質、六人しかいないけどね」

キリウのつつこみが、緊張をほぐしたのかエドワードもよつやく小皿に盛られた鍋の食材を一口入れて答えた。

「おいしい、これ、ホントに非常食なんですか？」

「まあ、鍋やからな。ダシさえしっかりしてれば、何でも煮込めばうまいモンやろ？」

しかし、戸惑いながらエドワードは答えた。

「す、すいません、鍋ってあんまり食べたことはありませんから

…」

サイトも周りも最初は冗談かと思ったのだが、エドワードの沈黙が答えだった。

「信じられへん、もしかして焼き肉もか？」

「す、すいません」

「何という事だ。エドワードお前は、8割を損していると言っているぞ？」

「8割もですか!？」

「そうだ、というワケだ。みんな今日は盛り上げていくぞ!？」
そう言って、レオナの号令は『エドワード歓迎会』の始まりを高らかに宣言していた。

そして、ようやくエドワードに笑顔が戻り、従来に戻った頃。

「みなさん、やっぱり凄いですね」

「何や、突然？」

「いえ、こんな私でも気軽に接してくれて」

「なんだ、お前のいる学園でも友達くらいいるだろう？」

「いえ『七色同盟の一人』という性もあるのでしょうが、正直、私の周りによってくる人は、ほとんど社交な人たちばかりでした。

でも、みなさんは何ていうかそんな事も気にしないで、私の国の事を教えてくれと気軽にやってきますし。

皆さん、良い人ばかりですね」

それがレオナの機嫌を良くしたのか、ジュースをエドワードのグラスに『まあ飲め』と注いだ。

「そういえば、エドはんの国で思い出したんやけど、七色同盟の謎って知ってる？」

「何ですかそれ!？」

笑いながらエドワードが興味を持ったのが解ったのか、サイトはさらに聞いてみたのだろぅがテレビで昔、見た事があった。

昔から『七色同盟』は謎がある。

どうやって、集まったのか？

誰が日記帳を書いたのか？

カリフという組織も、その謎から騒がれてもいた。

しかし、最大の問題があった。

『何故、核弾頭がある施設を視察できたのか？』

そして、昔から騒がれているのだ。

『視察した、その日に、核によるテロが起きるといっのは、出来すぎているのではないのか？』

「てか、アラバはん、さっきから黙ってはるけど、聞いた事があるやろ。」

みんな知らんって、言うねん」

そんな事を考えていると、サイトは聞いていたのに気が付いた。

とりあえず、嫌そうな顔をして言った。

「サイトさん、確かに聞いた事ありますけど、一応、噂話じゃないですか、迷惑なのはエドワードさんですよ?」

「確かにそうじゃのう!?!」

周囲が笑いに巻き込む中、エドワードは笑って言った。

「いいですね、なんていうか強くて、うらやましいです」

「強いつて…別に、大した事はないだろう?」

「ですけど、レオナさん、昼食の時、私が食堂に並ぼうとした時、警備員の人たちに止められた時に

『嫌がっているだろう、やめてやれ』

なんて、屈強な人たちを前にそんな事を言ってくれた人はいまいませんでした」

エドワードのいう事は自分でも気になっていた。

七色同盟の一人だからか、エドワードだけではない、アイーシャの周りにもあまりにボディガード、SPに匹敵するほどの警戒をしていた。

そんな中、エドワードは聞いてきた。

「どつやったら、皆さんのように強くなれるのですか?」

「強い…な、エドは強くなりたいんか?」

「はい」

「難しいな、でも強くなって、ええやる?」

「ですが、いざという時、守れる人も守れなかったら、嫌です」

「嫌って言われてもな、多分、無理や」

またエドワードが黙ろうとするのが、わかったのかサイトはすぐさま言った。

「多分、これは経験が作るもんやからな」

「経験…ですか?」

「悪くいうつもりはないんだけどな。場数を踏んでないでないからな。多分、エドは訓練しても弱いままやで?」

「それじゃあ、どうすれば良いのですか?」

「場数を踏めと言いたいけど、無理やろうしな。でも、ずっと気にしてればええと思うで?」

「それじゃあ、答えになってません」

「答えになってへんでええよ。その好きな人を守るうっていつも思ってたんやろ。それでええと思うで?」

少しエドワードは困惑していたが、レオナは言う。

「わからなくてもいいがな、自分に気にしているトコロを気にすると言う事は自分を見つめなおしていると言う事だ。

やっぱりお前は、他の金持ちとはどこか違うようだ。

エドワード「ついいか？」

「なんでしよう？」

「お前はあんな女のどこが好きなんだ？」

「と、とんでもない、いい女性むすめです。

もともと私なんかにもつたいないくらいなんです、一緒になれると知った時はどれくらい嬉しかったか」

少し早口に告白という名の弁明するので、男性陣は一気に興味が沸いた。

「よし、エドワード、今日は飲もうじゃないか？」

「そうじゃのう、どう好きなのか教えてほしいのう」

色恋沙汰に花が咲くというのは女だけではないのだ。

その時である。

「ふっ、随分と楽しそうだな」

レフイーユが入ってきた。

第三十四話

閉めていたはずの鍵はいつの間にか、開場されており突然の来訪に周囲が凍りついた。

「なあ、アラバはん、呼んだんか？」

「とんでもない、これは秘密の会合じゃないですか呼びませんよ……」

「ふつ、この学園に転校してきてからだ、この学園内の非常食の廃棄する際、時折だが、現存する非常食の廃棄分が少ない事が、昔、とても気になっていてな。」

最初は災害時における、過分、減分の表記ミスかと思いましたが、だが…災害にあった時、とある事を耳にした。

『この非常食は、おいしい』らしいな？

じつとレフィーユに見回され、それを言った事があるのだろうか自分以外は目を逸らした中、レフィーユは微笑みながら言う。

「リスティア学園にいた頃に、非常食は食べた事はあるから言わせてもらうが『アレ』は味気の無いモノも多い。

なのに、どうしておいしいとみんなは言うのだろうか？」

顔は笑顔だが、この独特のプレッシャーはこの場を押しつぶさんとしていたので、唯一動ける自分は変わりに聞いた。

「結論から言っただけいいですね」

「どこかで味見している集団がいるという事だ」

「それが私達とでも？」

「そうだ」

よほど確信があるのだろう、一言そう言ったまま周囲をさらに見回すとさらに重圧が増す。エドワードも黙ったままである。

「じゃあ、その通りです」

「ふっ、随分とあっさり認めてくれるな」

「それはそうでしょう、ここまで来たら何を今さらってヤツですよ。」

私達が『鍋の会』です。

というワケで……」

「『出てけ』と言いたいのだろうが、お前は家庭科調理室を無断で使っていると思ってるのか？」

確かにごもつともだったので、とうとう自分も黙ってしまふ。

確かにここは家庭科調理室だったので、エドワードも最初は心配をしていたのだろうが、どうも状況に流されて今に至ったらしく、

エドワードはさらに縮こまっていた。

そんな中、レフィーユは自分で椅子を持ってきて、隣に座った。

「…どうした、始めんのか？」

「あ、あのレフィーユさん、いいんですか？」

「ふっ、エドワード、そんな事をいちいち指摘していたら、こっちの身が持たん。」

普段はほっておくが、今回は良い機会だ、私も参加させてもらうと思ったのさ」

構う事なく『入って来い』と言うと、さらにセルフイが入って来た。

「アンタ、こんなトコロで何やってんのよ？」

「白鳳学園、鍋の会です」

「ふん、随分と神経の図太い事をやってるじゃない、学園の非常食を勝手に使っつていいと思っつているの？」

「これでも先生一同には許可もとってます、それに一応、賞味期限すれすれの廃棄になるのを選んで、こっやって料理に放り込んでますよ」

「ふっ、なるほど先生も協力していたとはな、見つけ難いわけだ」

「姉さん、笑い事じゃないわ。結局、この人は、これから賞味期

限すれすれの鍋を、食べさせようとしてるのよ?」

「腐っているかどうかくらい、確認してませんがレフィーユさん、それが嫌なら帰っていいのですよ?」

「面白い冗談だな」

そう答えて改めて席を座りなおすので引く気はないのだろう、そんなセルフィを尻目に姉は『私の小皿どれだ?』と言って来たので、それを見たセルフィは呆れながら言った。

「これでも私、エドワードさんを探してほしいと言われて来たのだけど?」

「頼まれた?」

セルフィが『入ってきなさい』目を配らせたのだろうか、そこからやって来たのは…。

「エドワード、七色同盟の一人とあるう人が…」

アイーシャだった。

第三十五話

その宴会の後、ビルにて爆破による火災が発生したので、無視するわけにはかないのでセルフイともども出動した。

幸い周囲に被害も無くその一室が消失するほどではあったが、その中に焼死体が発見されたそうなので警察が先に入り、立ち入り禁止の黄色いテープの前で各自に指示を出し、腕組みをしながら一息ついているとセルフイがやって来て言った。

「姉さん、ごめんなさい、まさかあんな事になるとは思わなかったわ」

「ふっ、気にするな、まあ、何事も一歩一歩だ。」

あの男も、あいつらもこの程度で機嫌を損ねる連中ではないさ。

私からしてみれば、アイーシャも、もう少し社交的になればいいのだがな」

思わずセルフイが困ったような顔をしたように、あの後、アイーシャの態度は悪かった。

「ア、アイーシャも食べたら、おいしいよ?」

そう言いながらエドワードは遠慮がちに向かいのこちらに小皿を差し出すが、アイーシャは一向に態度を変える事無く、顔を明後日の方向に向けていた。

それを見かねたサイトはあえて軽い調子で向かいの席に座っていたのであえて言った。

「なあ、夫婦なんやから俺の席と変わるっか？」

だが、それが引き金となっていた。

「ふさけないで！！」

家庭科調理室全体にそんな声が響いたので、さすがに私もなだめに入ったが。

「親が勝手に決めた結婚じゃなければ、誰かこんな情けない男と結婚するものですか……」

なだめて落ち着きに入った、そんなつぶやきがエドワードに突き刺さったのが見えた。

「おい、お前言いすぎだろう？」

レオナが見かねて言う、しかし退く気は毛頭ないアイーシャはすぐさま。

「言いすぎモノですか、この前なんか、ご両親に相談していたしてましたわよね『あなた』」。

何をするのにも、ご両親に聞かないといけないなんて、どこまで子供なのよ？」

その言葉にエドワードは黙ったまま俯いてしまった。

「それにしても、あそこまで言われて普通は怒るわよ?」

「ふっ、人間には怒る事の出来る人間と、怒る事の出来ない人間がいるそうだからな。」

エドワードがそうなのだろう。

ただ、環境によってはそれは良きにも悪きにもなるがな」

「そうね、小、中、今に至るまで同じ学園に通ってて。」

カリキュラムの関係上、東方術同士であったため、エドワードとアイーシャが手合わせをした事もあったそうだけど、そこでもあの人負けたらしいから、それが余計に立場なくしてるのよね…」

さらにエドワードの東方術は私と同じ『サーベル』である事がさらに立場をなくす事に拍車を掛ける事になるのは、目に見えていたので思わず。

『ふう』と同時にため息をついてしまった。

そして、こんな嫌な空気をうち破ったのは…。

みんなで〜叫ぼ、愛の〜歌〜

そんな間の抜けた歌声のアーティストの歌う、アラバの携帯だった。

「あつ、先生…」

どうやら先生だったらしく、そのまま教室の外に出て行き対応に出ていくのを見送る事となったが、アイーシャの苛立ちの矛先は今度は私に向かっていた。

「レフィーユもこんな連中の宴会に出向くのはおやめなさい。名前にキズがつきますわよ？」

だが、意外だったのは、そこにいたセルフイだった。

「ふつ、しか、セルフイ、アイーシャ相手に、随分な啖呵を切つたな。」

御あいにく様、私の家は昔から『そんな名誉に頼るな、自分の力で名誉を得る』って言われいる…か。

アイツが聞いていたら、何かに気付いてたかも知れないが…。

セルフイ、お前は七色同盟のアルマフィ家の事に関して気づいているのか？」

セルフイはさすがに周囲を見回し、黄色いテープの先を見ているのだろうか、遠い目をして答えた。

「何となくはね、自分で言ったのも何だけど、あの台詞って、アルマフィの良いプロパガンダじゃない。」

私から見れば、名誉を当てにするこの家が、そんな名誉な事を否定的になるなんて前からおかしいと思っていたわ。

そんな姉さんはどうなのよ？」

「私は親から聞かされていたからな、まあ、アイツには聞かれない事が幸いだったと思いたいな」

「姉さん、私も出来るだけ気をつけるけど、特にあの魔道士に知られるのだけは避けてよ？」

場合によつては、オズワールドより夕チが悪いんだから」

少し、笑みを浮かべて『そうだな』答えると、自分の視線の先に知っている人物が見えた。

セルフイも釣られるがまま、その人物を捉えて言った。

「あら、あれ、チエンバレンじゃない？」

その男は一人で、その爆破現場を遠目で覗き込むように見ていたが、私達の存在に気付いたのか手を振りながらこちらにやって来た。

「いやー、オズワールドに『事件に関係ない』なんて言ってたけどよー。

一応事件だから気になったからよー、ちょっと寄ってみたんだー」

そう言つて、しばらく間、チエンバレンと話し込む事にした。

第三十六話

「おや、白鳳学園の生徒は待ち合わせの時間くらい、ちゃんと守れないのかな、先生は悲しいよ」

「いつ私が、貴女の生徒になったのですか？」

そう言いながら、自分は先ほど携帯に出ていた相手、アルマが指定した場所に出向いていた。

「すいませんね、こんな見晴らしの良い場所を指定してくれるから、警戒して周囲を回ってやって来たので思ったより時間が掛かったのですよ」

「相変わらず用心深い男だね。だけど今回は、その様子だと尾行もされてないようだから、安心したな」

そういうアルマも物陰から『ぬっ』と出てきた。

まだ昼さがりで明るいというのに、完全に物陰から出てきた様は、多分黙っていれば気付かないくらいだったので、一応警戒はしていたのだろう。

「まだ、煙が上がってるねえ」

見晴らしのいい場所を選んだのはこのためだったのだろうか、そのままアルマは、じっと煙の出ていたビルをしばらく見つめて答えた。

「あのビルは実はね、緊急事態に遭遇して散開した時にみんな集まる場所でもあったんだよ。『そのビルが燃えている』意味がわかるかい？」

少し急にそんな事を聞いたのだが、整理するまでもない。

「全滅ですか…？」

「ボクが着いた時には、凄く血の臭いがしてたけど、一人瀕死の子がいてね。その子がそう言った。」

最初にキミを尾行させた子だよ。

カリフの中でも優秀だったんだけど、ちょっと欠点があったね」

「欠点？」

「カリフの中に付き合ってる男がいたんだ。それがあの時、最悪の展開を生んだんだよ」

ビルの煙を見送るアルマは複雑な顔をしたまま、大きくため息をついてゆっくり言う。

あの時、取り囲まれ返された、カリフの部下達は二人一組で行動していたようだ。

だから、逃げる事は容易だったらしいのだが、その時、恋人同士の二人が逃げていた。そこで捕まるとなると話は別だろう。

人間とは、どんなに耐える訓練をしても、脆いトコロは脆い。

それはどんなに訓練を積んでもどうにもならない、その片方の男はとても『脆かった』らしい。

「でも、よく無事でしたね。私でしたら、貴女がその子を介抱している瞬間は見逃しませんよ?」

「見逃してくれはしなかったさ、その後、カギを掛けられてあの部屋を爆破させられた。僕の付加能力は逃げる事、潜入する事には特化していたのは幸いだっただけ、あの子は…ね。冷たいと思うかい?」

仕方がないだろう、彼女の付加能力はわからないが、その付加能力は他人に与える事は出来ないのは知っていた。

「大丈夫なのですか?」

「何がだい?」

だが、彼女は自分で気付いてないのだろうか。

「何か辛そうです」

「そうかい、でも、こっちはこれでキミに支援する事が出来なくなつてすまないと思ってるんだけど?」

「…人間、こういう時、黙ってた方がいいですよ?」

思わず睨みつけられたが、アルマは肩をすくめしばらくビルを見ていた。

『すまないが、来てくれないか？』

そう携帯電話で言われたので、色々と聞きたい事があった。

でも彼女は失ったモノを考えると、それを聞くのは今回は無粋だ
と思った。

「これから、どうするのですか？」

「本国に帰れば、まだ人手はあるとはいえ今までのように動けな
いだろうね」

「無茶しないでくださいよ？」

「大丈夫、ボクが個人で動く事になるけど、ここで死んだらカリ
フは意味がなくなるからね。

でもさ…」

そう言って、アルマは抱きついてきた。

「ボクは首領になる運命を背負わされたとはいえ、しばらく…ここ
のまま居させてほしいんだ」

第三十七話

そうして時は深夜、レフイーユは机にあるパソコンの画面に目を向けていた。

『ただいま休憩中』とスクリーンセーバーが流れている事で彼女は、電源を付けてから、そのパソコンが正常に動作しているのを感じ取っていた。

彼女自身『その間、シャワーを浴びたのは正解だったな』という心境だろうか『ふっ』といったもの調子で机に座りマウスを一定に動かして、スクリーンセーバーを解除、カチカチとインターネットを開いていた。

しかし、彼女は検索サイトが開かれたというのに、何も検索しようとしないうとしない。

ただ、そこに書かれているニュースを見ているのだろうかと思われるが…違う。

彼女はゆっくりとマウスで矢印を動かすその先は履歴であった。

そこには彼女が関わっている事件に関する項目がずらりと並んでいた。

『七色同盟』『七色同盟の歴史』『七色同盟の謎』『カリフ』『ワールド・ゼロ』

つい彼女は微笑むが、その笑みが途中で止まる。何故ながら、部

屋の入り口のドアに気配を感じたからだろう。

「人の部屋のシャワーを浴びて、人の部屋のパソコンを使う、いつか訴えられますよレフィーユさん？」

「何だアラバか、脅かすな」

「驚いたのはこちらですよ。こっちは日記帳を取りにまたあの集団がやって来たのかと思って少し警戒しましたよ」

「そうだな、アイツらが、お前の正体を知らないのは良かった。おかげで私はこうやって、お前のパソコンを落ち着いて見ることが出来るのだからな。」

それにしても、最近起きた事件も履歴として残っているとは、お前も勤勉な事だな？」

「いえ、厄介でしたよ。」

そうやって、ネットで調べようとしても、この七色同盟、それに関する事だけは学園で習った範囲までしか掲載されてないので知らね。

これも、オズワルドさんの仕業ですか？」

「いや、これは仕様と言ってもいいだろう」

「仕様…？」

「そうだ、七色同盟といっても一般的な生活を送りたい親戚もい

るだろうか？

マスコミやパパラッチ、報道機関、これらの追求からは逃れる事は不可能かもしれないが、だが、一般人からは守る手段だと言う事さ

「ですけど、オズワルドさんは普通に自慢してたじゃないですか？」

「オズワルドが異常なだけだ、チェンバレン、エドワード、女性陣は解らないが、少なくともあの二人はその仕様の重要性はわかっているとは思っているさ」

「重要性…ですか…レフィーユさんは？」

「ふっ、私もその重要性は理解しているつもりだ。

だが、もっとも私は普通にテレビに出ているから、説得力に欠ける」

「なるほど、だから『名前を出さなかった』ですか？」

「ふっ、どうとでも取るがいいさ。だが、まあ、情報を得ようと思ってもオズワルドが邪魔をするのは目に見えているだろう。」

そして、謎は山済みだ、私もお前に、少し協力をしてもらおうと思っ
てやってきたのさ」

そういって、レフィーユは動画サイトを開いた。

「あの爆破事件でチェンバレンに出会ってな、動画サイトにエドワードの結婚式の映像が流れてたそうなんだ。」

あの事件以来、私はどうやって日記帳が盗み出されたのかが気になったのもあるが、これが日記帳の最後に映し出された映像になるそうだし」

映し出された、映像は確かに『七色同盟の拳式』と題名が打たれていた。

そこにエドワードは数回頷いたあと、あの日記帳が入っている金庫へと歩みを寄せていた。

「あつ、エドワードさんが、ダイヤルを回してますが、あれ？」

しかし、ダイヤルを一つ回すと、今度はチェンバレンに代わり、回したのだろうか、さらにもう一人の男が変わる。

おそらくその人物が殺害されたミンなのだろうが、最後のアイシャに変わる頃、自分の様子にレフィーユが気付いたように言う。

「ああ、あの金庫はダイヤル式だな。」

四桁の番号を入れる事で、扉を封じていた支柱が外れる仕組みになっているのさ。

昔ながらの簡単な作りで、力を込めれば女性でも支柱は動くくらいだろうが、頑丈な金庫だと言う事は変わりはない」

「だから、四人が一つ番号を覚えて、押しているという事ですか

「？」

「そうだ、ちゃんと隠すように出来ているのを見た事もある」

「たとえミンさんを殺しても、残りの番号は三桁、内部犯の場合二桁、警備も万全、開錠は不可能というワケで、ミンさんが殺される理由も気にはなりますが、この記念館で起きた大きなイベントはこれが最後のワケですよね？」

「そうだ、だが逆を言えば、警備が薄くなるタイミングはここしかない」

そう言われた性が、映し出された映像をじっと見てみると、厳正な式は終わり、少しにぎやかな披露宴となった。

そうして、衣装を変えたアイーシャが入場してきたのだが…。

「相変わらず、機嫌悪いですね」

「ふっ、そうだろうな、結局、親が勝手に決めた結婚だからな」

そして、エドワードが学園で見たようにアイーシャを気遣う。

「エドワードも大変だな」

手で払われ、残念そうにするエドワードを見て、レフィーユは静かに聞いて来た。

「お前はエドワードをどう見ている？」

「まあ、アイーシャさんに好かれようと頑張っている人ではありませんけどねえ」

「実はな、昔から私にも連絡を取り合っただけだよ」

『どうすれば、アイーシャに認めてもらえるか』とな、私とて意見がいろいろあるのだが、男としてのお前の意見を聞きたくてな」

「なるほど、だから、イワトさん達と行動を共にしても、注意程度にすませていたわけですか」

「ですが、あそこでみんな感じたのですがね、無理だと思っただけですよ」

ため息一つ、レフィーユが頷いたように、これは無理だろうと思っただけだ。

『どうすれば、男らしく見えるか？』なんて想像は出来るだろうけど、エドワードは優しい。

優しい人間というのは、それをすると無理をしているのがわかる。

そうなるアイーシャも気付く可能性がある、そして、アイーシャはエドワードの事が嫌い。

そこをつけ込んで下手をすれば『別れてくれ』とエドワードに離婚を求めてくるだろう。

「あれだけ人を嫌悪しているというのがわかる人も珍しいのですがね……」

「何か、きつかけみたいなき事が起きればいいのだが…」

そこで彼女が『じっ』と自分を見るのだが…。

「な、何ですか、その目は？」

「いや、何かきつかけがあればいいなと…思ったのだが…」

「どうして『いいな』で、私を見るのですか、無理ですよ？」

「無理か？」

「アイーシャさんが、何かしら離婚の目的を探してるというのにはですか？」

「ふっ、それもそうだ。」

ところでお前はこんな深夜にどこに行っていたのだ？」

「ああ、買い物です」

「門限を破ってまでコンビニでアルバイト求人冊子と、ジュース一缶の買い物がか。私のおすすめしたシャンプーも買わずに面白い冗談だな？」

「人様のシャンプーの心配しないでください、大体、あれ結構高いですよ、他にどんな冗談を言えればいいのですか？」

そう言っていると、披露宴の途中で席を立つアイーシャの姿を見

て答えた。

「…まあ、明日教える事にしますよ」

「どうした？」

「少し、協力してあげようと思ったのですが、その前にレフィーユさんに聞きたい事がありましたねの」

「なんだ？」

「あの謎の集団、どこに隠れているかと思っと思っています？」

「セルフイたちにしらみつぶしに探させてはいるのだが、見つからんとなると、おそろく…」

目を細め、少し考えた後、おそろく自分と考えが一緒だろうと思っただ。

「それはオズワールドさんがやって来たタンカーですか？」

「では、お前はオズワールドが今回の黒幕だと、思っているのか？」

「いや、もし私がオズワールドさんでしたら、もう少しマシな誤魔化し方をするのですが、この町にあんな不気味なタンカーは目立ちすぎですからね。」

調べておきたいなと思っただのですよ」

「だが、オズワールドがそれを許すとは思えないな」

「だから、明日一手、協力しようと言っているのじゃない？」
するとレフイーユはにこりと笑っていた。

第三十八話

そして、その明後日の事である。

「白鳳学園、治安部リーダー、レフィーユ・アルマフィ、以下25名確認しました」

タンカーの前、その従業員らしき人が調査許可書を返してもらい、先に他の治安部員に声をかけ中に入れさせていると、レフィーユに聞いて来た。

「あの本日調査というわけですが、ホントにこのタンカー全体を捜査するのですか？」

「ふっ、そのつもりだが？」

「あの、一応、このタンカーは住居としての機能もしておりますので、それなりに一般の方への配慮の方もお願いしたいのですが…」

「ふっ、心配するな。」

だから、案内つきで調査を進めるといふ条件を飲んだのだろう。そこは出来る限り配慮はするさ。

しかし、何かあった場合…わかっているな？」

そう言って、最後尾のセルフィと一緒にタンカーの中に乗り込むとセルフィは、やはり納得出来ないのだろう。

「『案内つきで調査』なんて、調査の意味がないじゃない」

「ふっ、それはそうだ。意味は無い」

「だったら何でこんな悪条件をのんだのよ？」

「どうせ」昨日も入れて三日も日にちが開いたんだ、意味が無い事は変わりはないだろう…」

「そう」昨日の事もよ。何よ、アレ？」

「ふっ、何の事だ？」

「あの人の事よ。」

相変わらず、とんでもない情報を持つてくるのね？」

「ああ、あの男は相変わらずという事だ。だから、アルマとて伝えやすかっただろう。」

『カリフは全滅した』とな」

「姉さんはそれを信じているの？」

「…この事は真相がわからないかぎり、信用しないほうが良いだろうな」

「ふん、そうね。」

『あの火災は、アルマさんが、あの謎の集団に襲われた際にそれ

を切り抜けて起きた火災だ、と言っていました』

確かあの人はそう言っていたけど、おかしいのよ。

私は近場で見たけど、あの装備『その人物だけを消滅させる爆破』程度、ビルが火災になるとは思えないわ？」

「そこは、オズワルドも指摘していたな。

だが焼死体を解明させると、フォルグナート公国の…どうしたセルファイ？」

「何故、部室にあの人がいたのが気になったのだけど？」

「ふっ、何を気になる事がある。

あの男とて、私にさっきのアルマの事を伝えたくて、やって来たのだろう？」

「…それにしても最初に友達と話をしていて、随分と姉さんに伝えようとするのに時間が掛かったように思えるのよ。

もしかして、あのオズワルドが来るの狙ってなかった？」

「ふっ、まるで私が『優秀な警備員の捜査が、あの魔道士を追い詰めているに違いない』というセリフを待っていたような言い草だな？」

「そのとおりオズワルドが姉さんに言い寄りながら、言っていた事…っ！？」

するとセルフィは呆れたようにレフィーユを見て何かに気付いた。
一昨日の事は、タンカーを調べる口実を作る演技だったのだ。

きっと、その前の日に話し合うなりして、オズワルドに罠を仕掛けていたのだろう。

レフィーユは、呆れたセルフィに笑みを零していた。

「まあ『優秀な』警備員を持っているオズワルドだからこそ、突き止める事が出来たのだ。

あの謎の組織の人間が、フォルグナート公国…通称、ワールドゼ口の国民だな。

おかげで、これでタンカーを調べる必要が出てきたのじゃないか、今は私達に出来る事をやるだけだ」

すると、セルフィは通路に差し掛かり、キョロキョロと周囲を見回した。

「どうした、セルフィ？」

「いつもなら、あの人が偽造した治安部員証明書を持ってきて入ってくるトコロなのに、やって来ないのも気になるのよ」

「ああ、その事が心配するな、もう潜入している」

「えっ、こんな厳重な警備をどうやって？」

「今朝方、エドワードに頼み込んでいるのを見かけた。

何を頼み込んだのやら…な？

さて、私達もそろそろ、捜査に取り掛かるとしよう」

もうセルフイの心境はいかなモノか、その通り彼女の期待通り、彼はエドワードに話を通し、一足先にタンカーにいた。

いたのだが…。

「みつ…」

彼は呟き、タンカーの中で汗をかいていた…。

それは熱いから出るものではなく、緊迫した時に出る汗である。

彼は…緊迫していたのを誤魔化すように一人、叫んでみた。

「み、道に迷った!!」

第三十九話

…道に迷う。

事情を説明して、快承してくれ協力してくれたエドワードにお礼を言った後、彼は先ほどのように道に迷っていた。

彼は別に方向音痴というワケではない、みなさん、経験はないだろうか？

市内にある地下道を使って、その目的の場所に行こうとした時、目的の場所に行く階段だと思って上がってみると、別の場所だったという経験が…。

ただ地上なら、まだいいだろう。

意外と目的地まで近くまで来ているのだから、歩けばいいのだから…。

しかも、ここは空母という名のタンカーの上に4階建てのビルが船の上に載っているようなタンカー。

その規模は豪華客船というより、要塞だった。

しっかり、ルートを把握していないと区画別に区切られているため、このタンカーでは行き止まりになっていたりして、目的の場所へ歩いていく事は無理だったりするのだ。

さっきから右往左往であるが、この迷子、極めつけは途中でシャ

ンテに出会ってしまった事にもあるだろう。

偶然に出会ったのだが、知っている人を見掛けるといのは、どれほど励みになったのか明るく道を聞いたのだが…。

今思えばここをレフイーユ達が、捜査するというのを彼女は知っていたのか。

シャンテの言われたとおり、進むとだんだんと人の気配もなくなり、下へと行くのだから当然、思った。

『騙された』と…。

こうなると、迷子を挽回する方法は限られてくる。

とりあえず、地上に出る事、エドワードの部屋から見えた、大きく広がった甲板の広場に出る事だ。

彼は走った…。

来た道を戻り、階段を上がり、上へ上へ。

人が見えた。

彼は聞いた。

「すみません、甲板の広場に出るにはどうすればいいですかね？」

戸惑う通行人、しかし、教えてくれたのはとてもありがたかった。

走る走る、不審者に思われようとも、走る走る。

そして、とりあえずではあるが、目的の場所に着いた安堵感は一瞬に道に迷った人にしかわかるまい。

しかし、まだ終わりではない、この後、レフイーユと合流しなければならぬので、辺りを見回すと、そこに売店があった。

「すみません」

「はい、何でしょうか？」

お土産屋、というワケでもなく、レプリカの日記帳、このタンカーで使われているのかレトルトのカレー、お土産らしきモノは売っているのだが、日用雑貨品などを売っていた。

そして、帽子を被った店主がこちらにやって来たので、聞いてみた。

「すみません、ここにレフイーユ…、いえ、こんな制服を着ていた人達を見かけませんかでしたか？」

「制服…一体、どうしたんだい？」

「いえ、実は迷ってしまいました…」

「ああ、そうなんだ。さっき店を開けに行く途中の広場で見たよ」

「そうですね、ありがとうございます、その広場ってどこなのですかね？」

「ああ、ボクの差してる方向がわかるかな、あのドアの先にある。こここの階段を上がって三階出た道をにそって行けばエドワードさんの部屋があるんだ。」

そこを横切れば、その広場に出れると思うけど…

警備員に止められるとは思うけど、まあ、事情を話せば何とか横切れるだろうね」

この人いい人だなと思える瞬間だった。

「あ、ありがとうございます」

そう言って、そのドアを店主に確認して、しばらく行くと言われた通りに階段があったので上がる。

すると、廊下が伸びていた…。

騙されたのか…。

またそんな気持ちで、念のためにしばらく歩くと階段があったので上がる。

すると視界は外の景色を捉える。

駆け足気味に階段を上がると、文字通り道沿いに来た時の見たエドワードの部屋が見えた。

ありがとう、お店の人、疑ってごめんなさい…。

嬉しくなったのだが…。

「動くんじゃないよ、アラバ君…」

おそらく、武器を突きつけられているだろう。その背後で聞きなれた声がした。

「アルマさん、大人しく、着いて来てきてほしいという事ですか？」

第四十話

「おや、キミは嘘をついて、私は思わずキミの命を狙おうとしているというのに、どうしてそう思うんだい？」

「貴女は『自分で決める事だ』と言いました。だから、私は『自分で決めたのですよ』」。

貴女の言う事を信じない事にしてレフィーユさんの捜査の協力する事に利用させてもらう事にしたのですよ」

振り向くと、まだカタールを突きつけていたが、何故か確信があった。

「これは『自分が決めた事』なのですよ。貴女に命を狙われるのは、おかしいのでは？」

失礼な事を言っていると思った。

仲間を殺され、しかもその死体を利用されているのだ。

普通ならアルマの行為は正しい、ここで襲われたのなら、アルマの真相が聞けると思った。

だが、いつも通り…。

「そうだね、キミを責める事は出来ないね。

結果としてはレフィーユがここを捜査をするのだから、まあ、い

いや」

「おや、怒らないのですか？」

「別に…じゃあ、悪いと思っっているのなら、付いてきてほしいな」

挑発代わりに言ったつもりがにこりと避けられ、構わず彼女は力タールを消して、一旦、階段を下りて彼女はその上にある窓に目をやった。

その通気に使用されている窓に素早く飛び上がり開錠してそのまま中に入って一瞥した。

視線の意味はわかったので、彼女の後を追うようによじ登ると少し高いトコロにいるのだと実感するように強い風が吹いた。

そして、一本道のように道が伸びていたのだが、先導を勤めるようにアルマも進んで目的の場所に着いた頃には…。

「あれ、アラバくん、どうしたのかな？」

怪訝そうな顔をしていたのだろう、そのとおりだった。

裏からだがこれだけは理解していた。アルマが立っているその場所は、エドワードの部屋だったからだ。

「勘違いしてほしくないな。ただ、彼の部屋には秘密があるからだよ。少し後ろを向いてくれないかな？」

再度、東方術でカタールを作る。どうやら、彼女の東方術の付加

能力を使って、彼の部屋に入るようだった。

付加能力は知られたくないのは、よくある事だったので、後ろを向こうとする際、少し状況を覚えておいた。

彼女が潜入すると思われる窓は開いているが丈夫そうな鉄格子で潜入は不可能。

他にも窓はあるが、カギは掛かっているのが見えた。

本来、ここは人が通るような道ではない。場所が場所のせいで、ドアなどない。

その状況を覚え、言われたとおりに後ろを振り向いた。

その途端、また強い風が吹いた。

思わず、身を屈めてしまったが、背後で声がした。

「何をやってるの？」

振り向いて窓を見ると、すでに潜入を果たしたアルマが鉄格子のない方の窓を開けていた。

「どうやって、入ったのですか？」

「付加能力だって事くらいは知ってると思おうけど。そもそも、手品みたいなモノだよ」

「手品、ですか？」

「タネがわかるとつまらないって意味なんだけど…」

入ろうとした時、彼女はぐいっと、引き寄せて言った。

「動かないで…」

窓枠に股を挟むような状態で引き寄せられたので、自分の身体は
転げ落ちた。

何ようなが起きたのか理解出来なかったが、衝撃で歪んだ視界が
捉えたのは、状況をつかめないままのエドワードだった。

「エドワードくん、彼が怪我をさせたくなかったらわかるね？」

そして、彼女は続いてエドワードにもこう言った。

「大人しく引き下がってくれば、ボクとしてはありがたいけど、
彼がどうなるかはわかるよね？」

だけど、困ったね。

キミをここで逃がしたら、エドワードくん、キミは応援を呼ぶよ
ね？」「

エドワードにもこう言った。

「エドワードくん、よかったら付いて来るかい？」

そして、戸惑うエドワードをじっと見たまま、エドワードに判断

を任せていた。

第四十一話

頷くエドワードをみてアルマは、にこやかに笑い、何をするのだらうかと思っていると、エドワードの部屋を散策し始め。

「アラバ君、ちょっと、この本棚を退けるのを手伝ってくれないかな？」

「この本棚滑車が付いているのですから、ストッパー外せば何とかなるのでは？」

「一応、エドワード君の部屋だからね。了承を得たとはいえ、丁寧に扱わないと失礼だらう？」

ごもつともな理由だったので、ストッパーを外し丁寧にアルマの指示通りにやると、さすがにエドワードは困惑していた顔をしていたらしくアルマは言った。

「何をしているのかと言いたそうな顔してるね。エドワード君、その前に一つ聞いていいかな？」

キミはこの部屋を使っていると、誰から言われたのかな？」

「それは随分前、父以上前くらいの話になりますが、それがなにか？」

聞いているのかと言いたくなるくらい、しばらくアルマは背中を向けていたが、やがてエドワードに聞いてきた。

「じゃあ、これが何かわかるかな？」

そう言っつて、アルマは踏ん張る、その瞬間である、壁はまるでシヤッターのように開いた。

エドワードの顔が何を物語っているのは、容易に理解できた。そんな状況下、アルマは構わず中に入って行くので、戸惑いはしたが本棚を元の位置に戻しながら、二人はアルマに続く事にした。

「凄いですね、まさかこんな事になつてるなんて……」

あらかじめアルマが照明のスイッチを入れていたので、エドワードは周囲を見回してそんな事を呟いていた。

「あの部屋はキミが随分前から使っていたというのに知らなかったのかな？」

「す、すみません、まさかこんなトコロがあるなんて知りませんでした」

「まあね、これがこのタンカーの入り組んでいる構造の理由でもあるんだよ」

「ど、どついう事でしょうか？」

「通路が入り組んでいれば人はそこにある空間や通路に気付かないという事ですな？」

自分の言った事にエドワードは感心しながら、アルマはにこやかに頷いたが、おかげで気がついた事があるので聞いてみた。

「では貴女は、どうしてこの通路を知っていたのですか？」

「噂だったからだよ」

「噂…？」

「そう、このタンカーには秘密の通路がある事で有名だね。予めインターネットで調べて見たんだよ」

「インターネットって…。そんなに簡単に見つかるのですか？」

「エドワード君、機密は存在しても、今のご時世、組織に忠誠を誓う人間なんていないよ？」

あんな事があった。自分の事を棚に上げて、そんなことを言ったので今度は自分が困惑した。

「相変わらず、何をしたいのかわからない人ですね。どうして、こんな手のかかる事をするのですか？」

もともと、アルマに対して困惑をしていたのだろう、多分答えてくれないと思った。だが、アルマはじつと見つめて言った。

「それは日記帳に書かれていたからだよ。アラバ君、あの日記帳の最後は何て書かれているか知ってるかい？」

アルマなりに遠まわしに思い出せと言ったのだろう。

確かにこう書かれていたのだ。

「…この世に聖人君主はいない。」

正しいかどうかを判断が出来るのは第三者だって事だよ」

「だから、私をあの時『選んだ』のですか？

ですが第三者というのは、貴女達、カリフの事なのでは？」

「それは違うよ、アラバ君」

エドワードは何を言っているのかわからない様子だったが、アルマはエドワードを見て言った。

「エドワード・F・ポルテ、東方術はサーベル、付加能力は刀身が伸びる事…」

そう言いながら、今度はレフィーユの東方術、付加能力、七色同盟の全員の特徴を言う。

「そして、チェンバレンは西方術、風の使い手、それを生かした体術と言ったところかな。」

知っているというのは、関わっているとそんなに代わりが無い事。

つまり、そこに書かれている、第三者というのは部外者、つまりキミと…あとは一人はわかるだろう？」

「あの…誰なんでしょう？」

「エドワード君、漆黒の魔道士だよ。ボクは彼とキミに判断を委ねたんだよ。」

彼には日記帳を、そして、キミには情報をね」

「あのすいません、アルマさんは日記帳の内容を知っているのでしょうか？」

「まあね、でも、間違いなく言えることはキミが知る必要の無い事だよ。」

それにもう一度聞くけど、この通路、本当にキミは知らなかったの？」

「そ、それはホントです。信じてください」

「どうだか」

「エドワードさんはどう言っつのは慣れていないのですよ。それで、私達をどこに連れて行くつもりしてるのですか？」

「うん、そうだね。」

私の調べ物に付き合ってもらおうかと思ったんだよ。まあ、しばらくは歩く事になりそうだけだね。

それはそうと、キミはそもそも今日はアルバイトの日じゃなかったかな？」

「ホントにいろいろ、調べてるのですね。」

お構いなく、クビになりましたから…」

何故かエドワードが驚いたのは、アルバイトの経験がないからだろうか、同時に驚いたアルマは代わりに聞いた。

「ボクの知ってる情報だと、キミは駅前のコンビニでアルバイトしてて、結構、真面目に働いていたのにどうしてだい？」

「随分、古い情報ですね。まあ、レフィーユさんが様子を見にやって来てしまいましたね…」

「それがどうしたんだい、有名人がやってくるといっなのは店が繁盛するのは間違いないという事だろう？」

「ホントにそう思いますか？」

睨んだ…。

そして、何かを感じ取ったのだろう。

自分の視線に二人は明らかにたじろいだ。

そう…彼女のせいだ。

確かに先ほどのアルマの言とおりの『繁盛』というより『賑わい』をみせるだろう。

まるでドラマのように…。しかし、現実はずう。

どう調べたのだろうか、彼女はやってきた。

確かに様子見にやって来たのだろう。

正味3分ほど話をして『頑張れ』と言って去っていったのだから。

だが、それが、その後の問題だった。

賑わいを見せるコンビニ…。

それは何日か続くと客の回転が悪くなるのを見せ付けていた。

おかげで店長からこう言われてしまう始末である。

「すまない、やめてくれないか？」

しかも、この『流れ』が計3回…。

「私はどこの社会不適合者ですか？」

「く、苦勞してるのですね…」

エドワードが心配した、その時である。

携帯が鳴った。

デジタルにこう描かれていた。

レフィーユ・アルマフィ…。

第四十二話（前書き）

つい、最近、前の話と見合わせている癖がついています。

第四十二話

「レフイーユさん、貴女のせいじゃありません、すみません」

「人が調子を聞こうとしたら、お前は突然、何を言っているのだ？」

「いえ、何でもありません。調子はどうですか？」

「何かひっかかるが…まあいい、私の方は『案内着き』の立ち入り調査で何にも出てない始末だ」

「機嫌悪いですね？」

「当然だ。」

私が『あそこが気になるから、ちょっと良いか』と行こうとすれば…

何が『ちょっと待ってください』と慌てて止められて、待つ事、10分で何が『調べて良いですよ』だ。

『調べる』という意味がないじゃないか？

不機嫌にもなる」

彼女は周囲に聞こえるように強調しながら言っただから、よほど機嫌が悪いのだろう。

次に何を言おうとするまでに少し息を整えていた。

「それで、お前の方の首尾はどうだ？」

「そうですね、エドワードさんの協力を得て、タンカーに潜入に成功しましたが、途中で何の因果かエドワードさんと、アルマさんで探索する事になりました…」

「これはまた随分と面白いメンツだな、一体、何があった？」

驚いた様子でこっちをみたエドワードとその様子に笑うアルマを見て思ったのだが。

「いつも通りと言いましようか、私を含めて、エドワードさんにも危害を加えようとしませんが、まあ大丈夫だとは思いますが…ねえ」

「こつやって薄暗く長い通路を歩く中でも、やはり不安である。

「何を企んでいるかはわからんからな、一応、どこにいるか教えてもらおう」

「すみません、ここがどこなのかわからないのですよ。

まあ、危害を加えるつもりは無いので、しばらく着いていこうかと思えます」

「レフイーユ、心配する事はないよ。

ボクは君達の協力をしてやろうとしているだけだよ」

「ふっ、どうだか。」

あんな事があつた手前、貴様はどうも何かを隠して私達に接触を図る節があるからな。

私はどうもお前を信用できん」

レフィーユもやはりその辺は怪しいと思つているのだろう。

自分もさつき『どこなのかわからない』と言つたのも、普通は『どこからやって来た』と言うが、自分の中にもやはり完全に信用してはいけないと思つたからだった。

「まあ、どう思つかはキミ達が決める事だからね。」

安心してほしいな、ボクは彼らに危害を加えるつもりはないよ。

…どうしたんだい、アラバくん？」

だがこの時、別に自分には思う事があつた。

自分の持つた携帯から、アルマがいる場所はやく3メートルほど離れている。

そんな彼女と彼女の間で、どうやって会話を完成させているのがまつたくわからないのままだった。

一応、音量を最大にして携帯を手に離れたアルマに向けていたのだが、先ほどのその意図が理解できなかつたらしい。

そして、思わず携帯を凝視するレフィーユの一言。

「ふつ、女には女同士にしか出来ない会話が出来ると、アイツに言っておけ」

「という訳だよ、アラバくん」

そんなクスクス笑うアルマと自分が再度、歩みを進めるとようやく目的の場所に着いたらしく、足を止めて、先ほどのように壁を弄る。

今度はふすまの様に開いた。

「ここは機関室ですか？」

「そういう事になるけど、正確にはその配管の裏側って言うたらいいかな？」

「裏側ですか、おかしいですね。それにしてもここは随分と広い感じがしますけどく？」

「ふふ、その通り、そして、ここから、ほぼ一方通行で誰にもバシらずに外に出る事が出来るんだ。

それにここからなら、謎の集団が集められる事が出来ると思わな
いかい？」

そして、アルマはエドワードの方を見る。

「それが、エドワードさんの部屋にあった…」

そう呟いて、自分もエドワードを見て。

「まあ、この通路は他にもあるんだけどね」

アルマの一言にずっとこけていた。

こう答えのように、アルマはしばらく歩き、また壁を弄りドアを開ける。

「ちなみにここはチェンバレン君、だったかな、彼の部屋に繋がってて、さらに間隔を置いて全員の部屋に繋がっているんだよ。」

まあ、昔からある、脱出経路だからね」

「あれ、でも、エドワードさんは『知らなかった』のですよね？」

驚いたままのエドワードも、つい頷くのをみてアルマは言った。

そして、いつもの調子で…。

「後は自分が考える事だよ」

「そう来ると、思いましたよ」

少し『ムッ』とする中、エドワードは感心するように言った。

「やっぱり凄いですね。私はさっきから圧倒されるばかりで、ごめんなさい、本当は東方術者の私がしっかりしていないといけな

いのこ」

「そんな事は無いですよ」

「いえ、貴方は十分に凄いと思います。」

私は強くないといけなといけませんのに、これじゃあ、アイーシャも守れないのも当然ですね」

「ああ、その事だがエドワード君、いいかな？」

「な、なんででしょうか？」

「ボクも調べている内に『キミが強くなりたい』なんて事は知ってはいるけどさ。」

強くなっても、意味がないと思うよ？」

「えっ？」

「そんな強さを求めても、この『アイーシャはキミが別れたがってる』って意味は変わらないって事だよ。」

キミもそんな事を理解してないほど、ボクは子供だとは思ってはないよ」

押し黙るエドワードを見て、アルマは言った。

「…ある男の話をしようか」

「ある男…」

「ああ、ある男、その男はね。」

ある一遍の正義感を持っていた。

どこにでもいる、例えば爆破事件が起きて逃げ惑い、その人ごみの拍子で倒れた老婆を安全な場所に移すといった行動が戸惑う事なく、実行できるような男だった」

「それなら凄い人じゃないですか」

エドワードの反応にアルマは自分を見ながら言った。

「いや、だが、その老婆には小さな子供がいたんだ。」

その子は、彼を見て何をしたと思う？

石を投げつけたんだ。

『お婆ちゃんに触るな』ってね」

「どうしてですか、明らかに彼は間違っていないじゃないですか？」

「そう間違っていない、だが、彼にはある特徴があったんだ。」

その特徴のせいで昔から『彼は悪だ』と、こつ言われ続けていたんだ。

例えば、キミの言ったとおり間違っても、世間は一度、判断

した事に概念を覆さない。

そんな彼にキミは良く似ている。

キミの場合はどんなに頑張っても、アイーシャはキミに振り向く事など無い。

キミにホントに必要なことは、現実を受け入れる事にあるんじゃないかな？」

「現実を受け入れる…」

「…強くなるというのは、そういう事だよ。

自分の弱さを認める。

生まれも認め、そこから自分自身を見直す事が『強さ』なんだよ。

ボクは思うけど、キミがいくら特別な生まれで弱くても、それは今からでも始めないといけない事なんじゃないかな？」

そう言われ、アルマはいつものようにエドワードに考えさせてたが、しばらくして、その先に続く道を見た。

「やって来たようだね」

それはゾロゾロとやって来た。

「どおりで立ち止まっていたワケですか？」

「この状況じゃ、どう言われても仕方がない事だね…」

エドワードは戸惑う中、謎の集団が自分達の前に立ちふさがろうとしていた。

第四十三話

「カリフのアルマだな。」

七色同盟の仇をなすモノとして、お前を見逃すわけにはいかん、ここで死んでもらおう」

広い広間に覆面集団、視線を泳がせながら人数を数えると15人くらいだろうか、数えていた事を誤魔化すように肩をすくめた。

「随分とここに長居をするなと思いましたが、アルマさん、これも貴女の狙いどおりですか？」

「それは勘ぐりすぎだよ」

「何をこそこそしている、シユウジ・アラバ、お前もだ。お前もここで死んでもらおう」

「おや、それはどうしてですか？」

「本来なら目などかける必要も無いが、お前が我らの障害になると判断したからだ」

「どうやら、このタンカーにアルマさんの部下達を殺した。貴方達が隠れているというのは間違いないようですね？」

「うるさい、お前のその知りたがりが自分の首を絞めたと思うんだな」

「知りたがり…、貴方達は私をただの知りたがりだとそう思っているのですか？」

「どういう意味だ？」

遠回しに『自分が漆黒の魔道士だと知っているのか』と聞いたのだが、どうやら自分の事を知らなかったらしい。

その態度にアルマは笑みを浮かべていたが、これ以上、遠回しに聞くとかしら疑問に思われそうだったので、顔をしかめつつ言った。

「それならエドワードさんは見逃してくれませんか？」

「ア、アラバさん!？」

驚くエドワードを尻目にアルマは言った。

「随分と軽率だね、コレらがそんな提案を受け入れるとと思っているのかい？」

「前に七色同盟の血族であるセルフィさんを見逃した事がありますので、エドワードさんは特に大丈夫だと思います」

「そうなんだ」

するとアルマは素早くエドワードを羽交い絞めにした。

どうやら、アルマはその事を知らなかったらしい。

「大人しく道を譲るんだね、動くかどうか解るだろう?」

身体を密着させて、カタールをエドワードの頬に突きつける。

「くっ、卑劣な…」

「それはキミ達に言われたくないね、キミ達はボクの仲間の居場所を聞く時に拷問に掛けたそうじゃないか?

仮にもキミの拷問に掛けた二人の片方は女だったんだよ?」

「物事というのは時に冷酷に進めなくてはならんのだ。」

だが貴様、エドワードは何者なのか知らないとは言わせんぞ?」

「七色同盟の一人…だよ、だったらボクでも冷酷に物事を進めさせてもらつよ」

「おい、貴様、アルマを止める」

「止めると言われましてもね。一応、これでも私も命を狙われますからね」

エドワードと視線が合い、彼らの見えないところで片眼を瞑りながら言った。

「アルマさん、止めた方が良いですよ?」

「おや、ボクは最良の手段をとったつもりなだけだね。」

ボクがここで止めたら、多分、彼らは攻撃を仕掛けてくるよ。

ボクだけじゃない、キミにもね。

これで助かるうなんて思わないほうがいいよ？」

「そんなの知ってますよ。ただ貴女は、彼らと違う…。」

貴女は約束は守る人間だ、少なくとも私は彼らほど信用はしているつもりですがね？」

「…他に方法があるの。間違いなく、助けは来ないよ？」

「ああ、それなんですけどね。アルマさん、私は『切つて』ないのですよ」

「切つてない？」

「あまり強く言いたくないのですがね。つまり、ここで粘れば粘るほど…。」

大丈夫なワケです」

「あつ」

最初に自分が腰のポケットに手を当てるとエドワードが、自分が何を言いたいのかわかったらしい。続いてアルマも気付いた。

「なるほど小ざかしい。彼女が手を焼くわけだ」

「お前達、何を言っている？」

「アルマさん、もう一度、聞きます。」

「ここは機関室ですか？」

「そうだ、機関室だ」

「ニコリとしたまま、視線を退路に送った。」

「間違いないですね？」

「キミもしつこいね、間違いないって言ってるだろう」

幸い自分達の来た道は、まだ誰もいなかった。

アルマはもう拘束する必要もないだろう。エドワードの肩を押して走らせて言った。

「退路はボクが守る。だからキミ達は早く！！」

その瞬間だった。

『掛かれ』と言う号令とほぼ同時に金属のぶつかり合う音が聞こえた。

「お願いします」

そう言って、一旦はアルマに視線を送って自分も走り出した。

この後、この時自分が感じた疑問を思い浮かべながら。

第四十四話

「ここから先は行かせないよ?」

アルマはそう言つて覆面を被つた男を突き飛ばし、そして、身体をくねらせて両手にカタールを構えて言う。

「しかし、いい加減、キミ達の組織の名前くらい教えてほしいものだね」

「おのれ、ふざけるな!!」

挑発に乗つたのも知らず、槍を構えた男がアルマの身体目掛けて突きかかると、すれすれで避け、彼女が放つた喉元への躊躇の無い一撃に倒れた男を見て覆面集団は思わずたじろいだ。

「ボクもキミ達のような影の集団だつて事、キミ達忘れてないかい?」

ニコリと笑い、カタールを飛び掛りながら振り下ろす。

その着地を狙つて、周囲もさすがに取り押さえに掛かろうとするが、先ほど斬り付けた敵に肘打ちをして、腕を交差した体勢になり、回転する動作だけでカタールを振り回して間合いをとる。

「一人に、何を手こずっている!!」

まるで一介の舞踊を思わせる戦い方をみて、アルマに苛立ちを覚え声を荒げるがアルマは言った。

「残念だけど、キミ達はボクを殺せない事くらいわかるよね？」

思わず周囲が静まりかえった。

2人を追わせるために3人向かわせたが、これは12対1から始まった戦い。

この覆面集団にも慢心があつたのかもしれない。

だが、結果は5人倒され7対1、人数が減るにつれ東方術の付加能力も生かすが、その残りも傷を負っていた。

しかし、目の前に立っているアルマは、軽く血は浴びもしているが付加能力も使わずにこの集団は傷すら負わせるすら出来なかったのだ。

「…そろそろ、ボスに会わせてほしいんだけどな？」

思わず覆面集団は驚くがアルマは笑いながら言った。

「これでもカリフなんだけど知らないと思っただかい？」

そのままアルマは視線を遠くに移す。

その視線に気付いたのか、覆面集団も背後の気配に気がついて慌てて道を空ける。

「…あまり図に載らない方がいい、カリフ」

「随分と遅い登場に、随分とずさんな配備だったけど、先約でもあったのかい？」

笑いながら、気軽にアルマはその人物に話かけるが、じっくり観察をしていた。

いつもどおりといおうか、覆面を被っている。

だが動きやすいようなボディスーツを着ているため体型で女性とわかるが、次の瞬間にアルマ確信に至っていた。

「…部下の報告によると、走って逃げられた」

その女性は東方術で『日本刀』を作ったからだ。

「シャンテ、会いたかったよ」

……。

「駄目です、見つかりません!!」

その頃、エドワードを連れて、元来たエドワードの部屋を戻ろうと隠し通路のドアを二人して探そうとするが、先ほどエドワードが焦るように締め切った扉はどこにあったのか解らなくなっていた。

「ど、どうしますか？」

そうすると何やらが走ってくるような音が聞こえた気がしたので、手を引っ張りながら言った。

「追ってくるという事は、ここに出入り出来る道があるということです。このまま走りましょう」

走りながらなので、ちゃんと聞き取れたのかわからないが、エドワードを連れて走るとその通りの大きな隙間があった。

まずはエドワードを先に出して、自分も手を引っ張られながらも抜け出し、そのまま角に入ると3人が追っかけて先ほどの道に入っていくのが見えた。

これで時間が稼げると少し安心しながら、辺りを見回すと上に上る階段が見えたので、息を切らせたままのエドワードと一緒に行くこととしたが…。

思わず引き返した。

「ど、どうしたのですか？」

困惑する、エドワードを見ながら繋がったままの携帯を手にした。

「レフィーユさん、今、どこですか？」

「すまない、ようやく、2階からそっちに向かっている」

「そうですか、不味いですね。」

少し取り囲むのが遅いと感じてましたが、取り囲まれそうです

エドワードを連れて、そこにある自販機の影に身を隠す。すると階段のある方からやって来たのは覆面を被った二人組みだった。

「貴女だったら、ありがたかったのですが急いでください」

そう言って、携帯をまだ付けたままで収めるとエドワードは焦ったままだった。

「ど、どうしましょう?」

「エドワードさん、あれを見てください」

「ダストシュートですか、でもどこに出るのかわかりませんよ?」

「大丈夫です、アレはクリーニング専用の入り口です。」

見つかりはしますが、安全に逃げれます。エドワードさんは先に逃げてください」

「アラバさん!?!」

肝心の通路が狭かったため、一人一人が入らないと安全を確保出来なかったのでそう言った自分にエドワードは言った。

「だったら私が残ります、私は東方術者です」

「エドワードさん…」

「これでも七色同盟であるという誇りはあります…」

「エドワードさん!?!」

「私に、そんな事させないでください!!!」

大声でそんな事を言うので、とうとう気付かれてしまった。

「: すいません、でも戦えるんです。どうか、そんな事を言わないでください」

静かに二人を取り囲もうとするなか、自分は近くにあつた消火器を武器になるかと手にする。

突然、声を荒げられたからか、何を言っているのかわからなかった。そんな中、拍手だけが大きく聞こえた。

「よく言ったー、エドワード。それこそ男の子ってヤツだー」
チエンバレンが、腕を捲りながら自分達と5人の覆面たちの間に立って言った。

「どうも下の階が騒がしかったんでなー」

やって来てみれば、なんだこりゃ、騒がしい事になってるなー?」

「チエンバレン、この男は七色同盟の障害になると判断し抹殺する事にした。退いてもらおう」

「抹殺ねー」。

俺からしてみればー、お前達の方が十分に怪しいけどなー」

構わず集団の一人が、二人に歩み寄ろうとした。

「大した自己中だなー」

ゆっくりと『一步』歩み寄り、距離にして3メートルだろうか、チエンバレンはその距離を『一步』で縮めて敵を突き飛ばしていた。

「西方術の風で空気の輪を作って、その中に入って身体を砲弾のように飛ばせば、十分な武器になるってー、俺の戦い方も知らないのかー？」

「おのれ、七色同盟を裏切るのか？」

「はあ、俺は裏切ってなんかねえよー？」

ただな、コイツはレフィーユの連れだろうがー、これ以上の理由がどこにあるんだー？」

のったりとしてチエンバレンは言うが、明らかに威圧していた。

第四十五話

「そこまでよっ!!」

そんな中、セルフィ達がやって来た。

それをみた覆面達の一人がさすがに適わないと思ったのだろうか、手を上げた。

取り囲まれる前に撤退をしようというワケだろう。

「私達は追います、セルフィさんはエドワードさんをつ!!」

そう言い残し、ヒオト達はセルフィを残して走り出した。

「大丈夫、怪我は無い?」

「セルフィさん、追っていった人達に悪いですがあちらでアルマさんがいるのですよ」

「ふん、相変わらず人の事を心配するのね。」

心配しないで、姉さんが行ったわ」

その時である『ドン、ドン』と鈍い音と爆発音が連続で聞こえた。

「なんですか今の音は?」

エドワードは聞いてきたがセルフイは苦い顔をしていた。多分、自分も顔もセルフイと同じような顔をしていたと思うが何とか言っただ。

「…とにかく今は安全を確保しませんか？」

聞いたことのある『証拠隠滅の音』にセルフイは頷いて、とりあえず自分達はこの場をレフィーユに任せる事にした。

その後、学園に帰ってきてわかった事だが、レフィーユは覆面集団を取り逃がしたようだが、負傷をしていたアルマを保護する意味を込めて確保をしたらしい。

「ふざけるなっ！！」

しかし、その扱いは体罰的だった。

オズワルドの怒声が合図だったのだろうか、直属の警備員の一人が、拘束着で身動きのとれないアルマの髪を引っ張り叩き伏せていた。

「け、けが人に、随分な扱いをしてくれるじゃないか？」

「じゃあ、真実を言っただ。」

アルマ、どうしてお前は私のタンカーに潜入して来た？」

「だから何度でも言うけど、ボクは『調べ』にやって来た。それだけだよ」

「嘘をつけ、お前はレフィーユの命を狙いにやってきたのだろうか？
前の時のようにな」

「ちよつと、矛盾してないかな。」

どうして治安部がまわりにいる状態で、そんな危険を冒す必要があるんだい？」

「じゃあ、私の命を狙いにやってきたのだな？」

最初、お前はレフィーユを狙おうと思った。だが、今日、偶然、私のいるタンカーはレフィーユが調べる事を知ったお前はターゲットを私に移した。

そうだろうか？」

「馬鹿馬鹿しい、何でキミを狙わないといけないんだ？」

「口の利き方に気をつけろっ！！」

「迷推理つてのを聞いたことがあるけど、それじゃあ珍推理だ…
っ!？」

再度、警備員に殴られ、飛ばされそうになるがアルマは答えた。

「…じゃあ、言わせてもらっけど。」

『偶然』なんて暗殺で最もしたらいけない事だよ？

証拠を残さず、痕跡も残さなかったら、なおよし。この場合、ボクが正しいと思わないのかい？

それにボクは『調べ』にやって来たのに、まるで待ち構えていたかのようにいた。

あの覆面集団が、なんであそこにいたのだろうね？

「ふっ、狙いはお前だったと言うのかアルマ？」

するとレフィーユが入ってきた。

「レフィーユ、今は私が取調べをしているんだ。

ここは任せて、キミはあの魔道士を…」

「それにしても随分な、扱いをしているようだか？」

「殴る蹴るの暴行が、この人達の真実の追求のしかたらしいよ？」

余計な事を言うようアルマはニコリというが、レフィーユは一瞥をして、警備員を睨みつける。

そのままオズワルドを睨みつけ席を退かせると、そこに座るとアルマが言った。

「待っていたよ、レフィーユ」

「すまん、お前を保護しないとそのまま殺されそうだったのでな。」

それでさっそくで悪いが『狙い』は何だったのだ？」

「随分と曖昧だね、どっちの事？」

「お前の狙いと、その覆面集団の狙いだ」

「ボクは調べにやってきた」

その時、オズワルドが何か言おうとしたが、レフィーユは話が混乱すると判断したのだろう。手で制して、アルマの会話を促した。

「…いい心がけだね」

第四十六話（前書き）

明けましておめでとういっせいでます

第四十六話

そして、アルマは覆面集団の狙いを仮定ながら言うが、それに反論したのはオズワルドだった。

「馬鹿馬鹿しい、どうして私なんかじゃなくて、あの役立たずの西方術者サウスタンなのだ？」

「根拠はあるよ。レフイーユ、今回あのタンカーを調べようとしたのは誰なんだい？」

「アラバだ。」

『ビルの火災で出てきた、身元不明の死体は、お前が倒した覆面集団の死体かもしれない』

なんて言われたモノでな。

実質、疑わしかったが、オズワルドに頼んでワールドゼロから取り寄せたトコロ。その国の歯の医療履歴の中から、人物の名前が特定できたのでな。

そこであのタンカーも捜査の対象に入ったのさ。

…という事は、それが原因というのは高いな」

アルマは笑みを浮かべ、笑いながら答えた。

「当てずっぽうって、時折、真実に近い場所を打ち抜くから、影

の組織にとってやっかいな代物だよな。

あの集団が、それが原因で彼が狙おうとしたのなら、可能性は高いかもしれないね。

さすがキミの見込んだ男だよ」

「何が見込んだ男だ。あの西方術者^{サウスタン}が、そんな余計な事をするから、危険な目にあつたのだろう？」

「どうかな、彼は自分で動いていた結果じゃないか。

キミはただ何もしないで、部下の報告待ち、聞いたけどレフィーユの周りの人間にお金をちらつかせて、彼女の動きをちくいち報告するように買収したそうじゃないか？

未だに彼女に付きまといっている男を、キミの手足のようにあつかっているのはいい証拠だよな。

だから、私達に包囲されるなんて目にあつたりするんだよ。

ま、ボクから見ればキミなんかより、彼の方がよほどいい男だと思っただけだね」

「何い、私は七色同盟の中心に位置する人物だぞ？」

「だから、何。歴史の教科書にも載るような人物だといふのかい？」

「そうだ、私が成そうとしているのは、そう言う事だ」

「2000年に渡って、封印されていた日記帳を読む事で平和の尊さを世間に大々的に発表する事でかい？」

「こつちから言わせてもらっけど、それこそ『馬鹿馬鹿しい』よ。」

ボクはそんな『歴史』より『天然記念物』を眺める方が好きだよ」

「何の事だ？」

オズワルドには意味がわからなかったが、レフィーユには意味がわかったらしく。

「ふっ、言い当て妙だな。」

だが、私もアレらの狙いは何となくは、アラバが狙いだっと思っていた。

そこで一つ気になるのは…。

あの集団は『知っている』のか？」

「知らないのじゃないのかな、知っていたら、とつくの昔に脅かされているなりされていると思うよ？」

「とつくの昔に…か、アルマ、随分とあの集団の事を知っているようだが、お前の狙いは何だ？」

「言っただろう、ボクも調べていたとね」

「だが、お前はその集団の事を知っていた、そこに行けば襲われる可能性がある。」

そんな危険を冒してまでアルマ『何を』調べようとしていたのだ？」

「どうもキミには誤魔化すというのが効かないらしいね。」

「いいよ、教えてあげよう。」

ボクはあの集団の『ボス』に会いたかったのさ」

その一言に、レフィーユは手を組みなおしてアルマを見つめて言った。

「私がやってきた時には、いなかったが？」

「それはキミがやって来たのを察したんだらうけど、そのまま帰って行ったんだよ」

「それで、その特徴は？」

その時レフィーユは自分の言った事にため息をついた。

「どうしたんだい？」

「またお前が『キミ達が考える事だ』と言ってきそつだと思っ
な」

「良く知ってるじゃないか」

声を曇らせながらアルマは笑うが、何か思いついたようにある『提案』を出した。

オズワルドは当然、反対したがこのままではラチが明かないのが目に見えていたので、こう言った。

「良いだろう、但し、条件がある」

第四十七話

その夜の事である。

レフィーユに頼まれた自分は、アルマがいる留置場に向かっていった。

『彼女は怪我をしているから、その治療を頼む』

そんな事を頼まれたが『いろいろ聞き出してほしい』という意味だろう。

ここは消灯時間のため今は薄暗く、誰もいないトコロをみると、この決定にはオズワルドは納得していないのだろう。

最初のゲートで警備員を見かけてから、誰もいないのだ。

『アルマが何かしら暴行に及んでもほっておけ、助けに行くな』
そう考えているのだろうかと思いつつ、しばらく歩くと気配がした。

横になっていたその人物も、自分の気配に気付いたのかゆっくりと振り向いた。

「アルマさん、何をやっているのですか？」

「見てわからないのかい、パッチワークだよ」

ボクは上下の繋がったツナギのような服が嫌いだね。この程度の拘束着なら肩の関節を外せば脱げるから、仕立て直しているんだよ」

そう言つて夜一人、しかも下着姿でそんな事をやっている異様な光景の中、アルマは聞いてきた。

「それで、キミは何しにやつて来たんだい？」

下着姿の女を見に、やつて来たわけじゃないだろう？」

「怪我の治療ですよ」

「聞き込みの間違いじゃないのかい？」

クスクスと彼女は冷やかにして来て、両断した拘束着のズボンに紐を通していたので投げやりに答えた。

「勝手に思つてくださいよ」

「おや、怒つたのかい。それはすまなかつたね」

そう言つて正面で向かい合つと、今、自分が目になっている『それが目立つように見えたので。

「私はそんな大きなキズを見せられて、興奮するほど変質者ではございませんよ」

随分前からあるのだろう、アルマの身体はキズだらけだった。

背中に大きく跡を残しているモノもあれば、引き締まった腹部の

横など挟れて新たなくびれを作っているモノもあつたので、顔は赤くなっていたとは思うが、違う意味で息を呑んでいた。

「…カギくらいもらつたんだろう、これでも背中にも怪我をしているんだ。バンソウコウくらい張って行ってくれないか」

そついうので中に入って、怪我の治療をしようとしたが、どうしてもキズに目が行ってしまう。

それに気付いたのか、アルマはゆっくり言った。

「これは、ボクが訓練で負つたキズでね。

ボクは生まれてから、ずっとこのカリフの頭領になるように訓練を受けていたんだよ」

「生まれてから？」

「そう、この世に生を受けてから…。

お父さんも、おばあちゃんも、カリフの頭領だったからね。

ボクも、こうなるんだ。こうならなければならない。

何て考えていたから、没頭するのに時間が掛からなかったよ」

後ろを向いたまま、昔の事を思い出したのか肩に見えるキズを撫で、先ほどの腹部にある大きなキズを撫でて言う。

「誇りもあつたよ、だって、七色同盟って言う凄い人達を守る

んだよ。

どんなにキズを負っても、その一心でつらい訓練だって耐えられた。

でも、今の七色同盟を知ろうとした時、幻滅したよ。

エドワード、チェンバレン、死んだミン君、レフィーユはまだ、良いかもしれない。

残りは、身分に調子に乗っただけの人間だ」

拳を握り閉め、彼女の心境が読み取れるなか、彼女は自分の方に向いてきた。

「そんな中で、出会ったのはキミだった」

第四十八話

「彼女を知る上で、キミの登場は仕方がない事だった。

「ただ、ボクは彼女以上に、キミが正義の味方だということを知っていたのは、数年前だった」

「どう言う事でしょうか？」

「ボクは、昔からキミのファンだったんだよ。」

自分の信じた行動、行為を全うし、様々な事件に取り掛くむ姿勢。

否定されるのがわかっていても、邪魔をされるのがわかっていても情報を提供する、その様。

結果はともかく…、まさにキミはあの七色同盟より、おとぎ話に出てくるような人物。

そのキミの姿は、七色同盟をずっと守っていた影の集団『カリフ』の学ぶべき姿勢だったからね。

…だけ。

その活動はある事件で、休止を迎える事になる」

アルマは、腹部にあるキズを撫でて、まるで血がまだ付いているかの様に指先を見つめてさらに聞いてきた。

「どうして『また』戦おうとしたんだい。ましてや、今度はレフイーユと一緒にだよ。普通じゃ考えられないよ?」

「考えられませんか?」

「ボクだったら、絶対に許さないね。もっとも、適わなかったけど。」

でも、それが普通じゃないかな?

特にキミには彼女を恨んでいい権利と、何をされても仕方が無い権利だってあるのに、でもそうしない。

その証拠にボクはキミに『全て』を教えたのに、キミは優位にも立とうともしないじゃないか?

教えてほしいね、どうして、そこまで抑えていられるんだい?」

月明かりで彼女の耳にあるピアスに気付くが、一旦、視界から彼女を外した。

「抑えられていませんでしたよ...」

そして、彼女を通り過ぎ空を見上げるとここから月が良く見えた。

「どんなにキズを負っても、どんなに罵られようとも学園に登校する。」

あの時の私には、これが自慢でしてね」

「随分と小さい自慢だね」

「お笑いになって結構ですよ。」

ですけど、いつも挨拶をしてくれるイワトさん、いつものように冷やかしてくるサイトさん、あの双子にレオナさん。

いつも出来る事が、どれだけ私の励みになった事か。

ですけど、貴女の言った『あの事件』の後、さすがにそれが出来ませんでした」

『何もしたくない』

その心境で見上げた月と、この月はよく似ていた。

「ずる休みもしました。打ちのめされたように倒れ、あの時ほど、もうやめようと思った事はなかったでしょうね」

「でも数日後、またキミは…」

「『立ち上がるしかなかった』と言えば格好が付くでしょうか、私は様々な事件に関わって、様々な人に出会いました。」

どの様な人が強いというのを知りました。逆に弱いというのも見ました。

復讐とは報復とは、虚しい事だとも知ってました。

そこで出てきた回答は、そのまま倒れて楽になるか…」

「その逆の二択目、キミは戦う方を選んだ」

「…逃げたくなかっただけ、結局、私にはそれしかなかったの
しょうね」

「だけど彼女は、キミを認めなかったじゃないか？」

「そうですね、あの時の彼女は敵意を持ってました。

ですけど、その時だけ、彼女の敵意に煽られて抑えていたのが、
ふき出しました。」

攻撃するたびに、私も、言いたい事を言いました。

彼女も同じように、言い返し、今、考えても、子供のようない
争いですがね。」

だんだん、攻撃が出来なくなったのですよ」

「どっちがだい？」

「私の方ですよ…。」

彼女の方が正しい事を言っていました。正しかった、彼女の言う
事が、間違いなんかじゃありませんでした」

そして、最後の時、自分が何を言ったのか覚えてない。

ただ、あの時『覚悟』だけがあった。

「あの後は、幸い『運が良かった』と言いましょ」

「だけどキミは悪く思う必要なんてどこにもないじゃないか？」

「あの時、私は彼女に何もしてやれなかった。

何かやらなければ、ただ『覚悟』があるだけでは、いけなかったのですよ。」

その『何か』を私は持ち合わせてなくて、悔しくて。

だから環境を変えようと思った時、彼女がここにやって来ました」

そう言って、月が雲に隠れるとアルマは言った。

「ショックだよ」

「どうしてですか？」

「ボクは、キミに会おうとした時、心が躍ったんだよ。

そんなボクの気持ちなんてキミにはわからないだろう……」

そう言って、アルマはいつもの調子に戻るが仕切りなおすように仕立て直した拘束着を着て言った。

「さて、そろそろお暇させてもらおうかな」

「おや、もう帰るのですか？」

「参りましたね、情報を聞き出せと言われたのですがね」

「大げさにそう言っつて、肩を竦めるとアルマは笑っていった。」

「おや、キミはボクがどうやってはぐらかすか知らないと言わせないよ？」

「くくつ」と笑いながら、鉄格子に手を掛け、アルマは片手にカッターを身につけて言った。

「でも、特別にボクの付加能力がどんなモノか、見せてあげよう。」

「これがキミにとって、ボクが日記帳を盗み出す事が出来ないという証明だと言う事になる」

影で真っ黒になったアルマは、鉄格子に向かって身体を埋めた。

アルマの付加能力は『柔軟』

おそらく外から見れば、サナギが羽化する蝶のように身体を起こし、自分の後方で数人が走りこむような音が聞こえるなか、完全に鉄格子を抜けだしたアルマは答えた。

「後は『全部』キミに教えただ。」

『どうやって、日記帳を盗み出した』『その人物が誰か？』

なんて答えは、もう出ているだろう？」

電灯がついて、少し目がくらむ中、はっきりと映し出されたアル
マはニコリと笑い、そこから飛び降りた。

第四十九話

「そうだ、それで最後に二行くらい開けて、名前を書いて…。

そうだな、その前に白鳳学園男子生徒と書いて、その後に名前を書いた方がいいな。

そこで左人差し指で拇印を押しおしまいだ」

そうレフィーユに指を指され、自分の教室にて書こうとしているのは『始末書』である。

今回の起きた自分の失態を書こうとした時、レフィーユの隣にいた、セルフィは何かに気付いた。

「ねえ、アンタ、ちょっといい？」

「何でしょうか？」

「アンタ、さっき『初めて書くので、教えてほしい』なんて言うたけど、私が見る限りアンタって、けっこう始末書沙汰になるような事、結構してるわよね？」

言われて気付くというのは、こつこつ時だろう。

それに自分も一瞬、気付いたのだが、一瞬で元凶に気付いた、その元凶は短くまとめた黒髪を掻き揚げて言う。

「ぶつ、セルフィ、私を誰だと思っている？」

そうして、セルフィは呆れた。

「姉さん、職権乱用にもほどがあるわよ？」

「そう苛立つな。まあ、今回はかりはアラバも理由付ける意味を込めて格好くらいつけておけという事だ」

とりあえず、オズワルド達を納得させるような言い訳を考えておくより、始末書を書かせたからいいだろうと言う事でカタをつけてしまおうという魂胆だろう。

「ええと、国が違うのですから、年号は西暦でいいのかな…何月…ん日、この度、私、白鳳学園生徒シュウジ・アラバは今回、重要参考人であるカリフの首領、アルマを取り逃がしてしまいました。」

…ええと、これだけではさすがに格好がつかないですね」

「今後、繰り返さないためにどうすればいいか、書いたらいいと思うわよ？」

「なるほど、じゃあ…。」

心より深く反省をしますと同時に今後、このような事を繰り返さないために今回のように口頭で注意するだけでなく、その事態に最適な行動がとれるよう努力も怠らないようにいたします。

白鳳学園生徒、シュウジ・アラバ」

「アンタね、静かに書きなさいよ？」

「読者に分かりやすいようにしているのですよ」

「何をワケのわからない事を言っているのよ」

そう言いながら、出来た始末書を受け取り読み終えて言った。

「まあ、当たり前障りの無い反省文よね。」

私からしてみたら、アンタの迂闊な行動は控えてほしいのだけど
「？」

「それは出来ませんよ。レフィーユさんだって、この始末書はそ
れを面と向かって注意されるのを避けさせるつもりで書かせている
のですよ？」

「ふっ、鋭いな。」

始末書さえ出してしまえば、後はどうとでもすればいいさ」

「それはそれは感謝しております」

「感謝したまえ…だがな…」

今度はレフィーユが自分の書いた始末書を見て、その両端を掴ん
で真っ二つに破いて自分の机の上においた。

「だが、まだ、これでは受け取れないな」

「何ですか、私はせっかく書いた書類を破られて、地味にシヨ

ツクを受けているのですけど?。」

「ふっ、それはお前が全部話してないからだ」

そう言われ、セルフィは半分睨みつけるような態度でこっちを見た。

「そうなの?」

「レフィーユさん、私は全部を話しましたよ?」

「ふむ、そうだな、だがお前は私に何かを隠してないかと思っ
な。

それを聞かせてほしいのだが?。」

自然と周囲が緊迫する中、その緊張をやぶったのは…。

「レフィーユ、こんな男の相手をしている?。」

シャンテが中断するように、教室に入ってきた。

「こんな男とは、酷いですね」

「身を粉にして、私達、七色同盟の役にたてない役立たずが、今
回の首謀者を取り逃がしておいて何を言う。」

そもそも、今回のアレは、お前が思いついた提案だそうだな。

だから、エドワードは大変な目にあっただらう?。」

「ですが、その際にアルマさんは、私達を助けようとしたのですよっ。」

「あの女は日記帳を盗んだと言うのに、それを信じろというのか?」

「彼女は『日記帳を盗んでない』と言ってました」

「お前は名誉ある私達より、容疑者の方を信じているのか?」

セルフイが、さすがに言いすぎだと詰め寄ろうとしたが、その前に手で制して言った。

「そうですね、ただならぬ関係のオズワルドさんと、貴女達が名誉と言われましてもね」

「お前」

その一言で空気が一気に冷たくなる。

「私はその事に関して、少し話を聞かせてもらいたいのですが?」

「どうもお前は私達を疑っているようだな、それは七色同盟に対する侮辱だぞ?」

「それがどうしたのですか、別に構わないでしょう、レフィーユさん?」

するとレフィーユは、微笑みながら了承した。

「どうしてだ、レフィーユ、お前には七色同盟の誇りというものが…」

「私はこの男の事を信じているからだ」

「馬鹿馬鹿しいっ!?!」

シャンテは怒って、教室を出ようとした。だがまた教室に戻ってきた。

「シャンテ、俺もー、お前にいろいろ聞きたい事があったなー。

参加させてもらってもいいかなー?」

チエンバレンが入ってきた。

「チエンバレン、貴方まで…」

第五十話

「もともとと言えば、貴方が原因だろう…」

「また、それかよー。」

『貴方が婚約を破棄しなければ…』ってかー？

いい加減にしてくれよ、わかるだろー？」

「『血筋はもつと枝分かれするべきだ』、なんてそんなのは言い訳に過ぎない」

「ちょっと、二人ともやめなさい」

さすがにこう言った険悪なムードが見て取れたので、セルフィはシャンテをなだめていた。

レフィーユはシャンテからオズワルドに呼び出しを受けたと言っているので、この場を任せここにいなかった。

「なー、ミンが死んでんだぞ？」

だが、チェンバレンは意外と冷静だった。

「俺は、ミンとは国は違うけど警察で同僚だー。」

少なくとも、こいつを殺した犯人は知りたいーんだよ。

「ここいらで協力でもしてくれよー」

少し間延びした口調の中に、ずっしりとした重みのある声で聞いてきたが、しかし、シャンテは気にもしないのか『それで』と言った対応をとる。

「…あの事件が起きる前よー。俺、ミンに会ってるんだわー。」

『ちよっと、オズワルドに会ってくる』ってなー。

『口論』になったそうだな？」

警察らしく、事情聴取を進めるチェンバレン、シャンテをじっと見て言う。

「なー、なんでお前がオズワルドのトコロにいるんだよ？」

「何を証拠に…」

「複数の目撃証言を確認したんだぜー」

「お前は、私との婚約を破棄した人間だ…」

「そうじゃねー、そこでどうして事件前夜のその事を、オズワルドが多額の金で、その事を隠したって事だよ」

シャンテは言うつもりもないのだろう、黙りこむが少し聞いてみた。

「あの、念のため聞きたいのですが、レフィーユさんが一人でど

ここに行った時、貴女はどこにいました？」

「名誉を汚すような、お前に何も言うつもりはない」

そう睨み付けられるが、チェンバレンは言う。

「なー、それは駄目だ、警察としてその証言は認めねーって、権限があるくらい知ってるだろー？」

また黙るがしばらくして言う。

「あくまで私を疑っているようだな…」

オズワルドから出勤の連絡があったが、私は体調が悪くて寮の自室で休ませてもらっていた…」

「フン、それを照明してくれる人は？」

「いない…」

自然と周囲は怪しむのは無理がないだろう、しかし、シャンテは言う。

「…それがどうした、それで私が犯人だとも言うか？」

あくまで強気のシャンテにセルフイとチェンバレンは自分を見た。

「まあ、失礼でしょうね」

「物分りがいい、もう何もいない？」

そう言って、シャンテは立ち上がる。

まだ聞きたいことがあった、だが、その時に気になったのは自分を嫌に凝視していたからだ。

第五十一話

オズワールドに呼ばれた先には思わずため息をついたのは、そこが最初のホテルだからだろうか、それともあんな事件があったというのに平然とホテルとして機能しているからだろうか…

いや、後者は少し違うだろう。

「レフィーユ・アルマフィ様。

ようこそ、いらっしやいました」

ロビーの受付で支配人らしき人物が一人で迎えにやって来たりはしたが、いつもいるはずの受付には誰もおらず。

清掃員おるか、従業員の姿は一切見なかったからだ。

ふと、案内された高級料理店の扉を開ければ、そこで従業員は歓迎してくれたが、そんな考えは消える事がなかった。

「さすがにキミの名前を出せば、従業員にも『出勤します』言ってくれる人たちがいてね。

いやあ、さすが七色同盟のレフィーユ・アルマフィだ」

まるでこのホテルのオーナーにでもなったような態度で、オズワールドが従業員の中心にいた。

「ふつ、私は私だ。勝手に私の名前を使わないでもらおう。

こんな大層なトコロに呼び出しておいて、何の様だ？」

「そうカリカリしないでほしいな。その煌びやかな服には似合わないぞ？」

招かれた席に座れと言うのだろう、オズワルドは椅子を開ける。

だが、それを見て見ぬフリをして、その対面に座って聞いてみた。

「私は、お前が重要な話があると言ってやってきたのだが、何か進展があったのか？」

「それもよくない、すぐに任務に取り組もうとする姿勢は立派だが、そう根を詰めるな。」

あのサウスタンのようになってしまっぞ？」

「どっという意味だ？」

「そのままの意味だ。」

結局、全部あの男の言い分は誤解だったじゃないか？

我々が怪しいなどと…、しかも、こそ泥のアルマも逃がしてしまっことは、だからサウスタンは嫌いなんだ。

アルマに盗聴器をつけて損をした」

「ぶっ、じゃあ言わせてもらっがあの謎の集団に襲われたのが、

あのタンカーでの結果ではないのか？

その中でアルマが二人を逃がすために戦った。

そして、アラバとの会話は、アルマが『日記帳など盗んでない』
というのを、あの男に信じてほしかったからだ」

その時の会話をオズワルドと私は、アルマに盗聴器のピアスをつ
けさせて聞いていた。

「馬鹿馬鹿しい、どうして、あの男にそんな事を言う必要がある
んだ？」

「お前に言っても、信じてもらえなかったらどうだろうか」

「私は七色同盟の中心人物だぞ？」

「それがどうした？」

「あのサウスタンは何者なんだ！？」

「さあな、貴様より、あの男の方が魅力があったんじゃないのか？

何も進展の無い捜査に、何もしない警備員、何もしないお前、墓
守り（カリフ）が愛想を尽かしたのだろうよ」

「レフイーユ、随分とあの女の事を信用するのだな？」

「ふっ、私は任務に失敗したから自爆するような輩を信用に値し
ない」

そう言うと、オズワルドはため息をついたまま黙り軽く手を挙げてサインを送った。

少し警戒して、周囲を見回したが三人の女の従業員が厨房辺りから並ぶように立っただけなので、気になりもしたが、オズワルド答えた。

「まあ、今日は大事な話があるんだ」

「なんだ？」

「婚約を受理してほしいんだ」

「貴様は墓守りだけでなく、私も呆れさせるようだな？」

「どうしてだ、もう周囲にはそう伝えただ。キミは周囲にも迷惑をかけるつもりかね？」

「ただがマスコミ関係、財団関係だろう、そんな親同士が決めた婚約に何の意味がある!？」

声を荒げる理由はそれだけではない、このオズワルドという男は、様々な『接待』にお金をつぎ込んでいたのだ。

それこそ事業の経営に影響の出るくらい。

「し、知っていたのか、だが、その程度、キミとの結婚が出来れば……」

「情けない男だな」

「なんだと…」

「それくらい自分で何とかしてみろ」

これ以上、この男に何を言っても無駄だろう。

人間、呆れすぎると何も言えなくなるようで、私はそのまま帰ろうとする…。

「レフィーユ、『七色同盟の謎』というのを知っているかな？」

思わず立ち止まって、オズワルドを見る。その顔はまさに勝ち誇っているような気にくわれない表情だった。

第五十二話

「その中の一つに、ある出来すぎている話があったんだ。何だか解るかレフイーユ？」

「さあな」

「我々、先祖の最後の視察の時、核兵器のある基地を視察にやって来たのは出来すぎた話ではないのか？」

「というのだ、確かに場所は機密。そこを視察にやってきて、核のテロに巻き込まれるのだから、実に出来すぎた話だ」

「そうやってオズワルドは、水を口に含みジロジロと私を眺めて言った。」

「君の家系は、実に優秀だ。」

キミは治安部のリーダーにしても、妹のセルフィ君は天才機構インテリジェンス、親は財務高官に、他にも政治家、社長秘書…などなど。

二千前、七色同盟の結成時の君の先祖に至っては、とある国の防衛庁の長官だ」

「…オズワルド、要点だけを言え」

「レフイーユ、その防衛庁、どこの国だと思うかね？」

オズワルドの話は実を言うと、本当は察しがついていた。

「…フォルグナート公国」

だが、呟いたその態度に、勝利を確信したかのようににやついたオズワルドは言う。

「当時、七色同盟は犯罪者、その集団による核テロリズムを危惧していた。

しかし、核の排除、それは全世界、いや、核保有国にとって、減少はするにしても大きな課題だった。

実際、視察の許可など下りるわけも無く、『抜き打ち』でこそ視察にいかねばならなかったそうだ。

だが、そこで『事件』が起きた。

ここまで言えば解るだろう。

つまり、キミの先祖が核兵器のある場所を教えなければ、我々の先祖は死ぬ事はなかった」

「オズワルド、二千年も前の過去を、現在いまに引き込むな」

「だがキミの先祖はエドワードの先祖を巻き込み、そして、殺した事にもなる。それは決して軽い事ではないだろう？」

そして、そう言うとオズワルドはサインをこの店の従業員に送る。すると、にこやかにその従業員が小さな小箱を持ってきた。

「私はただキミとキミの家の名誉を守りたいだけなのだよ。」

「どうか、受けとってほしいな」

詳しく先ほどの会話を聞いてなかったらしく、笑顔で小箱を開ける。するとそこには指輪が入っていた。

だがその従業員は、さらに困惑した。

それは、私が『笑顔』だったからだろう。

「何がおかしい？」

「すまん、すまん、つい笑ってしまった。なるほど全てを知っているようだな」

そうになると性格なのか、素直に感想が漏れた。

「正直、見直したよ」

人間とは弱みを握られたら、それを利用しようとする輩は必ずいるからだ。

ただそうなるにあの時に気になった事が、思い出してきた。

「当然だろう、第一、キミの秘密を私だけだ。あのカリフとて…」

「おそらく知っていたのではないか？」

「なんだと？」

「オズワルド、どうしてアルマは『全部』『全て教えた』というのを、あの時、強調したのだろうな？」

「そんな事、わかるわけが……」

「オズワルド、どうして私とお前だけに内容を聞かせる事を条件に、アルマは自分に盗聴器を仕掛けさせたと思う？」

それは私とオズワルド、アラバが知っている事を話そうとしたからだ。

なるほど、そんな状況下、あの女の言うとおりどっちがいい男か私はわかった気がするよ」

そう言って、今度こそ立ち去ろうとすると、オズワルドに呼び止められた。

「レフイーユ、キミは家の名誉を汚すつもりか！？」

「ふっ、何を言うかと思えば、生憎と私の家では『七色同盟』の名誉はアテにせず。」

自分自身で別の名誉を勝ち取れというのが、私の家のやり方だな」

「レフイーユ……！」

「オズワルド、その同盟の名誉がなくなったら、貴様に何が残るのだ？」

この会話の意味が近くにいる従業員に気を使わせてしまったので、この場を沈めるために今度こそ立ち去ろうと最後に一言だけ言った。

「これ以上、何か言つと私はお前にその水を引っ掛けてしまいたい
そうだ…。」

いや、やめておこつ。

もしそうしたら、アイツの名誉に関わる」

第五十三話

コンコンッ

パソコンを打っているとノックがあり、誰だろうとドアにある覗き穴から外を覗き込む。

するとポニーテールが見えたので…。

ガチャ

チェーンを掛けてから開けると、さすがに姉妹である。

「ふん、無用心ね」

「チェーンロックを斬り落としておいて、『無用心』なんて言わないでくださいよ」

「アンタね、ノックして、チェーンロックを掛けるなんて失礼だと思わないの？」

そう言うとハルバートを消して『入るわよ』と入ろうとしていたので…。

「ちょっと待ってください」

「見たところ汚くなさそうだし、少しくらい散らかってても気にしないわよ。」

もしかして、如何わしい『回覧板』でも見てたのかしら？」

少しニヤついてセルフイは言うが、こう答えるしかない。

「言ったでしょう、捨てましたよ」

「前にも言ってたけど、ヒオトさんやらをすごく警戒してたけど、
どういう意味だったのよ？」

「昔、私の部屋、前に『レフィーユさんにアンタの落ち度を見つけてやる』と言われて拘束されて部屋を荒らされましたね。」

幸い、見つかりませんでしたけど…、食べ物も持ってかれて、多分
見つかったら、あの時、脅すだけですまなかつたとつくづく思い
ましたよ」

「ア、アンタ結構、サバイバルな生活してるのね…」

そう言ってセルフイは警戒しているのだろうか、周囲を眺め入っ
てきた。

「それで、何の用ですか？」

「ゲームを借りに来たのよ」

「冗談でしょう？」

何しにやってきたのか、原因は『エドワード』の事で来たのだろ
う。

「とうとう、言われてしまいましたからね…」

そう、エドワードは『言われて』しまったのだ。

「離婚を迫る女って、始めてみたわ」

「私もですよ」

飲み物の冷暖の好みを聞いて用意するその間、その時の事を思い出していた。

何もアイーシャも最初から、離婚を迫ろうとしていたワケではない。

だがその態度は、男の自分から見ても不機嫌という表現が生易しくなるくらいイライラしていた。

そういう人には、異性は近づいてはならないが、同姓は気を使う。

声を掛けようにも無視する、毎度のようにエドワードは謝る、そのサイクルも今回、レフィーユがいなかったからだろうか。

「そんな事で、頭なんて下げる事はありませんわ」

今思えば、これも彼女がいらないせいだろうか…。

「ちょっと、お前、ええ加減にせえや」

サイトが突っ掛かり、アイーシャの肩を掴んだトコロで近くにいたイワトがさすがに止めに入るが、だが、サイトの口は止まらない。

「お前のために、エドが謝ってんやろ、そんな事もわからんで…
ッ！！」

早足で近寄り『パンツ！！』とアイーシャはサイトの頬を張って
言った。

「言ったはずですよ、どうして親同士の勝手に決めた結婚でこんな
グズグズした人と居なければならぬの？」

なら良いわよ、そんなに気に入らないのなら別れますわ」

そんな事は冗談では言えない。

その時のエドワードの顔を思い出すとこっちまで曇って来そうだった
トコロで、紅茶を入れ終わったので戻る。

するとセルフィは最初の口約通り自分の棚に並べたゲームソフト
パッケージを眺めていたが、振り向くとセルフィは一切そっちの方に
目をやらなかったのだから、今回の事をそれほど気にしているの
だろう。

「ありがとね、アンタが間に入ってくれなかったら、もっと最悪
だったわ」

「見てられませんでしたから、というのもありますが、あの集団
に襲われた時、エドワードさんが頑張っていたのを知っているのは
私だけですからね。」

言っておかなければって、思ったのですよ」

そう言つがセルフイは『ふん』といつもの様にしていたがしばらく黙っていた。

「どうしたのですか？」

「…ホントは私の役目だったのじゃないのかなって思つたのよ」

第五十四話

「アンタさ、私が、前にどこにいたか知ってるわよね？」

「確か、天才機構インテリジェンスでしたか？」

「そう、私は姉さんを手伝うために白薔薇に入ったのよ。転校してたなんて、予想外だったけどね。」

それで私は白薔薇の治安部で精鋭とされている戦乙女ヴァルキリーに選ばれて
確信したものよ。

自分の実力は姉さんの助けにもなれる、なんて思ったりもしたわ」

するとセルフイは『ふん』といったものようではあるが、少し顔を曇らせて言った。

「でも実際はどうかしら、そういった役目はいつも貴方が横取り。」

…ごめん、言い方が悪かったわ。

何も出来ないでいる私がいて、いつも時間切れとばかりに随分とやってくれている」

「そんなに大した事をしてませんよ？」

「ふん、私からみれば謙遜よ」

そう言って、『立ってないで、座れば？』と言うので、先ほどパ

ソコンを弄っていたためかパソコンの前の椅子に座る。

「あのままだと、アイーシャは勝手にあの集団がいるタンカーに帰ってしまいそうだったじゃない。」

さらにその帰り道には、あの魔法使いがいるかもしれないのよ？

…何が可笑しいのよ」

「いえ、何でもありません」

「ふん、まあ、アンタが何か言ったおかげで、この学園の自分の部屋に帰らせたのだから。」

胸を張ってもいいわよ」

「それこそ買いかぶりではないでしょうか？」

「でも、リザルトはそんなものじゃない。」

その証拠に、私の方は誰かさんオズワルドの捜査妨害もあって今も捜査が進まないし、結局、私は何も出来てないって事よ」

するとセルフイは立ち上がり伸びをみせて、ベッドに仰向けに倒れこむ。

「それに引き換え、アンタはどうせアルマって人と通じてるのでしょう？」

「よくわかりましたね？」

「冗談のつもりだったのだけど…。」

ふん、それにしても、着実に私達より前に進んでいると思うわよ。
アンタですら捜査も進んで、気が利いて…。

私は、捜査も進まず、気も利かない…。」

確かにセルフイ自身、戦闘能力もさることながら、捜査能力もそれを指揮するのも申し分ない。

ただ、今回のように目立つ事があった、それは。

「経験が浅さは、経験で補うモノですよ。色んなモノを見るのに時間は掛かる当然でして。」

結局は時間が解決してくれると思いますよ?。」

すると倒れこんだままセルフイは、

「…じゃあ、アンタは色んなモノを経験したって事になるわよ?。」

こつちを見ずに聞いてきたので、彼女の表情はわからないがただ少し真剣さが伺えた。

「聞かせて欲しいわね。」

「知りたいですか?。」

「ふん、答える気なんて毛頭無いくせに…」

「そうですねよ、悪いですかセルフィさん？」

『ふん』と寝返りを打ち、そのまま自分に背中を向けて起き上がったままセルフィは答えた。

「でも、いつか話してほしいわね。」

アンタがどこでどんな目にあつたか」

「別に誇るほどのモノではないのですがね？」

「私は、貴方の言葉で聞きたいのよ。」

だから『いつか』よ」

すると携帯が鳴った、最初はセルフィの携帯だったが、続いて自分の携帯も鳴り始めたのでセルフィは振り返る。

そしていつものように答えた。

「それまで私はせいぜい、いろんな事を経験しておくわ。」

アンタに負けなくらいにね」

そう言ったまま携帯に出たので、自分も携帯に出る。

相手はアルマだったのだが。

セルフィが驚いた様子を見た上で思った。

『レフィーユが拘束された』

このアルマの言った言葉の信憑性はとても高かった。

第五十五話

「私事で面倒に巻き込んでしまって、すまない」

レフィーユが謝り態度を伺うと、その女性は構わずと首を振るが動揺は拭いきれてないのが見て取れた。

無理もない、立ち去ろうとした時にあの覆面集団に襲われ、切り抜けようと退避しようとしたレフィーユを止めるべく、人質に捕らえられたのだから。

タンカーの一室に連れ込まれての軟禁状態、ドアの外には門番が眺めている限りだが、二名いたので聞いてみた。

「ホントに事が済めば、彼女は無事に帰すのだろうか？」

すると『事が終われば、安全に帰す』という決まり文句には…。

支配人の身体に容赦なく『日本刀』を突き刺す光景が浮かんだのだろうか女性従業員は、さらに顔が強張っていた。

レフィーユにしても自分の顔すら見ないでそんな事を言うのだから信用しない事にして、彼女を人質に取ったリーダーらしき人物の事を考えていた。

あの支配人を斬りつけた事も気にもなるが何より気になったのは、そこで使用した東方術。

「日本刀…か…」

思わず呟くので、従業員は何を言ったのだらうかとこちらを向くが、何もなかったかのようにとりあえずレフィーユは思考を整える。

まずは七色同盟…、自分のアルマファイ家、スカーフの色は『赤』。

『黒』はオズワルド、『緑』エドワード、『青』はアイーシャ。

『オレンジ色』のチェンバレンに、殺害された『紫色』のミン…。

日本刀を作りあげ、その東方術を使った覆面集団のリーダー。

『藍色』のスカーフ…シャンテ。

その七色同盟を見守り続けた『墓守り（カリフ）』、アルマの存在も忘れてはならないだろう。

七色同盟の七人に、カリフに、そして、もう一つの接点、日記帳。

彼女自身、何が書かれているのかわからない、ただ『真実が書かれている』とされているその日記帳が盗まれたという事は確かに大変な事だろう。

だが、何故、盗んだという事だ。

そもそも一番、おかしいのだ。

レフィーユとて『漆黒の魔道士』が盗んだというのは信じていない。

しかし、そこが不自然である。

アルマとて『彼の事を調べて』いたのなら。

『ミン・チョンワという人が殺されたから、少し協力して欲しい』
と言えば、賛否はわからないがこれで伝わるだろうと思った。

だが、彼に関わらせようとしたやり方は、日記帳を見せて、その後『自分が決める』と明らかに託していたのである。

そしてアルマから出された、新しいヒント…。

『ボクが日記帳を盗み出す事なんて出来ない』

では誰が盗んだのか…。

彼女は『全部、教えた』という。

「なかなか考えているけど、考えはまとまったかな？」

そんな事を考えているとまるで息を飲み込んだようなうめき声と、
一際大きく何か打ち付けたような音が聞こえたので聞いてみた。

「ふっ、新しい疑問が浮かぶ始末だ、一つ聞いていいか？」

「なんだい、ボクが答えるとは思ってないくせに良くそんな事が聞けるものだね？」

『ひよこり』とドアにつけられた窓から顔を出したのはアルマだったので、レフィーユは言った。

「だが、一つわかった事があるから、一つだけ聞かせてほしいだけだ」

「なんだい？」

「カリフはミン・チョンワを殺害したのか？」

あえてアルマと言わず、組織全体を指して言う。するといつも通り。

「それはキミが決める事じゃないのかな？」

そんな事を言うので仮説を立てて聞いてみた。

「なるほど、では、その対応はお前は日記帳を『読んだ』からやっているのか？」

少しの間だったが、アルマが黙るといふ動作をした。

確信は無かったが『判断するのは、何世紀先の私たちの子孫に任せろ』と言って、読むことを禁止されていたのだから。

その日記帳には『他人に託す』という概念があったのではと思えたのだ。

「さすがに鋭い……」

するとしばらくして、いつも通りである。

「言ったと思うよ、それはキミが決める事だよ…」

すると横から、聞きなれた声が聞こえてきた。

「レフイーユさん、いました?」

平静を取り戻した、アルマは返答した。

「うん、人質も一緒、確認したよ」

まるで迷い猫を探す私立探偵のようなやりとり、門番二名を倒したとは思えないテンションで話していた。

第五十六話（前書き）

キーボード壊れる、バックスペースが打てなくなった

第五十六話

「まあ、とりあえずその人質はこっちで預かるよ。」

「こっちで責任を持って無事に逃がすから、安心してほしいな。」

そうは言うが、この従業員、突然やって来たアルマに動揺を隠せないのだから。

「安心しろ、この女はあそこで倒れている奴らよりかは信用出来る、君をちゃんと逃がしてくれるだろう。」

そういつとようやく腰を上げるとこっちを見た。

「私はやる事があるのでな。残念だが、一緒には行けない。」

そう言って、後をアルマに託し人質を見送ると、まだ見えない気配に呼びかけた。

「隠れてないで出てきたらどうだ？」

すると小冊子を片手にプリントを読みながら漆黒の法衣を被った男がやって来た。

「どこに旅行中だ？」

「しおりに地図で、私はこんなトコロ、間違っても旅行はしたくありませんね。」

「地図…まさか、この艦内全体のか？」

レフィーユの興味を引いたのか手を伸ばしそれを受け取ると、感心しながら言った。

「よく手に入ったな？」

「ネットの検索サイトで検索したら、載ってましたよ。」

さつき確認しながら、こちらにやって来たので、この地図は正確でしょうね…。

…どうしました？」

「お前も顔が笑っているから聞かせてもらうが、どうして会社やこういった建物、ビルというのは『撮影』が禁止されているというのは知っているな？」

「確か、泥棒や最近の犯罪者達に潜入ルートを計画されるのを防ぐためでしたね」

「そうだ、この通り、ネットで内部構造を記載した地図など掲載はもつてのほかだ。」

私が地図がほしいと言ったら、ここの案内役は『正式な手続きをしてくれ』と言った割に、ここの防犯意識はどうなっているのか、頭が痛くなつて来てな」

「それだけ、今の人に組織や企業に忠誠を誓う人が少なくなつてきているという事なのでは？」

まあ、私としてはここの構造には手を焼きましたから、大助かりなんですけどね。

セルフィさんにも、渡しておきましたから、もう迷う事はないですよ?」

「ふっ、ますます修学旅行だな」

そう微笑んで地図をじっと眺めている彼女の姿に今になって気付いた。

「どうした、ああ…」

チャイナ服を模したパーティドレスに施された装飾は見るだけで、オーダーメイドというのが解る。

そんな状態で彼女は足を組んで読むものだから、腰の辺りまで見えそうになっていたのがレフィーユも自分の視線で気付いたのだろう。

静かに身なりを整え、彼女は聞いてきた。

「それは何だ?」

「オズワルドさんが、今日日付けで重大な発表があるから、ここで発表しようとしてこのタンカーで働いているみんなに送信されたデータをアルマさんが、小冊子にしてくれたモノです」

今度は小冊子を受け取り読み始め、そして、静かに聞いてきた。

「重大な発表とあるが、お前は何だと思う？」

「…さあ、結婚を発表をするとかでは？」

「そういう嘘はよくないな、だったら何故、この地図をデータではなく紙として持ってきた？」

「セルフイさん達には『帰ってきていない』と連絡が入ったそうですが、私にはアルマさんから貴女が『拘束された』と連絡が入りましたからね。」

今までの状況を考えて、こつやつて極秘裏に行動する方を…」

「ふっ、それがお前の『しまった』という表情か…。」

「そうだ、婚約も周知となっている。でも、私が賛成などしていない。」

「オズワルドにも格好があるからな、そんな状況で結婚など迫れるわけも無いが、今日、急に『結婚をする』と言おうとしている。」

「その意味がお前にもわかるはずだ？」

「何か重要な事を握った…。」

「お前は知っているはずだ？」

「多分、彼女はブラフ（はったり）を言ったのだと思う、しかし感じ取れていた。」

「気付いていたのですか？」

「お前は私が『それだけか？』と聞いた時、『それだけだ』と答えた。

しかし、アルマはお前の事を調べる事が出来る人物だ。私の事など、調べるのには手を焼く事もないだろう。

改めて聞かせてもらう。

オズワルドは私と結婚したために、何を発表しようとしている？」

「貴女の、正確にはアルマフィ家のした事でしょうね……」

『誤魔化せばいい』とこの時、まだ思っていた。

でも誤魔化すにも気付くだろう、黙ってしまえばさらに気付くだろう。

しかし、彼女にしても同じ事だった。

そして、自分と違うのは……。

「利用すればいいものを……」

第五十七話

「利用ですか？」

「そつだ、あんなにいい情報が転がっているといつのに、どうして利用せんのだろうなと前から気になっていてな」

「まるでアルマさんが前に言ったような事を聞いてきますね？」

「なら『お前なら良いと思っている』と言えば、お前はどつする？」

突然、真つ直ぐ見つめてそんな事を聞いてきた。

しかしレフィーユとて、次に自分の言う事を知っているのだろう。

「そう言われて、する人だと思いますか？」

予想通りに台詞を言うと、ゆっくり答えた。

「だがお前とて数々の事件に出会った。この状況を利用する輩など山ほど見てきたはず、どうして利用しない？」

「大した理由ではないですよ」

「それでもだ。

それでも、聞かせてくれないか？」

「日記帳を読んだからでしょうかね」

するとタンカーが動き出し、景色が動き出した。

「…そういえばお前は読んだ人間だったな」

「まあ、誰が書いたのかわかりませんがね。読ませてもらいました。

やっぱり凄い人が書いたのだからって、思える内容でしたよ」

「ふっ、それはそうだろう。」

今の同盟は気に入らないが、核兵器の排除、戦争の撤廃など今の七色同盟は訴えは出来るだろうが、実行など出来もしないだろうからな

「そうですね、内容もそうでした。」

核テロの危険を訴えて、考えたり、そんな中、なにより始めから読ませてもらって、わかったのはこの人は『足掻いて』ました」

「ふっ、それは一生懸命とは違うのか？」

「…いえ、足掻きです。」

何よりその考えは全世界の反対意見だという事も理解した上で。

そこで悩んで、ずっと訴えるたびに何が悪かったか反省したり…。

やっぱり出来もしない意見だったとか、諦めかけたり…。

さっきの事を心無い議員に言われて怒りを覚えたりとか

「まるで、子供の日記だな」

「確かに、ですが、これを書いた人は何より頑張ってる。だから、他の六人も着いていこうと思ったのでしょよね。

例え…」

一瞬、声を詰まらせてしまい、周囲を見回すとレフィーユはこちらをみたまま聞いて来た。

「どうした？」

「いえ、何でもありません。

要するに私も足掻いてみようと思ったのですよ」

するとレフィーユは微笑んで答えた。

「かなり遠回りする男だ」

「ようするに私は貴女とは対等でありたいのですよ。

言いたい事を言って、怒りたい時に怒って泣いて…。

一人として、貴女と向き合っていたいのですよ」

するとレフィーユは笑いだすので少し『ムッ』としたがレフィーユは言った。

「やれやれ、このまま一緒に脱出をしようと思ったが、どうやら残らないといけないようだな」

そう言うと、先ほど気絶させた二人が目を覚まし、驚いたままこちらに掴み掛かるが、

「手を出すな!！」

そう一喝したまま、先に行けと促したので、理由を聞くことすらが、微笑みを浮かべて答えた。

「心配するな、私も少しばかり足掻いてみようと思っただけだ」

第五十八話

レフィーユと別れ、今の場所にたどり着くのは、隠れながらのせいかしばらく、時間が掛かり。

「そこ、いいですか？」

会見を見下ろしていたセルフイが、一瞬、驚くが場所を開けてくれたので隣で一緒に見下ろす事になると、そこには異様な空気が充満していたので、なんとなくではあるが事を察せた。

会見とは事前に何を発表するのか知らされて来るものである。

オズワルドとて、話せるワケがないと思って今回の会見に臨んでいたのだろう。

その表情はエドワード含めた四人も同様だった、そんな中、とうとう会見の順序も守れなくなりマスコミの一人が聞いてきた。

「あ、あの間違いない事なのでしょうか？」

「それはわからない、しかし、当時、その先祖はフォルグナート公国防衛庁の長官だったという事は、核兵器を有した基地の場所を知っていたという事だ。」

つまり、一番視察してはならない場所を視察に向かっていたというのに止めなかった事。

それは…。

私の先祖が核兵器のある場所を教えたという可能性が高いという事だ。

そして、私の家が七色同盟の名誉に否定的になっているという事、それを考慮すれば間違いないだろう」

辺りがどよめく、こうなるとマスコミの質問は止まらなくなる。

「では、黙っていたという事なのでしょうか？」

フラッシュを浴びる中、もう一人、別のマスコミがそんな心無い事を聞いて来た。

「つい先ほど思い立ったと言いましたが、家族の事を考えた上で
の発表なのでしょうか？」

「どうして、そんな事を考えなければならない？」

「貴女の勝手でご両親が関わっている企業、妹さんの事を考慮した上で思い立ったのでしょうか？」

「ふっ、どうやら変な伝わり方をしたようだ。少し経緯を話そう
じゃないか。そして、みんなにも考えてもらいたい」

すると彼女は一旦、大きく深呼吸する頃にはマスコミ、いや、この会場全体が静まり返る、そんな中、ゆっくりと答えた。

「『七色同盟の名誉などアテにするな』」

子供の時、昔それを聞かされた時、どうしてだろうと思いましたが、それは『自分の力で何とかしろ』と『解釈』はしていた。

だが、残念ながら私は、年月を重ねる度、様々な人に出会い、色々な事件を経験をして。

この解釈は違うのではないのだろうか」と『疑問』に思った。

そして、今回とある男が『真実』を伝え…私は…」

一瞬、オズワルドを見たような気がしたが、レフィーユは構わず答えた。

「正直、憤慨しか覚えなかった…」。

このままずっと、この事実を知った人間は、その男のように脅迫し続けるのだろうか？

私だけではなく、両親、妹、親類を脅迫し続けるのだろうかとな。

私の家はご存知の通り、浴に言うお金持ちと呼ばれる家、そして、家系だ。

確かに私の言った事で、影響は何かしらあるだろう。

…しかし…！」

少し強めに言ったようだが、余りにも緊張が周囲に張り詰めていたせいでマスコミ一同は、一斉に驚いた。

「脅す事で成り立つ人間関係など、許されてはならない」

すると『さて』と、視線を下ろし先ほどのマスコミを含め聞いてみた。

「残念ながら、私にこの判断の正しさなどわからないだろう。

どうだろうかみんな、私は間違っているだろうか？」

レフィーユの問いに、マスコミは一斉に視線を外していく、当然の結果だったと思った。

そんな重要な判断など出来る訳がないのだから。

だが、そんな中を彼女は構わず聞いてきた。

「さて、今度は私が言う番だ、アルマ、お前はどっと思っ？」

第五十九話（前書き）

接続不良で、書き直される拷問…

セーブはこまめにね

第五十九話

レフィーユの視線は的確にアルマを捉えていたらしく周囲のマスコミはまるで大きな穴が開いたように遠巻いた。

それを見た彼女は笑みを浮かべ、もう一度。

「アルマ、私は間違っているだろうか？」

「何をしている、確保、確保だ！！」

オズワルドが焦りながら、嬉々として先ほどの事を誤魔化すようにアルマを指を指すので、レフィーユが素早くサーベルを作り上げて投げつけた。

「かつ！？」

それはオズワルドの頬をかすめ、後ろの椅子に当たってゆっくり倒れるので、オズワルドは『確保』の『か』を言ったトコロで姿勢を硬直させ、周囲もまた静かになった。

そんな中、アルマが拍手をしていた。

「レフィーユ、何度も言うようだけど残念ながらボクは質問に答ええる事なんて出来ないんだよ。」

とりあえず、拍手は贈っておくよ」

そう言ってアルマは懐に手を通すので、周囲のマスコミはフ

ラッシュを焚いていた。

だが、興味はあるものの遠ざかっていく、そんな感じだろう、そんな中でアルマは何かを取り出した。

「ようやく、これを読むまでには至れたようだ」

日記帳を手にしていたので隣にいるセルフィは驚いて自分を見たが、すぐに視線を下ろすとアルマはレフィーユの壇上の前に立っていた。

そして、レフィーユに差し出すと思いきや。

「さて、誰に読んでもらおうか？」

品定めをするように、六人を眺めると、先ほどの投擲に腰を抜かしたオズワルドが立ち上がったが、アルマは一切顔を向ける事なく、ある人物に近付いて答えた。

「シャンテ、キミに黙読してもらおう」

受け取りながら驚いた様子でシャンテは聞いてきた。

「…どういう事、何を企んでる？」

「心配する事はないよ。キミには読む権利が出来た。

だから、こつやって手渡しそうとしてるだけだよ」

「…なら、これはオズワルドが読むべきだ」

「そうは行かない、レフィーユ？」

そう言い終わるのが早いか、レフィーユはサーベルを作り直してオズワルドに突きつけたのでオズワルドは怒りを浮かべたままだった。

「レフィーユ、キミは何をやっているのかわかっているのか？」

「確かに私も日記には興味はある。だが、アルマの選択にはとても興味があるのでな」

「そういう事、良いかい声を出しちゃ駄目だよ。」

『黙読』するんだよ」

場内が騒然となる中、気が付くとセルフィは自分の方を見ていた。

「機嫌、悪そうね？」

「おかしいなと思いましてね」

「私にとっては、あの日記帳がアルマの元にあるのがおかしいのだけど、アンタが持っていたんじゃないの？」

「それはここに潜入した時に偶然出会った際に、少し貸してくれと言われたから返したのですが。」

その時、アルマさんが、日記帳を手渡した人物が、覆面集団の元締めだと言ってくれたので、承諾したのもありますけど……」

セルフイはまた息を呑んでシャンテを見下ろした、だが、すぐに視線を戻して聞いてきた。

「じゃあ、何がおかしいのよ？」

「どうして読ませる必要があるのかなと思ひまして」

「どんな組織にも派閥はあるものでしょう。」

カリフっていう組織と、あの覆面集団。

どちらも七色同盟を守るっていう組織なのよ？

なら、自分の組織の正当化を訴える証拠みたいなモノがあれば強力なカードになる事は間違いないわ。

日記には、それが書かれていたから、アルマは読ませようともしているのじゃないの？」

「セルフイさん、私はその日記帳を読んだ人間なんですよ？」

はつきり言わせてもらいますが…」

そついい終わると、シャンテは『そこ』に触れたらしく。

「そ、そんなバカな…」

普段、感情を表に出さない彼女が、感情の揺れが見て取れた。

そして、ここになってアルマは狙っていたのだろう、笑顔でシャ
ンテに聞いてきた。

「さあ、どうする。」

この会見も含めてそうだけど、確か、キミはオズワルドに『この
日記を発表すれば、オズワルドの地位は安泰する』と言って計画し
ていたそうじゃないか。

「読んだ上で聞かせてもらっけど、発表していいモノだと思うかい
?」

第六十話

セルファイが耳に掛けていた通信機で、

「そう、現場レベルを2上げて、4で対応、何かあってからじゃ遅いわ」

とシャンテの動揺からさすがに何か起こる気配を察したのだろう。

セルファイ自身も手を広げて、ハルバートを作り上げる。

現場レベル4というのは治安部で言うところの『武装して待機しろ』という意味である。

迎撃の警戒レベルとするなら、攻勢の現場レベルだと思ってもらっても構わないと、以前、レフィーユから教わった事があった。

レベル5は『指示を待つな現場対応しろ』

今はセルファイが『アタック』と声を掛けさえすれば、各位が治安維持のために行動を開始する。

当然、その事に関しては『そんな事も知らなかったのか?』と呆れられたが、攻撃は最大の防御というのだろうか、現場をよく知ってる自分にとって、セルファイの考えは正しいと思えた。

そして自分はさすがだなと少し顔を老け込んだ感じがした、無理も無い。

彼女は同級生とはいえ、飛び級で自分より年下なのだ。

そう考えると少し笑顔になり、後は彼女に任せようと思ひ。

「ちよつと、待ちなさい」

ぶすっ！！

「あいたっ！！」

ハルバートを背中に突き刺してきた。

「痛いじゃないですか？」

さすがは姉妹である。

突き刺す位置は姉と一緒になので、背中をさすっていると、悪気もなく答えた。

「ふん、今どき抜き足、差し足で逃げるなんて、アンタはこのどろぼうがっこうよ？」

「だったら解りにくい例えはやめてくださいよ。」

『どろぼうがっこう』なんて絵本、『ウィキ』にも載ってませんよ？」

「ふん、だったら直接調べなさい。」

でもアンタ、あのシャンテの動揺を見て何とも思わないの。一体

あの日記帳に、何が書かれていたのよ？」

「なにも日記帳に書かれているのは、日常の悩みだけではなかったという事です」

「…どういう事よ？」

首を傾げてセルフィは聞いてきたが、何かしら思い当たる節があるのだろうか自分が今にでもここから立ち去ろうとしているのに下の様子を眺めたまま自分の返答を待っていた。

だが中々、事実というのを口にするのは難しいので、考え込んでいるとセルフィは『やっぱり』と答えをいった。

「その時のテロの実行グループだった？」

「…正確には、この著者が計画したそうです」

どうして2000年の間、日記帳が読まれる事がなかったか？

みんなが読まなかったから読まないで至れた、今まで体裁もあるだろう。だが、金庫にあるという事は封印されているのと同じ意味があったのだ。

それをどこかしら、セルフィは気付いていたのだろう。

少し空気が重くなったので、つい誤魔化すように慌てて取り繕ってしまっ。

「ま、まあ、日記の内容で『アルマフィ』と出てましたから、貴

女の先祖が計画したワケではないですよ…」

しかし、そんな事を言っている途中で意味の無い事のだろうと頭を痒くなるのを感じた。計画に乗ったのは間違いないのだから。

セルフイは心なしか下の方を見る頻度が多くなる、もう会場は沸点に達しようとしているのだろう。

「どこに行こうとしているのよ？」

踵を返した自分にさらに飛び掛らんとする体勢で、セルフイは言うので、これだけは言っておこうと思った。

「興が冷めました、帰ります」

「ふん、帰るって、それを信じれると思う？」

少し笑みを浮かべ身構えなおすが、身構える事無く両手を広げて。

「セルフイさん、今の敵は私ではないでしょう。貴女には全体を動かさない責務があるはずですよ。」

冷静な単独犯より、動揺した組織犯…。

どっちが対処しやすいか、わかるでしょうか？」

振り下ろした、鋭い刃が首元にすれすれで止まる。

「今度は、いい取り繕い方を覚えておく事ね」

セルフィは少し微笑んだような気がしたが『ふん』と振り返り、元の位置に戻って行く。

自分も離れ、ドアをしめると一際大きな声が聞こえた。

「アタックー!!」

第六十一話

セルファイらしき掛け声と同時にレフィーユは、サーベルをシャンテに振り下ろす。

「ちい!！」

シャンテ側の攻勢に出るタイミングが完全にズラされたとは言え、シャンテは持ち前の身体能力でその一撃を避け、身構え直しながら周囲、自分の作り出した東方術『日本刀』を眺め、悪態をついた。

その武器を作り出すのを、二人は待っていたのだろう。

レフィーユも、アルマにも指摘されたので、オズワルド配下の警備員の全員が治安部と一緒にマスコミの避難に協力していた。

こうなると誰かを人質に取ろうと、シャンテはエドワード達を見ながらもう遅い。

「させるか!！」

凜々しく、しかし、獰猛に飛び掛るレフィーユに阻まれ、アルマが完全に進路を塞ぐので苛立つように一撃を加えるが軽がると受け止められ、とうとうその場を下がるしかなかった。

何故なら、シャンテの周囲に広がる光景は排除しようとその場に潜ませた、部下に呼びかけもしたのだが事前に取り押さえられる始末。

まだ、この会見場は取り囲みはしていたが、カリフ率いる、セル
ファイを含めなだれ込んだ治安部数名、シャンテは完全に後手に回っ
ていたのだ。

レフィーユと目が合い、再度、飛び掛るシャンテ…。

レフィーユもそれに応じようとした。

その時、彼女の目が感情を失っている事に気付いたので、彼女は
慌てて思い切り後ろに跳び下がる。

彼女の付加能力を味わいながらも、距離を取ってしまったのでシ
ャンテはすぐさま近くの出入り口に駆け出していた。

「そこを動かすな!!」

その付近に偶然にも配備されたイワトが戦斧を手に果敢にシャン
テに挑むが…。

「駄目だ、下がれ!!」

レフィーユの叫びと同時に目が感情を失い、再度、彼女の付加能
力が作動した。

「ぐあっ!!」

横に受けようとしたイワトの肩を切られ、片ひざを付いた。

幸い構わずシャンテは逃げたので駆け寄って、他の治安部員が戦
っている集団の輪を見つけてそこにレフィーユはイワトを引きずり

込んだ。

「大丈夫か!？」

『だ、大丈夫、油断したわい』と明るく言うが、肩から出血が制服を濡していた。

「どいてて…」

出血はしてるけど、どうもあの『付加能力』は、それなりに問題があるようだね、軽く切られてる程度ですんでるよ」

アルマはそう言って、手際よく止血を完了させて、レフィーユはアルマに聞いてみた。

「カリフは全滅したのじゃなかったのか？」

「あの事件から、呼び寄せようとして、今日やって来たばかりだよ。怪しまれず、入国出来たのは四人だけど腕が立つのを選んだつもり。」

それよりレフィーユ、日記帳は？」

「すまない、シャンテが持って行った。オズワルドは、それを追っっていた」

「じゃあ、追うんだ」

「しかし…」

「言ったはずだよ、ボクの部下の四人は今日日付けでやって来たんだ。」

所詮、四人というのもあるけど、誰が身内なのか頭に入っていないんだよ。」

突入の際、事前に従業員は逃がせるような手はずは整っている事だし、エドワード達もここを出たんだ、ここでボク達が彼女を探すより。」

キミが追う方が手間が掛からない。」

今はここを防衛をする、ひと段落着いたら追うよ。」

それを聞いたレフィーユはイワトから通信機を受け取り言った。

「各員、タンカーに残ったマスコミの脱出を最優先にしてくれ、なお、今回、警備員とカリフと共同でその任務に移れ、カリフは味方だ!！」

そう言っつて、そのまま通信機を自分に取り付け、レフィーユはセルフィに視線を送るとセルフィは交代するように空中から舞い降り、その背後を駆け出した。

「さて、囲まれてはいるけど…。」

腕前を見せてもらおうかな、セルフィ君」

「見くびってもらってほしくないわ、こんな包囲網どうって事はないわよ。」

「まあ、そうだろうね…」

包囲されたという環境の中、治安部員や、カリフ、警備員が緊張している中、アルマは頭領らしく笑っているので、ハルバートをくるくると回す。

そして、柄の辺りで床をトントンと叩く、

「なるほど、こつやって微調整してるんだね？」

「ふん、感心してないで相手の『首の辺りにある』から、とつとと行きなさい」

普通の会話だが、セルフイの言葉には見えない足場を教える能力があるので、アルマはそれに飛び乗って感心しているとセルフイは聞いてきた。

「ねえ、聞きたいのだけど？」

「なんだい？」

「あの魔道士も言っていたけど、これって、凄い事なの？」

すると感心していたアルマは呆れたように、

「キミがそう言つと、嫌味に聞こえるよ」

そう言つてカタールを構えて飛び掛つて行くので。

それを見送るように、身構えるとセルフィの通信機に通信が入った。

イワトはレフィーユに通信機を取られたのを、思い出し頭を抱え始めたセルフィに聞いた。

「エドワードはそれを追ってるそうだけど、アイーシャがはぐれたそうよ」

第六十二話

「アイーシャー!!」

エドワードはタンカー内を駆け回っていた。

艦内は未だに騒がしかったが、すでに治安部が動いていて避難体制は整っていたらしく、脱出用ヘリのプロペラの音が自分の居る場所を轟かせた。

「…しろ、エドワード。」

…えてるのか、エドワード、応答しろ」

おかげで自分に手渡されたインカムから、通信が入ったのを聞き逃しそうになったが、何とか返信した。

「あつ、はい、すいませんガトウさん、プロペラの音で少し聞こえなくて」

「そうか、ならいい。だが一人でいいのか？」

「大丈夫です、それに私がやらないと」

「すまん、俺はお前に通信機を渡す事しか出来なかった、避難を優先しないといかんからな」

「けが人もいたのですから、ガトウさんは間違ってますから」

「だがな、お前はそうは思っていないても、アイーシャは……」

「こんな時に、そんな事を言ってもらえません」

「だが、好きじゃないのだろうか?」

「……」

「事実は変わらないのだぞ?」

「ですけど!?!」

一際、大きく声を荒げたので、怯んだレオナに言ったエドワードのいう事に耳を傾けた。

「別れるのは仕方ないのかもしれませんがよ。」

でも、こんな時にホントに何もしなかったら、私はホントに最低じゃないですか!?!」

普段、聞くことの無いエドワードの声に思わずレオナは黙ったが、少し考えながら悟ったのか、

「…わかった、だが、気をつけておいた方が良いのかもしれない」

「ガトウさん?」

「実はあの後、甲板辺りの中継車の周りにいた覆面たちと魔法使いが戦っていたのでな」

「…漆黒の魔道士ですか？」

「ああ、幸いすぐに離れたから、俺はその隙にその中継スタッフも避難させたのだが、あの魔法使い、何かを探していたようだ」

「何か…を、日記帳なのでは？」

「いや、それはおかしい、お前も日記帳がどこにあるかを見たはずだ」

「おそらく、シャンテさんが持っていると思うのですが？」

「だったら、雑魚に構う必要はないだろう」。

まあ、暴れてくれたおかげで交戦する事無く避難させる事が出来たが…。

エドワード、気をつけるよ。とりあえず武装はしておけ、終わったらすぐに行くからな。

危なくなったら逃げろ、いいな？」

そう言っつて、通信が切れると、ここで自分が東方術で武器を作りあげてなかった事に気がついたので慌てて、サーベルを作り出す。

すると辺りが静かだから先ほどのやりとりがあったせいか、一人だという事に余計に気付かせ彼を緊張させた。

「…!!」

しかし、それでも走り出した。

怖いからじゃない、彼の想いがなんとか走り出す行為を完成させていた。

「アイーシャー!!」

彼はもう一度叫ぶ、だが、その度に先ほどからある言葉が突き刺さる。

『もう別れましょう』

今、考えても酷い仕打ちだった。

公衆の面前で、自分の力の無さが招いた結果だろう。

歯を食いしばって、自分は耐えた、今までの人生の終末。

でも…、

それでも…。

角を曲がるとエドワードはさらに緊張した。

「おや、エドワードさん、奇遇ですね？」

そこに立っていたのは、初めて目にする西方術『闇』。

エドワードは当然、慌てながら身構えるが、その漆黒の魔道士は

両手を広げながらエドワードに聞いてきた。

「私は貴方の敵ではございませんよ？」

そんな事を言われて、誰が信じるだろう。

エドワードは再度、彼を確認するように眺める。

自分の背丈は余り高くないが、その魔道士も同じくらい。しかし、闇の法衣のためか彼の印象は大きく感じられたので、エドワードは恐る恐るを誤魔化すように聞いてきた。

「だ、だったら、私はある人を探してしまして、そ、そこをどいてもらえないでしょうか？」

すると魔道士は少し考え込むような態度を見せ、道を開けたので、ホントに道を通ったのか疑問に思いながら横切ろうかとした。

その時である。

「お待ちなさい、私も人を探しておりましてね。

先ほどから、ここに至るまで個室の全てを探しているのですが、見つからないのですよ？」

この時、何故か魔道士がアイーシャの事を探していると不意に思い、誤魔化す。

「あつ、私は関係ないですよね？」

「その割には、私が扉を開ける度に同じような音がしてましたけど、貴方も誰かを探していたのでは？」

濁った声で何故か逃げの口上をあっさり見破った魔道士は、あるドアに目を付けていた。

自分もこの階にある個室のドアを片っ端から探りながらやって来たので緊張感が増したのだが、魔道士はそのドアを注目するように壁にもたれ掛かっている。

まるで自分が誰を探しているのか、わかっているような態度だった。

その時の自分は嫌な人だと、魔道士を睨みつけていたが少し違って見えたので黙っていた。

今までアイーシャに散々呆れさせたせいか、これだけはわかった、彼は呆れていたのだ。

どうしてこんな表情をするのだろうかと困惑していると、

「エドワードさん、少し話をしませんか？」

態度はそのままに視線は自分に向けて唐突に話を始めた。

第六十三話

「凄い事になりましたね？」

私が日記帳を盗んだという騒ぎが、実はそれが殺人事件で、そんな中で彼の誘拐……」

「彼……？」

「ああ、知りませんか、アラバと言っていました……、おや、ご存知でしたか。」

まあ、その時、私も影にいたので色々と教えてもらっていたのですよ。」

「私達の事とか、今回の事とかでしょうか？」

「そうですね、まあ、あの後、彼と同じように誤魔化されましたが、どうしてそんな手間のかかるような真似をするのだろうかと思つてましてね。」

「そんな事を言つても、ホントに状況を教えただけというのもあると思いますよ？」

「まあ、それもそうなんですが、エドワードさん、影の組織と言つのは影で動くから影の組織なんですよ。」

あの時だけではないですがね、一般人はともかく『漆黒の魔道士』を巻き込むのは、あまりにも不自然ではありませんか？」

「そういわれて見れば、今、日記帳はアルマさんの下にあるので
すから…、下手すれば貴方も仲間と思われてしま…いますよ…ね」

一瞬怒らせたかなと思ったが、また呆れるように魔道士は話を続
けた。

「どうして世間で『墓荒らし』と証された集団が、そんな危険を
冒してまで私に接触を図ったのか、おそらく、それを聞こうとすれ
ばアルマはこう答えるでしょう。

『それはキミが考える事だよ』

と…。

これも影の組織として、気味の悪い対応の仕方なのですが、日記
にも同じような事が書かれていた事なんですよ。

『この世に聖人君主はいない。』

正しいかどうかを判断が出来るのは第三者だ』

…似ませんか？」

どうやらこの魔道士は、自分が思っている以上に思慮深いようだ
った。

それは頷いている自分が、本当にこの人は悪い人間なのか少し疑
問に思ったほどだった、そんな中、静かに答えた。

「そもそも覆面集団や、カリフ、七色同盟、ミンさんの殺害と、この事件は複雑そうに見えますが、これは七色同盟の内輪もめみたいなモノです。」

何故、第三者、カリフはどうして私に判断を委ねたのか…」

再度、考え込んで、その魔道士は『あるドア』を見つめていたので、

「複雑な事情が、あった…」

妙にコレだけは、はっきりと言えた。

多分、魔道士も『気付いて』いるのだろう。

自分を方を見つめて、まるで気を使うように答えた。

「…あの日記帳はどうやって盗まれたのか、わからないままでした。」

金庫もダイヤル式、監視カメラが働いていたとはいえ、その日記は盗まれました」

そこで自分の頭の仲で『影の組織』という台詞が、とある人物の行動を思い浮ばせた…。

初めて会ったと言うのに『自分達の事』や『自分達がどんな魔法が使える、どんな付加能力があるのか』を、あの時、影の組織が人懐こく色々と答えた、アルマの行動。

「…あの金庫、番号さえ合えば女性でも開く事が出来るそうです。そこで…」

彼は調べたのだろう。

レフィーユの『残像』、チェンバレンの西方術『風』、自分の『武器の伸縮』、ミンの西方術『土』、オズワルドの『武器の湾曲』、

そして、シャンテの『幻覚』と、まるでアルマの言った順序を真似ているかのように聞こえてきたが、最後は狙っていたのだろうか、

「アイーシャさんの東方術『小太刀』、その付加能力は『物質の分析』だそうですね。

その能力って、どういう事なのでしょうかね？」

言わせようとしているのだろうか、何故かこの時、彼が気を使っていたのだけがわかった。

だから『気付いていた事』を話そうと思った。

「…タイミングはおそらく、結婚式の時だと思います。

披露宴の際、途中で立ち上がって…、どこかに行っていましたね」

「おかしいと思わなかったのですか？」

「思いました。

でも、何かあつたら警備が気付くと思つてましたから、それに私は正直、嬉しくて…」

「ですが、彼女は貴方の事を…」

「わかつてます。」

ですけど、どうすればよかつたと思ひますか？

まず親に相談しました、でも、それを世間に大々的に公表され。

『私の息子は、立派な夫になろうと日々努力をしている』

なんてアイーシャさんの心境すら知らないで、偉そうな親が嫌いになりました。

そこで色々な人に相談しようと思えば、そんな人ばかりが私の周りを…困りました」

「なるほど、そこで頼れたのはレフィーユさんだけだったという事ですか」

恥ずかしい話だった…。

自分の周りには友達がいけないという告白と、さらに国外に居る人物にこんな話を持ちかける。

これ以上のない恥ずかしい話、だが、魔道士はじつと自分を見ていることに気付いた。

「な、何か？」

「ああ、いえ、なかなかうまくいかないモノだと思ひましてね。

頑張つて、認めてもらおうとして、足掻いて、でも、何が足りないのか…。

いつの世も人は苦悩なんてもものには気付きもしないのでね」

「貴方にも、そんな事があつたような言い方ですね？」

ふと、そう感じたので聞いてみたが、魔道士が正面、自分に向かい合つて立っていることに気が付いた。

「エドワードさん、では、貴方は何しにやつて来たのですか？」

確かに言つとおりだった。

自分がやつて来ても、彼女は動かす事は出来もしない。

「わかりません…」

「…おそらく、あの日記帳はアイーシャは捨てたトコロを見ていたカリフが回収して、私の手に渡つたのでしよう。

でも、あの日記帳を手にしたせいで『漆黒の魔道士わたしが日記帳を盗んだ』になりました。

私は自分を利用した人間を許しません…」

その時、何故か『許さない』と言ったわりには憎悪を感じ取れなかったが、

「エドワードさん、貴方は何をしなければいけませんか？」

「……」

それに何も言えないでいた。

「私は貴方の手に握られたモノは何か、知っているつもりですよ？」

しかし、私が弱いからだろうか、そう言って促したのだろうか、彼の顔はわからなかない。

でも、背中を押されたような気がした。

自分はここで戦わないといけないのだ。

「行きます！ー！」

第六十四話

その頃、私はシャンテを見つけていた。

大きく広い部屋ではあったが、窓をずっと眺め、彼女は動かないままなので、ここからでは何をしているのだろうかわからない。

だが、ドアを少し開けてその光景を眺めている自分くらいは気付いているのだろう、後ろは向いてはいたが『見られている』という感覚が本能的に察知できた。

なので遠慮なくドアを音を立てて開けてさらに近づくと、シャンテは振り返りもせず冷徹に聞いてきた。

「部下に足止めを頼んだつもりだが、随分と役に立たないものだな…」

「ふっ、部下をつまく指示するのも、自身の能力と思うがな？」

「…オズワルドはどうした？」

不機嫌にしたまま不意に近いタイミングだったが、やはりあの会見の時、自分が日本刀を突きつけ、そのまま逃走したのだから、気にはなっていたのだろう。

「その場でへたれ込んでいる」

「そうか、それがいいのかも知れないな。」

ところでお前はこの日記帳に何が書かれているのか知っていたのか？」

「いや、知らん。」

だが、お前が逃げたという事はおおよそ『都合の良く無い事』が書かれているのだろう。

例えばあの核テロの本当の実行犯は誰であるのかな？」

「そこまで知っていて…」

「ああ、オズワルドがあまりにもしつこかったから、そう教えてもやったが？」

「お前…」

私に対して憎悪が膨れあがっていくのがわかった、今にも飛び掛って来そうな雰囲気だったが、辛うじて理性が『コレは挑発だ』と教えてくれているのか、こちらを睨みつけたままだった。

「私は何が間違っていた？」

冷静さを取り戻そうと必死なのだろう、状況を整理するように呟き始める。

オズワルドと同じように、ただ性質は違っている。

「血、肉、骨、私は全てこの同盟に捧げて来た、この名誉のために、それを守るために私はどんな汚い事もやった。」

何が間違っていた？

私の意図も知らず、ミンもチェンバも裏切り、拳句にレフィーユ、お前まで…。

この名誉は、大事ではないのか？」

「いつまでもそれにすがり続ける、まるで『墓守り』だな」

「カリフと一緒にするな！！」

何が間違っている、確かにオズワルドは自分の抱えている事業に失敗した。だが、それを助けようとするのは間違いか？

チェンバは私の元を離れ、ミンに至っては、オズワルドがそんな事のために、名誉を盾にするようなら、『自分の事業の資金をまかなう為に、レフィーユと結婚しようとしている』とマスコミに公表するなど…。

何故、みんな助けてやらない！！

同盟とはそういうモノか！？」

「それがミンを殺した理由か？」

「当然だ、私はあの名誉を守るためなら、どんな事でもやる！！」

「ふつ、『どんな事でも』か…、それで殺人が許されるのであるなら、所詮は他人の作った名誉だ。」

そんな名誉、私はいらん、捨てたほうがマシだ」

「貴様…なんて事を…」

確かにチェンバレンの言うとおり、今の彼女はこの名に『執着』
していて、今だからだろうか、その様は『異常』だった。

今にも彼女が飛び掛かってきそうな雰囲気。

だが、防御する気など、どこにもわかかなかった。おそらく、今の
自分は、今の彼女より冷静なのだろう。

それに…

「私はお前を責める事は出来ん…」

「なに…」

サーベルを消して、椅子を取り出して手袋をすると、シャンテは
驚いてずっと自分の方を見ていた。

「私は事件を解決する事で有名にはなれはした。だが、もし、私
がそうしなかったら、お前は どうしていたのだろうな？」

「お前の家系は代々の名家だ、そんな事があるのか？」

「ふっ、仮定の話だ。」

だが、そんな状況下で私の家が破産の危機に瀕したとしても、お

前なら…助けようとするだろうな」

「当然だ、それなのに何故…」

そう、全ては七色同盟のために…。

たった一つの思いだけでどれだけ、ここまで進めるのだ。

「…みんな裏切る」

「誰も裏切つてなどいない」

「私は、七色同盟のため…」

「確かにお前は全てを捧げている、それは責める事が出来ん」

「オズワルドの事業を助けようとしたのだ」

「だが、誰を助けるのが大事なかを間違えた」

何も言わず、シャンテは私の方をずっと見ていた。

この様子なら、誰の事を言っているのかわからないのだろう。

「どうして、エドワードを守ってやれなかった？」

するとシャンテは半ば笑いながら言った。

「物事の大事を見間違えてもらっては困るな。オズワルドは生計に関わる失敗をしたのだぞ？」

お前だって知っているだろう、それにエドワードは『特別な人間』だ。

これからも生きていける」

「わからないのか、特別であっても、このままでは人としての尊厳すら失いそうなのが…」。

エドワードはいつもそれに足掻いていたのだぞ？

…いつも歯がゆかった、下らん同盟であったが、私は、こんなに足掻いて、頑張っている男すら助けられんのかとな。

何が『名誉』だ。

何が『選ばれた人間』だ。

そんな私は、お前を責められないだろう。

だが、貴様は何を守っていた!？」

シャンテに抱えられていた日記帳が驚いた拍子で、床に落ちる。

私は睨みつけたまま、シャンテに近寄ると向かってくるつもりだのだろうか、距離をとったが目的は違う。

日記帳を拾い上げ、読んでいない調子でパラパラと捲りながら窓を開けながら答えた。

「そして、先祖もこんな事のために日記帳を残したワケではないだろうよ」

…日記帳を放り投げた。

「貴様ああ!!」

慌てて追いかけるように窓を見るが、幸い日記帳は甲板の上に落ちていた。

シヤンテは睨みつけるように私を見たが、恐怖は無かった。

「これで先祖も関係ない、掛かって来い!!」

第六十五話

サーベルが、もう何回目になるのだろう。

その形状を強調するような確かな落下音が響いていた。

「…つつつつ！？」

何を言っているのかわからないが、あれはエドワードの声だろう、何を言っているのかわからないが普段、あんな声を出す事もないので正直、驚いた。

だが、それは壁一枚を挟んでいるからといえば理由にはなるが、見下ろす先の『彼女』は耳を塞いでいたのが大きな理由だろう。

おかげで窓の隙間から気づかれる事もなく潜入できたが、言わずにいれなかった。

「酷い女…」

アイーシャは『ピクリ』と驚く様子を見せたが、すぐに取り繕う。

「どこが、あの男が勝手にやってる事じゃないの。酷いのは貴女の方だと思えますわよ？」

ゴミ箱に放り込んだはずの『アレ』を回収なんかするから、あの魔道士の手に渡って騒ぎになったのでしょうか？

所詮、こんな名誉なんて、騒ぎを起こすようなタネにしかありません。

「せんのよ」

すると歓声が辺りを包んだ。

そろそろ治安部の連中もあの妹の指揮もあり、収束に向かっていくのを理解しながら言った。

「キミは、向き合えもしないクセに……」

「何を言うと思えば、ワタクシはただ『人間』として生きていたかっただけですわ。」

みんな名誉に振り回されてましたわ、お父様もお母様も、みんな、みんなみんなみんな……。

エドワードの結婚なんてもっと嫌だった。

だから、投げ捨ててやりましたの」

「……」

「お怒りかしら、なら、いい機会ですわ。」

あの下郎に殺されるより、カリフに殺されるのなら、私も格好がつきますわ」

「……」

「出来ないでしょうね。」

ほら、ごらんなさい、貴女も名誉は大切ですよものね」

もう一度、サーベルを落とす音が聞こえる中、私は彼女に近づき、その腕を掴んでいた。

「ちよ、痛っ、離しなさい!!」

無理やり引つ張りドアを開けて。

「ア、アイーシャ!？」

そこにアイーシャを投げ捨てる時エドワードは驚きながらこっちを見るのでアイーシャは睨みつけていた、しかし、すぐに表情を戻して答えた。

「さすがカリフ、いい判断してますわね」

そして、こちらの返答を待たずに、アイーシャは言った。

「エドワード、この方が代わってくれそうよ」

「ア、アイーシャ、何を？」

何度、倒され、何度、床に叩き付けられたのだろうか、エドワードの衣服や頬の辺りも少し青くなっていた。

それを見てもアイーシャは言う。

「よく戦った方じゃない、貴女もこれで格好くらいだったわ。」

後は代わりなさいよ、これで誰もが証明するでしょう。

『エドワードは勇気のある人間だ』なんて、さあ、これでいいの
でしょうカリフ？」

俯いたままのエドワードは、聞いてきた。

「…アイーシャは？」

「別に構わないでしょう。」

どうせ貴方とは離婚するのだし、貴方の知ったことではありません
んわ」

いまだにエドワードは俯き黙ったまま、天井を見上げていた。

「そんな事、言ってるけど…」

そんな彼に聞いてみた。

「まだ、戦える？」

魔法使いはサーベルをエドワードの前に軽く蹴った、今度はアイ
ーシャが驚いていた。

「何：言ってますの…適わないのが、見て解らないの？」

それを掴み、エドワードは身構えて気配を伺う、しかし、そんな
事など、させないと言わんばかりに闇の指弾の群れがエドワードの
眼前に広がる。

さすがに戦闘経験の浅いエドワードも気付いたのか、魔法使いに向かつて飛び掛って行く事を選んだ。

しかし、魔法使いの砲弾はマシンガンではない。

床に当たれば飛沫がまっていた、例えるなら、墨汁の砲弾。

ただ、夕チが悪いのはその飛沫がエドワードに掴みかかって来て、柔道で言う『大外刈り』を完成させていた。

「うあー!!」

投げなど人間同士でやるから、どう転ぶのか何となく理解できるのだろう。

「いた…」

積み重ねてきた西方術の細部コントロール。

それはまるで車に跳ねられたようにエドワードを倒し、受身を取り損ねたのか右腕を押さえていた。

「もう適わないというのはわかったでしょう、もう、おやめなさい、エドワード」

「いい加減にしなよ」

少し感情の高まりを感じながら、制したがアイーシャは今度こそ睨みつけて答えた。

「だったら、おやめなさい。」

エドワードが『特別』だという事くらい、ご存知でしょう?」

「だから?」

手を上げようかとも思った。でも、それは無駄な事くらいは目に見えていた。

するとエドワードは、もう一度、立ち向かおうとしたのだろう。

今度は懐に飛び込んだのまではよかったが、彼の手に捕まって顔を壁に叩きつけられた。

第六十六話

もともと勝ち目のないだった。

エドワードの攻撃をほぼ避け、ようやく近寄れて攻撃が出来たとしても、その攻撃を魔道士は完全に受け流す。

そして、武器を手にして『人に切りつける』という事にまだ躊躇もあるのだろう、戸惑ったエドワードは簡単に反撃を許してしまう。

決定的な実力の差、経験の差。

今までエドワードがなんとか有効に出来たのは、彼の攻撃に対して魔力による防御くらい、つまり『防御本能』でダメージを軽減させるくらいだったのだが…。

とうとう、それも尽き。

エドワードは壁に顔面を叩きつけられたせいで、脳が揺れたのか出て来た鼻血を拭わず、ずっと蹲っていた。

「ほら、格好をつけるからこうなりますのよ」

武器を形成するのが、精一杯になっていたエドワードに、アイーシャは冷たく言った。

「格好つけければ私が離婚の事を考え直してくれる、なんて思っていましたの？」

「ねえ？」

「お生憎様、私はそんな貴方が…」

「どうしてエドワードを見て言わないの？」

ふらつきながら何とか立ち上がったエドワードを、アイーシャは見ずにそんな事を言っているのだから、それを指摘するとアイーシヤは黙った。

「ねえ…彼にとって、七色同盟って何だったのかな？」

エドワードに、ゆっくり視線を移しながらアイーシャに聞いてみた。

「実をいうと、ボクはあまりカリフっていう組織に誇りなんて持つ事が出来なくてね。」

周囲は組織内で恋愛なんて普通にするわ、真面目に守る気なんてあるのかとかさ。

まあ、そんな状態だから後で酷い事になったんだろうけどさ。

その後にキミが日記帳なんて捨てたモンだから、もしかして、こんな奴らを守らなければならぬのかななんて思ったモンでね」

そこまで言うと、エドワードはようやく落ち着いて来たのか、もう一度、身構えるが闇の散弾をもろに受けて倒れた。

「多分、エドワードもさ、キミが思った通りの事を思っていたん

だと思っんだ。

家系や伝統、しがらみ。

そんなのに挟まれたらさ、あんな性格になったのも仕方がないんだと思っよ。

でも、そんな中で、そんな中でさ。

エドワードが一番、七色同盟という名前に足掻いていたんじゃないかな？」

「そうね、一番、足掻いててみっともないったらありませんでしたわ」

「頑張ってもない人間が、頑張ってる人間の事を悪くいうもんじゃないよ」

するとアイーシャは睨み付けたが怖くはなかった。

「いつも頑張っていたんだよ。どうして、そうやって眼を背けたの？」

さっき言ったよね。

『特別だから』って、それで彼は何もしなかったと思っ？

エドワードが嫌いだなんて言っただけど、嫌いになる前にもっと相手の事を見てあげてもよかったんじゃないかな？

そこくらい、もう一度考えてほしかったよ。

ついでになんで、さっき手を掛けなかったか教えてあげるようか、そんなキミなんか殺しても意味ないからだよ」

そう言つと、呆れ気味にサーベルが自分たちの近くに転がっていた事に気が付き、拾いあげてエドワードに近寄った。

「随分とやられたモンだね？」

「す、すいません」

もう一度、エドワードにサーベルを手渡して聞いてみた。

「やっぱり代わるうか？」

返答は当然、首を振る。

「でも、敵わないよ？」

現実を見てモノを言ったつもり、しかし、ここまで戦う事が出来る人間だということ。

好きな女性のために頑張る。

こんな男のために、ただその強敵を倒すのにどうすればいいか、何か言つてやりたいと思った。

「頑張れ……」

肩を叩く、それだけ、自分の力量不足を思い知る。ただ、ここま
でだった。

「ありがとうございます…」

何もしてやれないのが歯がゆかった。だが、それでもエドワード
はお礼を言っ、構う事なくサーベルを握り閉める。

「…そう、頑張れ」

一瞬、魔道士の『自声』が聞こえた。

エドワードには気のせいだと思えたのだろう、誰が自分を倒せと
応援する人がいるモノか。

「余所見はいけませんよ？」

そう言っ、魔道士の声は濁った声に戻っていた。

だが心なしか微笑んだかのようなトーンで、法衣を広げ再度、砲
弾を形成し、エドワードに襲い掛かせた。

なすすべも無く、はじけ飛び床にうつ伏せるように倒れる中、息
を荒げるエドワードは呟いていた。

「敵わない、わかってますよ…」

顔面に砲弾の直撃を浴びて、エドワードは転がるがすぐに立ち上
がる。

「だから、こうしてするしかないじゃないですか…。」

いつも、私は恵まれていた。

七色同盟だから…。」

息切れは途絶える事は無い、もう限界はとっくの昔に超えていたので、音量が下がって聞こえなくなった。

しかし、もともと足に来ている身体を起こして、ようやく目標を定めたのか叫んだ。

「私だって、好きな人のためなら死ねるんだ!！」

絶叫だった。

それに驚いたのか魔道士は反応が遅れた。

エドワードが今までにないくらいに、魔道士に接近を許す、しかし、エドワードの攻撃は見事に受け止められて、サーベルを握った手の関節を極めながら放り投げられた。

駄目か…。

その時の私の感想はそうだった。

だが、今度は私が驚く事になった。

「うおおおお!！」

すぐさま立ち上がり、エドワードは歯を食いしばり、一気に魔道士の距離を縮めたのだ。

思わず魔道士は右手で拳打を放とうと、身を屈めた瞬間だった。

「!？」

私より、魔道士はもっと驚いたと思う。

彼が拳を放つ、その瞬間に相手を『見よう』としたのだろう。

エドワードの攻撃の間合いをすでに図っていたのか、予測なりをしていたせいか『コレは無い』と思っただろう。

魔道士の驚いた思考が続く中、エドワードは前に踏み込む、踏み込んで、踏み込んで、踏み込んで…。

ゴウッ!!

凄く鈍い音がした。

「ぬおっ!？」

エドワードの頭突きが丁度、法衣の開いた眼の辺りに激突して、意外な攻撃に魔道士の歪んだ呻きが聞こえた。

仰け反りはした。

だが、これで倒したというのは程遠い。

私は実戦を積んできたからだろうか、それはわかる。

そして、ここでエドワードの弱点、躊躇してしまうのだろう。

でも、それでも…。

何か言えないか、私の気持ちもととと溢れ出した。

「いけえええ!!」

「うわああああああああああああああああああ!!」

声を裏返しながらエドワードは絶叫と共に前に進む。

一秒も無い、攻撃にしては申し分ない絶妙のタイミング。

それをエドワードは最後の力を振り絞り、サーベルを振り下ろす。

渾身、全力、完全な殺意、そして、誠意を持って…。

その時を、私は確かに見ていた。

魔道士は、その一撃を真っ直ぐに見つめ。法衣を剥ぐっていたのを…。

凄まじく閃光が散った…。

どれだけ魔力を防御本能を要すれば、どれほど躊躇しなければ、

これほどの火花が散るのだろう。

魔力による防御本能は、自分の身体に傷をつけないための行為と言っている。

ただ、痛みが残る。

反応に遅ければ、怪我だつてする。

その一撃は、明らかに命を奪えるほどの一撃だった。

本来なら、闇に練りこまれた法衣で受け止めた上で、防御本能を作動させると聞くが彼はただ受け止めていた。

そして、先ほどの火花が生み出した煙の中、魔道士は片ひざをつく、彼は私を見ていた。

その視線の意味が何となくわかった私は、少し胸が切なくなった。

多分、今まで魔道士は本気で倒しに掛かっていたのだろうから。

エドワードはいつも頑張っていた、彼は授業を通して知っていたのだから。

そして、特別扱いをされる事がとても嫌っていた事も、おそらく知っていたのだ。

「……」

私は自然と会釈の代わりにまぶたを閉じた。

彼は特別な人間であれ、特別扱いされるのが得に嫌う。

彼は『それ』を選んだのだと思う。

膝をついた体勢は身を屈めるといふ体勢に変わる。

「! ! ! ! !」

目を閉じる中、魔道士の『唸り』が聞こえた。

そりゃそうだ。

一体、誰がこんな役を引き受けてくれるのだろう。

誰が好き好んで、こんな人と戦わなければならないのだろうか？

感謝をこめて、目を開け、その一撃の行方を見送る。

「ぐへっ」

エドワードの鈍い声。

魔道士の道腕が、エドワードの腹部を持ち上げるとばかりにめり込ませていた。

彼は、背中を向けていたので、彼の表情はわからない。

でも、その魔道士は、体力を使い果たした、エドワードを確かに受け止めていた。

第六十七話

壮絶だった戦いの敗者と勝者がいた。

その図式どおり、どちらかは立っており、その片方はそれにもたれ掛かるように気を失っている。

そう、これはもともと勝ち目の無い戦いだった。

「私はいつも、特別扱いされていた…」

しかし床に寝転ばせた時、まだエドワードは意識はあったのだろう。魔道士の足を掴んでよじ登って行く。

振り切れるほどの力、でも魔道士は黙ったまま彼をずっと見つめていた。

「嫌だった、でも、私一人ではどうにもならなかった…」。

そんな時に現れたのが、あの人だった。

彼女は私と同じ思いを持っていた。

でも彼女は私と違って、うじうじしてなかった。

羨ましかった、次第にどうすれば彼女の隣に居られるか思うくらいだった…」

一手一手、歯を食いしばり組み付くようによじ登り、ようやく目

線が同じ高さまで合おうとした時、エドワードはよろけて倒れこも
うとしたが、魔道士が一步、後ずさって抱きかかえられていた。

「守る…守るんだ」

意識も薄れてきたのだろう、構う事無く、エドワードは両手で抱
きかかえていた魔道士の首を絞めていた。

「……」

首を絞められていると言つのに、苦しむそぶりを見せず、ずっと
エドワードを見ている魔道士。

しかし、力を込めれば、簡単に振り払える程度に絞められていた
のだろう。

彼は首を引つかかれながら、それを外して意識があるのかどうか
わからないエドワードに答えた。

「…そうですか、では、アイーシャさんには手を出さない方が良
さそうですね」

そして彼は、確かに答えた。

「…私の負けです」

聞こえたのかどうかかわからないが、エドワードはそれに答えるよ
うに今度こそ潰れるように倒れ込んだ。

『後は任せる』と言わんばかりに、彼は私を見る中を叫ぶ人物がいた。

「どうして勝ったのは貴方の方じゃない!？」

アイーシャだった。

「結構なダメージじゃないですか？」

おどけながらも胸元に手を当てるが、アイーシャは納得のいかな様子だった。

「例え一撃でも、私は…これ以上戦えませんよ」

「おふぎけにならないで…」。

私は何のために日記帳を捨てたのよ…」

アイーシャは魔道士を殺意を持っていたのだろうか、睨みつける態度に迫力が増していた。

「ふざけているのは、貴女の方ですよ。」

貴女がどれだけ死にたいのかわかりませんが、一度、生きていて欲しいと考えてくれる人の気持ちを考えますか？」

すると倒れたままのエドワードを見た。

「貴女の事が好きだと言ってもくれるのに、貴女は真っ直ぐ受け

止めようもしない。

貴女のために戦ったのですよ。

貴女はそれを笑う権利はどこにあるといつのですか？」

「それこそ笑い草ですわ！！」

貴方も『戦えば、考えが変わる』なんて幼稚な考えを持っているの？」

すると、魔道士の気配が変わった。

最初は怒りだと思った。だが目が衰れていた。

「彼は知ってますよ。だから、黙って戦う事しか出来なかったんじゃないですか？」

すると彼は遠くを眺めた、その視線の先は私の背後だったが、その意味はしばらくして気づく事にした。

「そこまでよ」

「遅かったですね？」

歪んだ声でそう聞いてくるので、どんな気持ちで言ったのかわからないのだろう。

「アンタ……」

彼がエドワードを倒した事が、すぐにわかるような状況下セルフイは彼を睨みつけていた。

運が悪いのだろうか、ただ、彼はこの一言を覚悟していただと思えた。

「許せない」

一体、彼はどれくらいこんな目に合っていたのだろう。彼は慣れすら感じさせる態度だった。

「どうする魔道士、これでボクとセルフィを敵に回す事になるけど、キミは逃げた方がいいんじゃないのかな？」

『逃げる』という意味を遠まわしに言つると、彼はエドワードを一瞥して私に背中を向けた。

「そうですね、もう勘弁してもらいたいですよ」

そう言っただけ立ち去りながら、おそらく、これが彼の本音がもれていた。だが素直に尊敬が出来た。

「待ちなさい!」

セルフィが追っかけようとするが、これくらいの事はさせてほしかった。

「駄目だよ。今はエドワード達を運ぶんだ」

そう言っただけ、セルフィに力の抜けたアイーシャを任せて、エドワ

ードを担ごうとした時、何かに光っているモノに気付いた。

彼に取り付けられていた通信機だった。

「もしもし、こちらアルマ…」

一瞬、驚いたのか、反応されると厄介なので一方的に話す事にした。

「アイーシャを搜索する際に漆黒の魔道士に接触して、エドワードは今、話せない状態なんでね。」

怪我を負ったという事だよ。

今…」

すると今いる現在地を言うと、次にコレを言うのは気が引けた。

「…勘違いしないでほしいな。」

勝ったんだよ。

もう一度、言わせてもらっけど、エドワードは勝ったんだよ。

漆黒の魔道士に…」

第六十八話

あれからどれくらい時間が経ったのだろう。

時間の感覚がなくなるほど静まり返っていたタンカーに、ヘリがやって来て、少し騒がしくなったのでそんな事を考えていた。

だが、それも少しの間である。

また飛び去って行く音を聞いていると、警戒独特の半ば駆け足ぎみの足音が聞こえた。

身を潜めて、動向を見ているとそれは戦乙女ヴァルキリーだった。

「クリア!!」

もう敵もいないと思われているが、怪しいものを見つけ出さんとクリアリング搜索行為の凜々しくもはつきりとした声が響いていた。

おおよそこの動き出したタンカーにもう覆面集団はいないのなら、後は魔道士を探し出した方がいいと考えるのは、時間が経って落ち着いてくると誰かが考え付くのは無理も無い。

「レフィーユさん、異常はありません」

「そうか、悪いが、今から私は一旦離れる、お前達で探索の続きをしてもらえないか？」

この服では、どうも動き辛くてな。

「ここは私の部屋のようだから、着替えくらい用意してあるだろう」

「しかし隊長、怪我をしています。お一人になっては危険です。

護衛に一人残します」

「隊長ではない。

それに三人一組、そのヴァルキリーの基本を崩すな。

お前達のクリアは私が保証している。

お前達が完璧にクリアを敢行すれば、私は大丈夫だ」

そう言っつて、3人にクリアリングを再開させるように促すと、レ
フィーユは咳払いをした。

「もういいぞ？」

しかし辺りは未だに、静まり返っていた…。

「おーい？」

逃げ込むとすればここしかない、今までの経験が教えてくれて
いたのだが…。

「どうしました？」

それは普通に先ほどの入り口からやって来た。

「……」

少し両者が見つめる中、やはりレフィーユが先に言った。

「先ほど私が『完璧』と証したクリアを避わしてやって来たお前を褒めるべきか、それとも私が居なくなったから、そのクリアが杜撰になった部下を責めるべきか、お前はどっちがいいと思う?」

「私がいたのは一個先の部屋でしたからね。」

貴女の話し声が聞こえたので、話をしている最中に一個前の部屋に隠れ直しただけですよ」

「そうか、なら、さっさと入ったらどうだ?」

「着替えるのでしたら、少し待った方が良くないかと思ひましてね」

「ふっ、あれは口実だ。」

「こうでも言わないと、あいつ等が離れてくれるとは思わなかったのではな」

そう言つて、さっさと部屋の中に入るとレフィーユが少し高そうな机の上に招き。

そこに座りながら法衣のフード部分を取つて、レフィーユはそこにあつた冷蔵庫を開けて飲み物を用意して来て向かいに座り、じつと見つめて言った。

「エドワード、意識が戻ったそうだぞ？」

要点だけを言うので、彼女にも伝わっていたのだらうと思いいながら飲み物を口に行っていると、レフィーユは言った。

「すまない、手間を掛けさせた」

おかまいなく、首を振るがさすがにエドワードが気にはなったので少し黙る。

「だが、そこまでする必要は無かったのではないのか？」

「それは私にはわかりませんよ。」

あの時、エドワードさんは確かにアイーシャさんを探していました。

ですが、例え見つけたとしても、アイーシャさんは動く事はなかったと思いましたがからね。

セルフィさんは、うまく事態を切り抜けてくれるでしょう。

貴女はシャンテさんを倒すでしょうが…」

「ふっ、随分と過大評価だな」

「あなた「ごういう時の貴女は不思議とあいつた場面で、しくじるような女性ではありませんでしたからね。」

ですがエドワードさんは…。」

だから、せめてアイーシャさんが別れると知っても、戦うって事を選ぶ人だった事くらい教えてあげたかったですか…」

やはり、やりすぎたかと思いましたが。

ただそこにいた当人同士しかわからないが、あの時、確かに手加減してはならない空気が確かにあったのだ。

しかし、これ以上、言うと言いつい訳になってしまいそうだったので、飲み物を口にするため息をつきながら肩をすくめながらレフィーユは言った。

「それは初めて聞いたな、やはりそうなるか？」

「そこまではわかりませんよ」

一撃、一撃、彼の攻撃は確かに躊躇もありました、未熟でもありませんでしたが、どれも本気で自分を殺しに掛かった剣であったのは間違いは無い。

その一撃にどんな気持ちがおめられているのか、エドワードしかわからないのだ。

「その選択はエドワードさんがするべきですよ」

そう言うしかなかった。

「そんなエドワードから、伝言だ」

「なんでしょうか？」

「『やっぱり強かった』だそうだ」

そう微笑みながらレフィーユは、手袋を机の上に畳んで置いた。おそらく、彼女の方はその通りに勝負を決したのだろう。

しかし、腕の辺りから血が出ていたのに気付いた。

「大丈夫ですか？」

「ああ、シャンテの『幻覚』を倒すまで、間合いを計っていた代償だ」

「幻覚？」

「お前も戦った事があるからわかるだろう、シャンテの目の事だ」

「ああ、あの感情の無い？」

「そうだ、あの女が付加能力を発動させる際に、目に感情が入らなくなるのだ。」

おそらく嘘の攻撃するイメージを思い浮かばせながら、同時に、本当の攻撃を繰り出すからなのだろうな。

こういった場合、どう対処するか限られてくるだろう？」

『体当たりして、怯んだところを切り伏せてやった』と言った彼女に……。

「…どうした？」

自然と笑みがもれるのは、言わないで置こうと思った。

「それで、今、どうしているのですか？」

「チエンバレンが介抱しているよ。」

あの男も色々と言いたい事もあるだろうしな」

聞くとところによると、チエンバレンがオズワルドの相手をしていたそう。結果はチエンバレンの圧勝、オズワルドはさっさと救助されていたらしい。

「あの西方術者嫌いのオズワルドの性根だ、しばらくは立ち上がれんだろうよ」

「嬉しそうですね？」

「まあな、これでアイツも『永久に』私に言い寄って来ないのなら、気分も良くなるモノだ」

強調するのだから、よほど気分が悪かったのだろう。

「ふっ、さて、どうしたモノか…」

「チエンバレンさんの事ですか？」

「いや、それも気になるが…一つ、聞いても構わないか？」

第六十九話

「一体、あの覆面達は何者だったのだ？」

そう言っつて、レフイーユは対面に座つて飲み物に口つけて聞いてきた。

「あの女と戦う前に、覆面たちが立ちふさがつて来たのでな、それで戦う羽目になったので感じたのだが、少なくともあれらには信念があつた。

お前には、結局、このままでは最後までわからないままになつてしまいそうだから聞いてみたのだが、ホントは知っていたのではないのか？」

「いえ、心当たりくらいですよ。

確かに思いがなければ組織は成り立ちませんし、ましてや、自爆をするほど信じれるモノがあるのですからね。

まるで裏で七色同盟を支え、陰で栄光を見守っていた組織……」

すると彼女も同じ答えに至つたのだろう。

「カリフか……？」

すると怪訝そうになりながらも、顔をしかめつつ聞いてきた。

「しかし、シャンテは否定していたが？」

『カリフと一緒にするな』とでも言われたか、ドレス姿の麗人が長いまつ毛を伏せながら、考え込むので、自分は想像の範囲ではあるが答えを出す事にした。

「カリフという名前には、二つの意味があったでしょう?」

「慕守りに慕荒らしだったな」

「そんな二つの意味を持った名前なんて、危うくて使う気にはならないと思ったのですが…」

「ふっ、どうした、最後まで言ったらどうだ?」

「あまり想像でモノを言うモノではないのですが、レフィーユさん。どっちだと思えますか?」

「どっちが『慕守り』で、どっちが『慕荒らし』だという事が、アルマの言つとおりなら、アルマが『慕守り』という事になるが?」

「そこでレフィーユさんをお願いがありますが、アルマさんに聞いてみてくれませんか?」

「無理だ、どうせはぐらかされるだろう?」

「今じゃないと、今だから試してみたい事があると言ってもですか?」

「どついつ事だ?」

「シャンテさん、今、チェンバレンと一緒にいるのですよね？」

今、アルマさんがどこにいるのかで、答えがわかる気がするのですよ。」

そうしてレフィーユは、まず、セルフィに連絡を入れた。

するとアルマはエドワードのすぐ近くにいたので、すぐに代わってくれた。

相変わらずレフィーユの質問には……。

「それは自分で考える事だよ。」

と、相変わらずのらりくらりだったが、その事がレフィーユにも違和感を感じたのだろう。

「ここで自分が味方なのなら、『墓守り』だとはつきり言えると思っただが？」

そう言っつて、しばらくして、レフィーユはまた考え込むような態度をみせて咳払いをした。そうする事によって、自分が聞きたい事を今から見せるといふ無言の意思表示ではあった。

「……?。」

そして、レフィーユの細く長い目が自分を捉えたまま、その口が自分の聞いて欲しい事に動いた。

「ふーん、さすがにレフィーユ、そこに辿りついたようだね？」

なら、ボクはここであえて、言わせてもらおうよ。

それはキミは考える事だ」

おそらく、アルマの周囲にはセルフイだけではなく、他の治安部員もいただろう。

そんな中で、その答えを出すので、レフィーユはある程度の雑談をして通信を切って聞く。

「これで答えは出たか？」

「想像程度ですが…」

今の状況は、あまりにもシャンテを殺害するには絶好の機会だった。

そんな中をも利用せず、ただホントの静観を行っている。

この状況だけなら、誰でも彼女は味方だと思うだろう。

「レフィーユさん、よく聞いてください…」

『弱ったシャンテを始末する絶好の機会だと思ったのだが…？』

その時の自分には、この質問をぶつけて、どうして『自分が考えなければならぬのか』ようやくわかった気がして、レフィーユに話したが意外とレフィーユは落ち着いていた。

「冷静ですね？」

「ふっ、まだ想像の範囲だからな。」

もうこうなってしまうえば、後手に回るしかないだろう？」

彼女らしいごもつともな返答に頷きながら、次に心配にもなっていたのだろう。

「あとはチエンバレン、次第だな」

「大丈夫ですかね？」

「私では、彼女の自爆は止められなかっただろうからな。」

私が、出来るのはここまでさ。

見届けようと思うさ、どんな結末であろうとな…」

そう言つて、部屋の雰囲気を眺めるように首を左右に振つたレフイーユは微笑みながら言つた。

「まあ、お前は自分の心配するのだな？」

「えっ、どうしてですか？」

何やら意味深げにレフイーユは、笑うだけだったがその意味がわかつたのは、一週間後の事である。

第七十話

その日、エドワードが一人、会見席に座ってフラッシュを浴びていた。

『エドワード 本日 離婚』

今日何度目になるだろうか、いい加減にテロップの共通項を見つけてだすほど、テレビを二人でとある場所で眺めていた。

「結局、別れる事になったか……」

今は昼下がりに、ここのテレビで流れている会見は朝の9時に生中継されたので、昼下がりになってこんな質問をしてくるには彼女も事後処理に追われていたからだ。

会見席には、今、彼しかいない。

(…では、話し合ったと言いましたが、これはご両親方と話し合ったのでしょうか?)

(いいえ、もう、そう言った事をなくした上で、ちゃんとアイーシャと話し合い。決めた結果です)

エドワードは見ての通り、全快とまではいかないが回復した身体で、この会見に臨んでいた。

アイーシャは結局、あの後から姿を見せていない。

（では、そんな勝手な事をして、双方の家の名誉にキズを付く事を考えた事がなかったのですか？）

今回の騒動で無傷でなかったのは誰もいないだろう。

オズワルドにしても、この一週間の間でレフィーユの一件が決まり手となったのかとうとう破産が決まったらしい。

チエンバレンに至っては、シャンテと最後は寄り添う事となったが、彼女への追求は逃れられないだろうし、チエンバレンにもそれは及ぶ。

レフィーユは、あの会見は何かしら波紋を呼ぶ事になるのは目に見えていた。

「ふっ、心配する必要はない。その程度で潰れるほど、私は弱くは無い。

この通り、今回ばかりお前は悪役だが、私はお前は間違っていないと思う。

結果的に良かったのじゃないのか？」

そう言っつていつもの調子でレフィーユは新聞を取り出して、自分に見せる。

確かに『今回ばかり』である。

周囲には知り合いの活躍も記載されていたが、確かに今回ばかり読む気にもなれなかった。

『漆黒の魔道士を倒した エドワードの活躍』

第一面を飾った自分の活躍(?)に、自然に眉間にシワが寄る…。

おそらく、このシワの寄り、次の瞬間、さらに深くなっていくのがわかった。

何故なら…。

「どうした目の描写が眉間のシワで、顔がリットルを表しているぞ?」

『どうやってるのだ?』と聞いてきたが、問題は次のテレビの映像にある。

なおもマスコミが盛り上げるのを狙っているのか、無粋な質問をエドワードにぶつけ続けていた。

最初の内はエドワードも何とか返答をしていたが、とうとう…。

(エドワードさんが不甲斐ないから離婚に及んだ説もあるそうですねですが、その説明はどうしてしないのですか?)

調子に乗ったマスコミがいい気になった。

その時…。

(すこし言い過ぎじゃないかな?)

アルマが影から現れた。

一斉にフラッシュはアルマを襲う、それを想定してだろうか口を覆うように布で隠していたアルマはエドワードに一礼して、マイクを取った。

(どうも、ボクはアルマ、キミ達でいう…カリフという組織の頭領といえ解るかな?)

普段、自分と接している様な調子、その軽い調子と、しかもカメラ目線で答えていた。

(ごめんね、エドワード君、静観を決め込んでいたんだけど、あの子、レフィーユの時には心無い質問のしてたヤツだから、言っておこうと思ったんだ。

あまり図に乗らないでほしいな)

余りの異変に警備員も彼女を取り囲み始めるが、アルマは気にせず答えた。

(キミ、さっきね。

不甲斐ないって言ったけど、エドワード君は、この一週間ずっとアイーシャと話し合って、それで決めたんだよ?)

するとアルマは、エドワードに向いて聞いてみた。

(前の彼だったら、話せなかっただろうさ。

エドワード君、キミは前に比べれば随分と、いい顔つきになったモンだよ。

何がきっかけでそうなれたのか、わからないけど今なら向き合えるんじゃないのかな？)

(あ、あのどつ言うことでしょうか?)

おそらく、その時の光景は、一生忘れる事はないだろう。

「レフィーユさん、一つ、聞きたいのですが『知ってました』?」

「まあ一応、七色同盟の全員は知っていたがな」

(もう自分の名前に縛られる事はないだろう?)

そう言うのと、エドワードは意味を解したようにマイクを取って言った。

(私、エドワード・F…。)

私の名前はエドワード・フォルグナート・ポルテは、本日、アイーシャさんと離婚します)

一瞬、会場が静かになった。

どつという意味か考えたからだ。

『ワールド・ゼロ』、その元の国の名前と一緒に苗字を持つ、その解りやすい意味に…。

「王と名乗る事をやめて2000年も経っているから誰も気には
しなかったが、エドワードはフォルグナート公国の今の皇太子にあ
たる人物だ」

第七十一話

それは学園内でも、騒然となっていた。

皇太子が普通に授業を受けていたのだ、無理もないだろう。

鍋に誘った、五人は凍りついていたが、さらに皇太子をさんざんと痛めつけた自分に至ってはどう表現すればいいのだろう。

「皇太子…、という事は王子さまという事ですよね？」

「どこから声が出しているのだ？」

顔全体が水量リットルになっていた。

「そもそも、お前が誘拐された時、アルマがいろいろ教えてくれたと言っていたから、知っているとは思ったのだがな？」

「これは教えてくれませんでしたよ。」

「という事は王家復興が、アルマさんの狙いだったのでしょうかね？」

「『だった』とは、妙な言い方だな？」

「それはそうですね。」

結局、後手に回ったのは仕方ありませんでしたが、私も貴女も

手が出せない状況ですよ。

日記帳が無くなって、エドワードさんが王家の人だアルマさんの考えもわかりますが、これにあやかって、王家を守るカリフになれるワケですよ。

そんな絶好のタイミングで、この後、彼女は発表もしない訳じゃないですか、レフィーユさんはどう思って見ていたのかと思いついてね」

「なるほど確かにお前の言っていた、墓荒らしという不名誉な名前を抱えたアルマにとっては、このチャンスは最大の機会だ。

どんな考えがあつたか、私にもわからないさ。

そして、王家すら復興しないとすると、さらに疑問が残るさ。

そこでアラバ君」

「なんででしょうか、隊長殿？」

「さつきから聞き耳を立てている、あの後ろ姿はなんだね？」

「あれは前、迷った時に道を教えてくれた土産屋の店員ですね」

しばらくの間、二人は土産屋の前で備え付けてあるテレビを眺めて話をしていたせいか、その店員は気にはなっていたのだろう。

「いい加減に教えてほしいですよ。アルマさん」

その店員は、ゆっくり振り向いて答えた。

「…どこで気付いたんだい？」

「あの時、別行動している私を探し当てたにとしては随分と早い登場だと思ったのもありますが、人間と言うのは自分の一人称を言う時に『ボク』って言ったでしょ。」

『もしかして』と思いましたが…」

「なるほど確かにココなら、今回の動きを眺めるには、これ以上最適な場所はないな」

「レフィーユ、ワザとらしいよ？」

『ふっ』といつものように笑い、レフィーユは立ち位置を変えて逃げ道を塞ぐとアルマは呆れながら答えた。

「キミ達に囲まれて、逃げれると思ってるの？」

「どうだかな、今までが今までだからな？」

「まあいいや、こうなったのはボクが原因だからね。」

じゃあ、ちょっと待ってて、良い物を見せてあげるよ」

すると携帯電話を取り出して、アルマは誰かを呼びつけた。

状況を察するに同じカリフのメンバーだとわかったが、少し違うのはその男が小さなアタッシュケースを持ってやって来ていた。

『ご苦労さま、下がっていいよ』とアルマは事情を説明すると、男は自分達を一瞥してホントにその場を去った。

「レフィーユ、これが何だかわかるかな？」

丁寧にアタッシュケースを開けて、カウンターの上にかけて見せるとレフィーユは驚いた。

「どついう事だ？」

「さすがレフィーユ、これは本物だよ。」

赤色のアルマファイ家、オレンジ色のチェンバレン。

緑に青はエドワードにアイーシャ、そして、藍色のシャンテ、紫色のミン、黒はトラン・オズワルド。

そして、黄色いスカーフ……」

「何故、八色目がある？」

するとアルマはテレビを電源を切って、自分達を手招いて椅子を用意して言った。

「これはボクのお母さん、おばあちゃんが語り継いだ昔話だよ。」

かつて魔力による核テロの危険性を訴える国があった。

それは当然、誰も耳を貸さない訴えだった。

『私の国は安全だ。そんな不徳を誰が起こすか』

そんな意見が一方的に飛び交う中、世界各国の名家、有力者がとある国のその意見に賛同したんだ」

「それが七色同盟…ですか？」

「いや、その時の名前はなかったんだ、極秘でみんなで『虹色同盟』と名づけたそうだよ」

「ふっ、どっちでもいいだろう、そして、彼等の行いは廃核、廃戦記念日と称される行いをするのだな？」

「そう、そして、その後起こった事件が、今回の事件に発展した」

第七十二話

このお土産屋の少し奥で三人が、おそらく歴史が変わるような話をしている。

誰かに聞かれてしまうと、明らかに今後に何かしらの影響を及ぼしかねない会話を自分達はしていると自覚をしている中を通行人が横切った。

レフィーユも視界に入ったので騒がれるかと思いましたが、さすがカリフの隠れ家というのだろうか、完全にこちらからは見えるが完全に影に隠れた彼女を見つけることなくそのまま素通りしていった。

「『とある人物』としておこうか、その『とある人物』が、そこにいた執事に日記帳を手渡したというのは有名な話だね。」

そして、その瞬間が、最も日記帳が『他人』に読まれるタイミングがやって来た」

今でこそ金庫で保管され神聖さを帯びたその日記帳は、当時、最も普通の日記帳だったらしいと、アルマはその時代を思い浮かべながらレフィーユを見た。

「……………」

彼女もずっとアルマを見たままだったが、何も言わなかった。

おそらくアルマはそこまでは言わなかったが、『読まれてしまって

いた』のだろう。

手渡された人物に…。

こう察してしまうと、次に口を開く人物は自分だと自ずと解る。

「ですが、あれは『七色同盟が今から何をするのか』書かれた日記ですよ。

内容を変更する機会があったはずですが、そんなみんなの足を引っ張る内容を変更しないと云うのは、おかしくありませんか？」

「その通り、日記帳を読んだ人物も、当時『虹色同盟』に仕える事が名誉だと思っていたと、ボクの親からも、ボクのおばあちゃんからも聞いてる。

でも、『裏切られた』って言う感情が強かったのじゃないのかな？

その証拠に執事は、ボクの先祖の兄弟のどちらかが殺害する至ってる。

そして、その目標が兄か弟かわからない片割れに向かった頃、その執事にとって予想外の事が起きてその子は『助かった』。

その人物が影で組織していた…」

「…カリフか」

レフィーユのいう事に何も言わずアルマは頷いた。

「当時、カリフは二つに分かれてなんか無い。

『影で組織していた』というのは頭領も、その時のお父さん、つまりボクの先祖が勤めていたそうさ。

そして、あの事件テロが起こった。

当然、頭のいない組織は分裂、分散の危機に至りそうになったけど、跡目がいたから何とか持ちこたえそうだった。

でもカリフ（かれら）が執事を前にして、つきつけられたのは、そんな裏切り行為、多くの仲間は執事側に付いた。

そして、ボクの先祖に仕えていた執事は…彼の息子を『虹同盟の一員』の証しようとした」

「バカな、誰かが気付くはずだ」

それに首を振ったのはアルマだった。

「そうだね、だけど、今度はあちらはカリフを手にしてた。

当然、キミのように、七色同盟の一人の『誰か』が騒いだ。

けど、始末された。

レフィーユ、ミンが殺害されたのが『この事件』の始まりなんかじゃないんだよ」

あえてアルマは何色の人物がこの行為に及んだのか言わないのは、

あまりにも大きな問題、一個人がなんとか出来る問題じゃなくなっていたのだろう。

そして、その何色かわからない『誰か』を始末して、最悪な事をさらに生んだとアルマは言った。

「今度は身内も兄弟もいない…。」

そして、考えあげたのは、カリフの子供をその跡継ぎにする事だった。

「それがシャンテさん…」

「ここまで来ると、一般レベルで異変に気付くかもしれない。

だけど、日記帳はここで利用された。

一番、脅しやすい人物を探し当てる事が出来たんだ。

今回も似たような事件が起きてるけどね」

緊張が張り詰めた空気を何とかしようとしたのか、アルマは軽い調子で笑みを浮かべたがレフィーユは黙ったままアルマに答えた。

「なるほど、だから『名誉などアテにするな』か？」

そんな皮肉を込めて…。

「情報操作がうまくいけば、意外と矛盾なんて破棄できる。」

それを指し示すように、その人物は足場を固めて行き。

とうとう七色同盟と名前を変え、その一員として生き延びた。

言っておくけど、こちら側のカリフとしては何もしなかったわけじゃないんだ。

影で様々な抗争があったそうだ。

様々な小細工しゅうがきに、命のやり取り。

でも、あまりにも強大になった相手に、適うわけもなく、その行いは『墓荒らし（カリフ）』といわれるようになった。

そのせい…なんだろうね…」

「どうしたのですか？」

「ボク達にも変なプライドが生まれていた。

オズワルドが自分が七色同盟の中心人物である事といったことにプライドがあるように、墓荒らし（ぼくら）にもいつか墓を守るモノとして、返り咲くなんて、プライドが生まれてしまったんだ」

「『生まれてしまった』ですか、ですけど、こういう事に陥っただからこそ、プライドを持つ事が大事だと思うのですが？」

するとほんの一瞬、アルマが黙ったというより、息を呑んで緊張したのに気付く程の間だった。

「それはミンを見殺しにしても、持つモノなのかい？」

『ごめん』

ただ一言、そう言ってアルマは辛そうに自分達を見た。

彼女はカリフの頭領は自分であるのに、その事件が起きるだろうと予期もしていたらしい。

「守ろうとしていた、でも、ボクの見解なんて誰も聞かなかった。

『お前は頭領とはいえ、まだ若いからわからないだろうが、大局を見る』

…なんてね。

アラバくん、拉致する前に感じてたかも知れないけど、へたくそな尾行だっただろう、それだけカリフお得意の技術も落ちていた。

そして、年功序列も確執があつた組織はそんな名誉だけが先走つて、どこかの求婚マニアと一緒にたんだ…。

その時の日記帳も読んでいたボクにとって、それこそ大きな『裏切り』だった。

でも、ボク一人ではどうする事も出来なかった。

そこでボクが選んだのは、アラバ君、キミだった。

ボクは昔からキミの事を知っていたのは話したよね…。

そんなキミを利用する事で、ボクは三つの計画を実行しようと思
論なんだ。

一つ目は、前に言ったようにレフィューにシャンテ側のカリフの
存在を見せる事。

二つ目は、この通りエドワードに王位を戻し、日記帳に変わる新
たな象徴として、ボク達のカリフが表舞台に立つ事にあつた。

三つ目は……」

それを言い終えた瞬間、レフィューの目が鋭くアルマを睨みつけ
ていた。

正直、自分でもアルマに利用されている感じもしていた。

いつもホントの事を話すとも思えもしなかったが、いざ、ホント
の事を聞くと吸い込む空気が冷たく感じた。

「どこかのタイミングで、アルマさん側、古参のカリフを始末……
ですか」

第七十三話

「だがそれならおかしいではないか、最初の目的はとにかく。三つ目の古参どもを始末するのも、お前の狙いだとわかるが…。」

確かにエドワードが王子だったというのを公表した。

しかし、王室の復興は語ってはないだろう?」

「よく気づいたね、それはボクの賭けだったんだ。

あの当時、古参のカリフの判断で方針が変わるくらい腐敗していたと言ってもいい。

繰り返すようだけど、ミンも殺された手前、何とかして彼等を始末しなければ、七色同盟はもつとめちゃくちやになると思った。

でも『まだ』ボクにも良心があった。

その時にはアイーシャが捨てた日記帳が手元にあつたのを利用して、ボクはこう聞いてみたんだ。

『日記帳はこんな感じで破棄される可能性がある。』

エドワードに王位、王室を復活させて、傀儡にすればボク達にとつて今後、優位に立てる』

とね…」

「だが思惑は外れた。」

だがアルマ、お前はそんな理屈で大勢の人を殺す計画立てたとい
うのか？」

頷いたアルマに、今にもレフィーユは掴みかかろうとしていた。

でも、そうしようとしなないのは、アルマがずっと彼女を見ていた
からだろう。

「そのとおり、もう起こした手前、言い訳はできないよ。」

あの子にも悪いことをした……」

いつものようにはぐらかす気もなく、そんな事を言うアルマの顔
はとても澄んでいた。

「タイミングは君達がよく知っているだろう。」

でもあの時、捕まった彼女がボクの隠れ場所を教えたんじゃない。

ボクがもらした（リーク）したんだ。

古参どもを始末出来る、これほど絶好の機会を逃すワケにはいか
なかつたからね。

狙い通り、調子に乗った老人カリフは全滅した。

後はキミに協力する事で味方である事を演出すれば、シャンテ、
そして、シャンテ側を排除すれば計画は誰にも実感のわく事がなく

実行される。

「だけど目の前に広がっていた光景は、あまりにも違いすぎていた」

「光景？」

「ああ、キミとエドワード、あまりにも実力差のある戦いだっただ。

意地だけで立ち上がるエドワードを容赦なく打ち伏せ、手加減な
んかなく何度も倒す。」

でも、意地だけで立ち上がるエドワードを見た時、ようやく彼に
気づかされた。

「ボクらが守るべきだったのは名誉なんかじゃなかった。」

部下が最後まで口を割らなかった事に微笑んでいた事に、エドワ
ードはどうしてアイーシャにこだわり続けるのかが、ようやくわか
った……」

アルマは悔いるように拳を握り締めて答えた。

「意地だったんだ」

大きくため息をついたので、どこかで見たイヤリングが光に反射
した。

「すべてを始末して、ようやく気づいたんだ。」

意地があるから守ろうとすることが出来ると、意地があるからボ

クらはいままで戦ってこれたんだって
ね。

今さら許してほしいなんて言えないけど、でも、さらなる腐敗を
避けるにはこれくらいしか出来なかった」

「…これから、どうするつもりだ？」

「そうだね、罪を滅ぼしたんだ。罰を受けようと思っよ」

まるで死を覚悟するように言うので、ようやくこの会話が何かし
らの方法で、アルマの仲間に聞こえるようにしてあるのだろうと。

そう思った時、腕を組んで答えた。

「気に入りませんね」

自然とあっさり答えた。

おかげでアルマに『何だって？』と聞かれてしまったが構わず答
えた。

「オズワルドさんにしたり、貴女にしてもどうして七色同盟とい
う人は足掻くというのを知らないのでしょうかね。」

当初の計画を実行しないなら『全てを聞かせた上で自分が死ねば』
全てが解決するとも思っているのですか？」

「でもどうすればよかったのかな、今度ばかりは象徴である日記
帳すら、どこかに行ってしまった。」

もう象徴はない、新しく作られた『エトワール象徴』も利用する機会を失った。

今の彼等にあるのは怒りなんかじゃないよ、消失感…。

この殺意は人を殺すのも先人達が示しているじゃないか？」

「なら、死ねばいい、ただし、条件がありますが…」

第七十四話

「恐ろしい話だったな」

自分の車に向かいながら通行人に自分の存在を自覚させつつも、レフィーユは、もう一度、タンカーに振り向いて言った。

「おそらく誰にも止められないタイミングだった。

エドワードが断らなかつたら、どうなっていた事やら……いや、アルマは試したのだろうな。

もう昔のエドワードかどうか、世間に知らしめたかった。

それが出来るようになったのは、お前のおかげだ」

『さすがだな』と感心しながら、一つ疑問が浮かんだのだろうか
レフィーユは自分に聞いてきた。

「アルマには別の役割を与え、アルマの部下どもには新たにカリフを名乗らせるまでは領ける。」

しかし、それでは再び今回のような事件が起きる可能性はないのか？」

「それはわかりません。」

ですが、しばらくはほとぼりが冷めるまでには時間が掛かるでしょうし、下手に動けば何かしら疑いの目を持つのが今の世の中です

からね。

彼等には日記帳を待たせて『日記帳を取り戻したのはカリフだ』なんて名目を持つのが精一杯でしょう」

「それに『本物かどうかの役目をシャンテにやらせる』というのにはどういう狙いがあるのだ？」

「シャンテに対しての世間の反応を和らげるといのが狙いなのですが。」

まあ当然、そこで裏工作が行われぬか睨みを聞かせるのはレフイーユさんの役目ですが、お願いしてもよろしいでしょうか？」

「それくらいの事くらいはやってのけてみせるさ。」

だが、そしてアルマにアイーシャの行方を捜させるか、お前がそこまで見通しているとは…。

お前のその慧眼^{けいがん}、恐れ入るな」

「え、アイーシャさんって、行方不明だったのですか？」

「知らなかったのか？」

「てつきり部屋に閉じこもっているものだと思ったから『エドワードさんとアイーシャさんと話し合う機会を与えてほしい』と頼んだのですが…」

レフイーユは、呆れたように肩を竦めたが、そのため息をつく様

はそれほど気にしてはいないのだろう。

「まあ、情報は制限されていたから、仕方がない…か…。

さて、困ったな。」

お前は色々と手を尽くしているようだが、私はどんな事をさせられるのだろうか？」

「どついつ事でしょうか？」

「核弾頭のある施設を教えた、先祖を持つ私だ。お前はどんな罰を私に与えるかと思つてな？」

「レフィーユさん、言いませんでしたか、私はそんな事を気にはしませんよ。」

ま、まあ、私としては、七色同盟の誰がなりすましているのかが気にはなつてますがね？」

「ふつ、虹ひがひに存在しない色を当てるのにそんなには時間が掛からないはずだ。」

それに結局、私達の先祖が核によるテロを起こした事には変わりない…。」

「ですが、おかげで廃核、廃戦を招いた…。」

「簡単に言ってくれるモノだな」

「ですが、それでいいじゃないか、貴女がどれだけ落胆しているかはわかりませんが、残念ながら私は二千年前に起きた事件を裁けるほど大した人間ではありません。」

大事な事は、忘れない事ですよ」

「忘れない事？」

「『事実』だから、なのでしょね。」

どうして日記帳は改ざんされずに残ったのか、確かにその仕えた人が裏切られたと思って殺人に至っても『事実』だから。

良心があつたから、改ざんされなかつたと思えてならなかつたのですよ。

改ざんしないのは、自分も後悔があつたとか…。

その世代が増長して、今みたいに調子に乗るようなことがあるから、改ざんが出来なかつたと思うのですよ。

そう考えると、私は貴女を裁く事なんかもどこにもないと思えるのですよ。

それは理由になりませんか？」

レフィーユは何も言わずに、自分のいう事を聞いてくれた。

そして、ため息をつき。

「…どうして、私の知っている男というのは、遠回りな道を選ぶのだろうか。」

お前にしても、エドワードにしても…」

エドワードはオズワルドの事業危機を多額の支援で救ったらしい。

『七色同盟だから、理由は知らない』

そう言って、アルマから聞かされたであろう事実を受け入れながらも…。

それを知るのは、後の事になるがレフィーユは自分を見つめて答えた。

「いつでも言えばいい、お前なら私は奴隷にでも何でもなってるわ」

「まるでゲームのような言い方ですね？」

「ふっ、何のための回覧板騒ぎだと思っている？」

「なら、貴女にいつも付きまとっている人を慰めるとするのはどうですか？」

「私としては、放っておきたいのだが？」

「ですが、私達ができるのはコレくらいな事しかできませんよ」

するとレフィーユは肩をすくめながら答えた。

「ふっ、まったくだ」

そう言って、レフィーユは車のエンジンを掛けた。

……。

そうして、全てが終わり数週間が過ぎた頃。

白鳳学園の生徒達と一緒に映った写真立てを眺めているエドワードに一通の手紙が届いた。

『こんにちはエドワードくん』

ある人から頼まれた探し物が見つかったので、簡単な挨拶は省くよ。

アイーシャは見つかった。

すぐにでも会わせてあげたいけど、ボクは思う限り、彼女はキミに合いたがらないだろう。

彼女は今、生まれも家柄も両親に剥奪された。

ただ一人、生き続けようと覚悟している。

それこそ今のキミが、自分の名前から逃げないと覚悟を決めた以上……。

もう出会う事もないだろう、でも、キミに今を捨てて、彼女と向

き合つ覚悟があるなら……』

その先は破られていた……。

レフィーユはエドワードの行方の捜査に関わって欲しいと、捜査を頼まれたが……。

協力する気など、どこにもないだろう……。

……おしまい。

第七十四話（後書き）

どうも高速左フックです。

「2nd」終わりましたが…。

長かったですね、すいません。

これを書いている間、様々な事が、あつたせいもありますが純に作者の力不足です

まどろっこしくて、すいません…。

暖かい目で見てください、幸いです。

次回もそれなりに頑張りますので、今後ともよろしくお願います

感想もお待ちしております、でわでわww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5122/>

荒んだ世の中での愉快的学園生活 2nd

2011年11月3日15時12分発行